

猿小場遺跡

—弥生時代後期・平安時代の集落を中心とした—

長野県飯田長姫高等学校建設用地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

1980.3

長野県飯田長姫高等学校
長野県飯田市教育委員会

猿 小 場 遺 跡

—弥生時代後期・平安時代の集落を中心とした—

長野県飯田長姫高等学校建設用地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

1980.3

長野県飯田長姫高等学校

長野県飯田市教育委員会

発刊を祝い

飯田長姫高等学校長 宮内 敏

飯田長姫高等学校の移転改築の議が起きてから、約十年に満たんとしています。関係各位の特別のご尽力により、昭和53年3月末に、矢高原地積の土地、45,552平方メートルの買収が完了いたし、其所へ昭和54年度から3ヶ年計画で、新校舎が建築されることになりました。

この地は予てから、猿小場遺跡の一部として、古い住居跡のある場所とされていましたので、埋蔵文化財保護の立場から、発掘調査をいたすことになりました。このことに就いては、飯田市教育委員会にお願いし、市の委託事業として進めて頂くことになりました。調査団長には、佐藤勝信先生をお願いして頂きました。

グリットやトレント調査の結果、住居跡は鼎町地積に当る校舎建築予定地と、飯田市地積に当るグランド予定地の二区画に大別されました。第1次計画として、校舎建築予定地の発掘調査を、昭和53年12月に行ないました。県教育委員会文化課の、関孝一指導主事さんが、主として現場の指導に当って頂きました。第2次計画として、グランドに予定されている部分の発掘調査は、昭和54年7月から、佐藤先生直接指揮のもとに進められ、8月に完了いたしました。

これらの結果、平安朝期から鎌倉期にかけての、貴重な住居跡や遺物が多数出土しました。発掘された住居跡は、再び大地の中へ還るわけでありますが、千年も前の吾らの祖先の地に、ほどなく近代的建築の校舎が建たることを思うと、歴史の巡り合わせを感じないわけにはまいりません。学校にとっても、ここで学ぶ生徒にとっても、この土の重みをいつまでも忘れることができません。

今回報告書が出版されるに当たり、この大事業を受けて立ってくださった飯田市教育委員会、何かとご協力を頂いた県教育委員会、指揮をとられ総括をなされた佐藤先生らのご労苦に対し、衷心からお礼申しあげる次第であります。同時に、雪の日も、雨の日もまた炎天の日にも、黙々と土を掘り続けてくださった各位に、心から感謝の意を表わすものです。

例 言

1. 本書は長野県飯田長姫高等学校建設に伴う猿小場追跡発掘調査報告書である。
2. 本書は報告書作成の期限があり、このため調査結果についての十分な検討・研究がなされず、資料提供と問題提示の報告となっている。
3. 発掘調査は昭和53年度に1次調査、昭和54年度に2次調査が行われたものである。1次調査は関指導主事の指導により、調査員塩沢・佐々木・山下・宮下・佐合が遺構を分担調査し、その遺構、遺物の作図・製図・執筆を分担し、調査日誌は塩沢が、また遺構外出土遺物を小林が分担執筆し、文末にその文責を記した。1次調査以外は佐藤が執筆を担当した。
4. 2次調査の遺構実測図作成は佐藤・牧内が、遺物作図は佐藤、遺構・遺物の製図は田口が分担した。
5. 写真撮影は1次を除く、それ以外を佐藤が分担し、本書の編集は佐藤・小林が担当した。
6. 遺構実測図のうち、1次調査では遺物出土状況№は遺物図№を表わしている。2次調査では遺物出土の床面よりの高さをcmで（床面出土は数字を略す）表わし、ピット内または横に付す数字は床面よりの深さをcmで表わしている。また縮尺は図示してある。
7. 遺物挿図は1次調査では本文中に、2次調査では本文末に1括記載した。
8. 出土遺物は飯田市考古資料館に保管してある。

目

次

発刊を祝い	1
例　　言	2
目　　次	3
挿図目次	4
I　環　　境	7
1. 自然的環境	7
2. 歴史的環境	7
II 発掘調査経過	11
1. 確認調査	11
2. 第1次発掘調査	13
3. 第2次発掘調査	14
III 調査結果	17
(I) 第1次調査	17
1. 住居址	17
2. 溝址・溝	41
3. 土　坑	44
4. 集石・集石列	53
5. 造構外の遺物	55
(II) 第2次調査	59
1. 住居址	59
2. 溝址・溝	78
3. 土　坑	79
4. 集石址	82
第2次調査遺物図	83
IV ま　と　め	93
図　　版	97
図版I　遺跡　図版II　確認調査　図版III　第1次調査　図版IV　第2次調査	
平安時代の遺物　各時期の遺物　図版V　発掘調査スナップ	
調査組織	115
おわりに	116

挿 図 目 次

図1 猿小場遺跡位置・地形図及び周辺主要遺跡分布図(1:25,000).....	8
図2 猿小場遺跡土壙図(4トレンチ).....	9
図3 長野県飯田長姫高等学校建設用地内埋蔵文化財所在確認調査図.....	12
図4の1 猿小場遺跡地形詳図と1次・2次発掘調査区域図(1:2,500).....	18
図4の2 猿小場遺跡発掘調査構造分布図.....	19
図5 1号住居址.....	20
図6 1号住居址出土遺物(1:4).....	20
図7 2号・3号住居址.....	21
図8 2号住居址出土遺物(1:4).....	21
図9 3号住居址出土遺物(1:4).....	23
図10 4号住居址.....	24
図11 4号住居址出土遺物(1:4).....	24
図12 5号住居址.....	25
図13 5号住居址出土遺物(1:4).....	26
図14 6号住居址.....	26
図15 6号住居址出土遺物(1:4).....	27
図16 7号住居址.....	28
図17 8号住居址.....	29
図18 8号住居址出土遺物(1:2).....	29
図19 9号住居址.....	30
図20 9号住居址出土遺物(1:4).....	30
図21 10号住居址.....	31
図22の1 11号住居址遺物、焼土分布図.....	31
図22の2 11号住居址.....	31
図23 11号住居址出土遺物(1:4).....	32
図24 12号住居址.....	32
図25 12号住居址出土遺物(1:4).....	33
図26 13号住居址.....	33
図27 13号住居址出土遺物(1:4).....	34
図28 14号住居址.....	35
図29 14号住居址出土遺物I(1:4).....	36
図30 14号住居址出土遺物II(1:4)(1:2).....	37
図31 15号住居址.....	38
図32 15号住居址出土遺物(1:4).....	39
図33 溝1.....	40

図34 溝1出土遺物 (1 : 4)	41
図35 溝2	42
図36 溝2出土遺物 (1 : 4)	42
図37 溝3	43
図38 溝3出土遺物 (1 : 4)	43
図39 3号・5号土坑群	45
図40 溝4・5・6、土坑6・15・16・17・18・19・20・26号	46
図41 土坑17号出土遺物 (1 : 4)	51
図42 7号土坑群I、ピット群	47
図43 7号土坑群II、ピット群、集石3	48
図44 土坑4・8・9・10・11・12・13・14・21・22・23・24・25号	49
図45 土坑8・11・12・13号出土遺物 (1 : 4)	50
図46 集石列1・2・3号・集石1・2号	54
図47 集石列2号出土遺物 (1 : 4)	55
図48 造構外出土遺物 I (1 : 4)	56
図49 造構外出土遺物 II (1 : 4)	57
図49のII 造構外出土遺物 III (1 : 2)	57
図50 16号住居址	59
図51 17号住居址	60
図52 18号住居址	60
図53 20号住居址・26号住居址	62
図54 21号住居址	63
図55 22号住居址	64
図56 23号住居址	64
図57 24号住居址	65
図58 25号住居址	65
図59 27号住居址	66
図60 28号住居址	67
図61 29号住居址	67
図62 30号住居址	68
図63 31号住居址	68
図64 32号住居址	69
図65 33号住居址	69
図66 34号住居址・土坑B2号	70
図67 35号住居址・土坑B1号	70
図68 36号住居址	71
図69 19号住居址・37号住居址	61
図70 38号住居址・溝B1号	72
図71 39号住居址	73

图72 40号住居址	73
图73 41号住居址	74
图74 42号住居址	75
图75 43号住居址	76
图76 44号住居址	76
图77 45号住居址	77
图78 46号住居址	78
图79 满B1号A	79
图80 满B1号B	80
图81 土坑B3·4·6·7号	80
图82 土坑B5号	81
图83 土坑B8·9号	81
图84 集石B1号·土坑B10号	82
图85 21号住居址出土遗物（1：4）	83
图86 18号住居址出土遗物（1：4）	84
图87 27号·17号住居址出土遗物（1：4）	84
图88 24号住居址出土遗物（1：4）	85
图89 25号住居址出土遗物（1：4）	85
图90 38号住居址出土遗物（1：4）	86
图91 39号住居址出土遗物（1：4）	86
图92 30号住居址出土遗物（1：4）	87
图93 40号·43号住居址出土遗物（1：4）	87
图94 41号住居址出土遗物（1：4）	88
图95 42号住居址出土遗物（1：4）	89
图96 46号住居址出土遗物（1：4）	90
图97 20号·22号·23号·37号·住居址出土遗物（1：4）	90
图98 44号·36号住居址、土坑B1号·7号·8号·10号 集石1号出土遗物、16号·20号·29号·37号住居址上部出土石器（1：4）	91
图99 中世住居址出土遗物（19号·32号·33号·34号住居址）（1：4）	92
图100 满址構B1出土遗物（1：4）	92
图101 第2次調査出土小型遺物（1：3）	92

I 環境

1 自然的環境

猿小場遺跡は長野県飯田市松尾1番地ほかに所在する。飯田市松尾と下伊那郡鼎町にわたる洪積中位伊那谷第6段丘上にある。東西1,000m、南北200~300m、標高460~480mの段丘で、松尾側では北ノ原、鼎町分では矢高原と呼ばれている。西から南が高く北から東へと緩い傾斜をもっている。台地の西に矢高神社があり、それより西は狭ばまり、三角形となってこの段丘面は終わる。東は常盤台団地があり段丘面の3分の1は住宅化し、その東は比高30mの段丘崖となって下位の飯田市八幡・久井の段丘面となり、さらに水城・寺所の沖積段丘面となって天竜川に至る。北は高さ30mの緩い段丘崖となって鼎町の中心部をなす松川氾濫堆積地帯となり、さらに飯田市街地に対している。

西から南は高さ5m余の緩い段丘崖となって一段高まり、西側には下伊那農業高校のある稻井面、それより東に延びて、さらに南へと広がり飯田女子短大・三菱電機飯田工場のある八幡原面から南の原面の広い段丘面となる。それより西はさらに一段高まって名古熊面となり、西に延びて木曾山脈の笠松山脈に至る段岡・北方と広大な扇状地が続く。

遺跡の微地形をみると平坦な台地であるが北側に、東側では標高474m、西側で475~476mに一段低い面がある。その境に石垣が東西方向に作られ、一帯は桑園である。石垣を境にし古い時期の木曾山脈より、または飯田松川の氾濫による土石流の堆積が比高差1m余の段を形成している。土石流堆積地帯は舌状に西から東へと傾斜をもって延びており、この一帯の耕土は浅く、すぐに砂疊層となる。桑園開墾時にそれらの石を利用して石垣を築いたものである。土石流堆積地帯の南側はゆるい傾斜をもって南東にかたむいているが、台地の南端部は上位段丘崖下の崖縁堆積によって高まり、黒土の堆積は深い。北側の一段低位面は西側用地境より平坦な地形をなして東にのびて常盤台団地まで続いている。下段面の耕土は比較的深く、中世になっても土石流の押出しがあったものとみられ、中世構築の溝地B1号は水を流した痕跡のないものであるが、土石流氾濫の痕を残し、その時の流路を示す砂の堆積が各所にみられた。

遺跡の地層を概観すると黒土（耕土）の下にローム層が1~3mの厚さにのり、部分的に砂疊層がありその下に飯田松川の土砂があつて伊那層となっている。土層図（図3）にみると上層部においては耕土は砂質の黒土でその下に暗褐色土、褐色土があつてローム層となるのが一般的であるが、部分的には黒色土がローム層の上にのっている。台地の南端部の崖縁堆積は黒土の深い堆積を示している。また第一次調査区の上段端部は耕土は浅く、その下はすぐ土石流の砂疊の堆積となっていた。

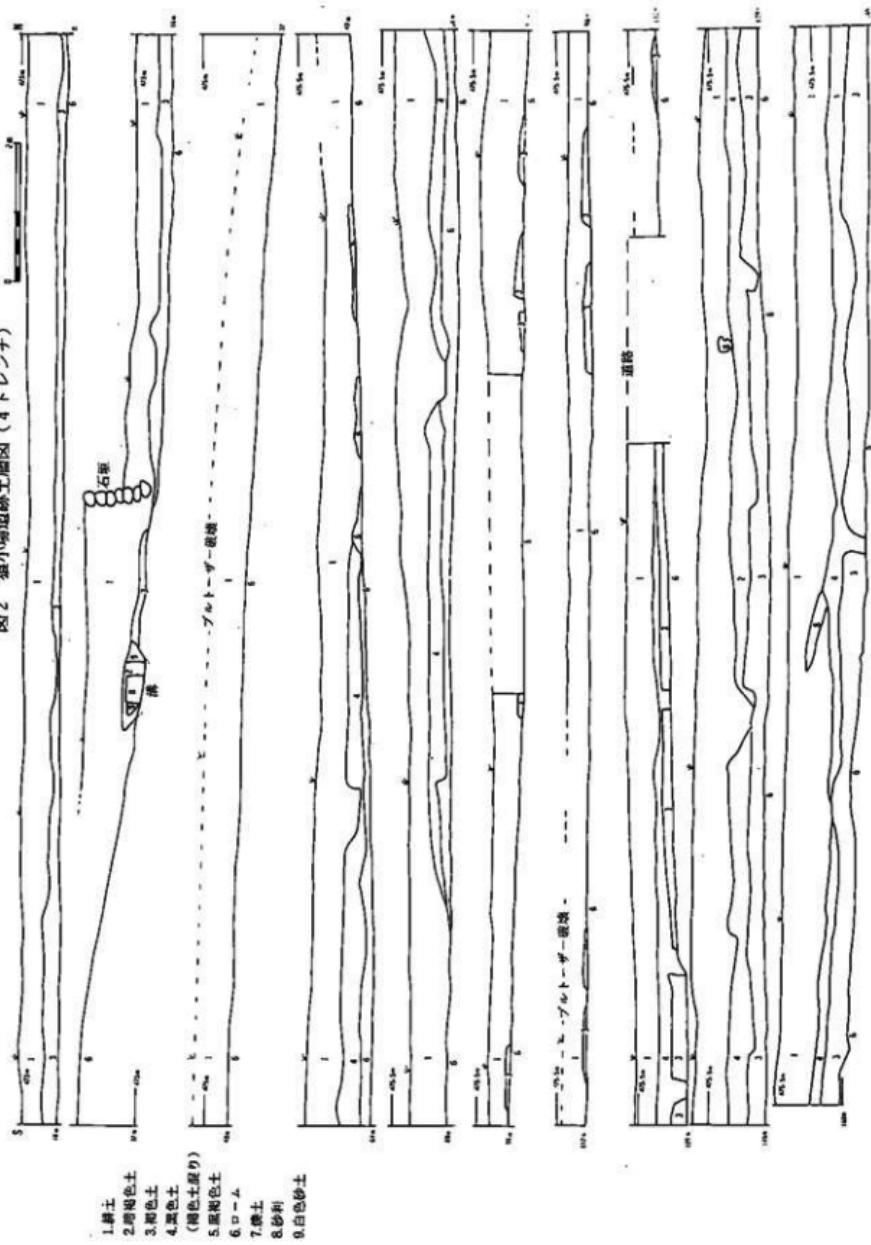
2 歴史的環境

猿小場遺跡のある段丘面には西に矢高遺跡が続き、東の段丘端部に御射山薬子塚の前方後円墳がある。猿小場遺跡は元来鼎町地籍分の遺跡となっているが、矢高原から常盤台団地一帯に遺物の散布がみられ、同一地形に広がる遺跡である。農道を境にした飯田市と鼎町の行政区画によって遺跡を別けることのできない地形にある。今次調査では、追跡の中心は飯田市松尾地区にあり、このため遺跡を猿小場遺跡と統一

図1 線小陽遺跡位置・地形図及び周辺主要遺跡分布図 (1:25,000)



図2 猿小場遺跡土層図(4トレンチ)



することにした。

周辺の遺跡をみると、すぐ北の段丘崖下の松川氾濫地帯では現在のところ遺跡は発見されていないが、西にいくと賀町役場裏では古墳時代または平安時代の遺物が発見されており、一段高位の鼎中学校周辺には黒河内、柳塚、丹木坂遺跡があり、鎌文中期、弥生後期、古墳時代から歴史時代の遺物の出土をみている。東の段丘崖下の松尾南ノ原地区の上溝、新井、妙前は飯田地方における古墳分布密度の最も高い地域でありその一帯より鎌文中期、弥生中・後期から古墳、平安時代にいたる多くの遺物が発見され注目される遺跡であり、寺所遺跡は弥生中期初頭、寺所式土器の標準遺跡である。

西から南に広がる一段上位段丘面には、下伊那郡農業高校遺跡では古墳時代、八幡原遺跡では繩文期、それより南にある松尾南ノ原遺跡では中世館址が発掘調査され、中世線軸天目茶碗の出土によって知られている。名古熊面では地蔵面、地蔵堂、宮久保、行人塚等の遺跡があり、行人塚では繩文土器と炉址が発見されている。

古墳は矢高神社の西250mの段丘の北西端部に大塚古墳が残存し、その段丘崖下の小平地に鞍骨古墳がある。段丘東端には御射山獅子塚の前方後円墳があり、それに統いて茶柄山1号～5号古墳があり、4号古墳は消滅しているが、他は墳丘を残している。南の一段上位の八幡原面の東端部に鼎町では物見塚、松尾地区では妙見山、八幡山、代田山1・2号古墳と並び、代田山2号古墳は前方後円墳である。名古熊面には地蔵堂、行人塚古墳が残存している。東の御射山獅子塚から統いて段丘崖下には上溝古墳群、水佐代・城古墳群、妙前古墳群と続き、前方後円墳は6基を数える。妙前大塚（3号墳）は昭和46年発掘調査により肩庇付窓をはじめ多くの副葬品の出土をみ、現時点では下伊那地方で最も古い古墳の一つと推定されている。

平安時代の遺跡は多く、特に松尾南ノ原の下段面の猿小場と同位段丘にある毛賀御射山追跡では平安時代初期の瓦塔片と布目瓦の多くが発掘され注目されている。それより毛賀沢川を隔てた同位段丘面の駄科北平遺跡では平安時代から中世にかけての遺構群が発掘調査され、特に中世堂址が注目されている。天竜川に接する清水遺跡では弥生後期から古墳時代、平安時代に至る遺構、遺物が多量に発掘調査され、中世では南ノ原遺跡のある台地南端部には信濃守護職松尾小笠原氏の居城であった松尾城跡、毛賀沢川の対岸には鈴岡小笠原氏の居城鈴岡城跡がある。それらの支城が台地上の各所にみられている。物見塚のある一帯は城跡ともいえられているがはっきりしない。

段丘崖下にある松尾鳩ヶ嶺八幡宮の御神体は重要文化財に指定されており、その銘文によって鎌倉時代のものであり、伊賀良庄地頭北条江馬氏によるものと推定されている。また北条江馬氏の館址とみるが、松尾小学校の南の城地籍にあったものとみられている。

座光寺恒川遺跡群は現在国道153号バイパスに伴う発掘調査が進行中であるが、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代にかけての多くの遺構、遺物の発見により、伊那郡衙址との推定もされており、各方面より注目されているところである。

猿小場遺跡の西3kmに中央道路線にかかるて山岸、天伯遺跡があり、中央道遺跡調査により弥生後期から古墳時代後半の集落址が発掘調査され、多くの貴重な資料の出土をみて注目されている。飯田市伊賀良地区の西ノ原遺跡では昭和41年、繩文中期勝坂期の住居址3が発掘調査され、この期の多くの資料を得ている。

II 発掘調査経過

長野県飯田長姫高等学校が、昭和53年度飯田市松尾1番地を中心とする地籍に建設されることが決定し、その用地面積は45,557m²である。そこには猿小場遺跡があり、縄文時代の石器、平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器片、中世の山茶碗等の散布がみられているが、遺跡の範囲、遺構の所在については不明である。このため地籍内埋蔵文化財所在の確認調査の必要にせられた。しかし用地内は飯田市と鼎町が農道を境に行政区画は分れており、調査にあたり、両教育委員会が県教委との委託に関し曲折を経た後、飯田市教育委員会が受託して調査を実施することになった。さらにその確認調査にもとづき、昭和53年度に校舎建設用地内を、昭和54年度に運動場用地内の発掘調査を引き続いて飯田市教育委員会が行うことになったものである。

1 確認調査

昭和53年9月1日から9月30日まで延23日間にわたって行われた。調査区を飯田地籍は東西方向の3本の農道を境にし、北よりA・B・Cの3区、鼎町地籍をD区とした。最も遺物の散布の多いA区西側は、10m間隔に、他は20m間隔に2m×2mのグリッドを設定した。グリッド設定に際しては丈なす草を刈りその位置を決めるために多くの労力を要した。

グリッド調査による遺構、遺物の存在、土層の深さをもとにし、1~10トレンチを設定し、ブルトーザーにより4m幅の表土を排除し遺構の存在を確かめ、さらに遺構検出密度の高いA区に11~13トレンチを設定調査する。No.2トレンチに接続するNo.12トレンチを除き断面図を作図し、各トレンチの土層の状態を記録した。遺構検出後、調査区域と遺構位置の測量をなし、現場確認調査を終える。その後、遺物、図の整理をなし、「長野県飯田長姫高等学校建設用地内埋蔵文化財所在確認調査報告書」を作成した。

この確認調査によって遺物の散布は全域にわたってみられたが、西から南、東側にかけては少なく、また段丘上段面にみられた土石流の押出時による流入とみられる磨滅した遺物もみられた。

遺構はD調査区には発見されず、用地の北側A区に集中しており、B区で中世住居址かとみる遺構とA区につながる溝址、C区では縄文後、晚期の土器片の集中出土をみた柱穴址とみられるが発見されたが、C区遺構は黒褐色土層にあって検出困難なものであった。

遺構所在の中心はA区西側の上段面から下段平坦面である。遺構についてはその所在を確認しただけでその発掘調査はしていない。確認段階で所在を認めた遺構は次のようにある。(図3参照)

住居址 12 …… 古墳時代 1 , 平安時代 9 , 中世 2

柱穴址 1

土坑 5

測址 3

確認調査結果により、A・B区西側の一帯とA区下段平坦面が発掘調査の重点区域とされ、その他全区域は工事中のパトロールの必要が認められた。(佐藤)

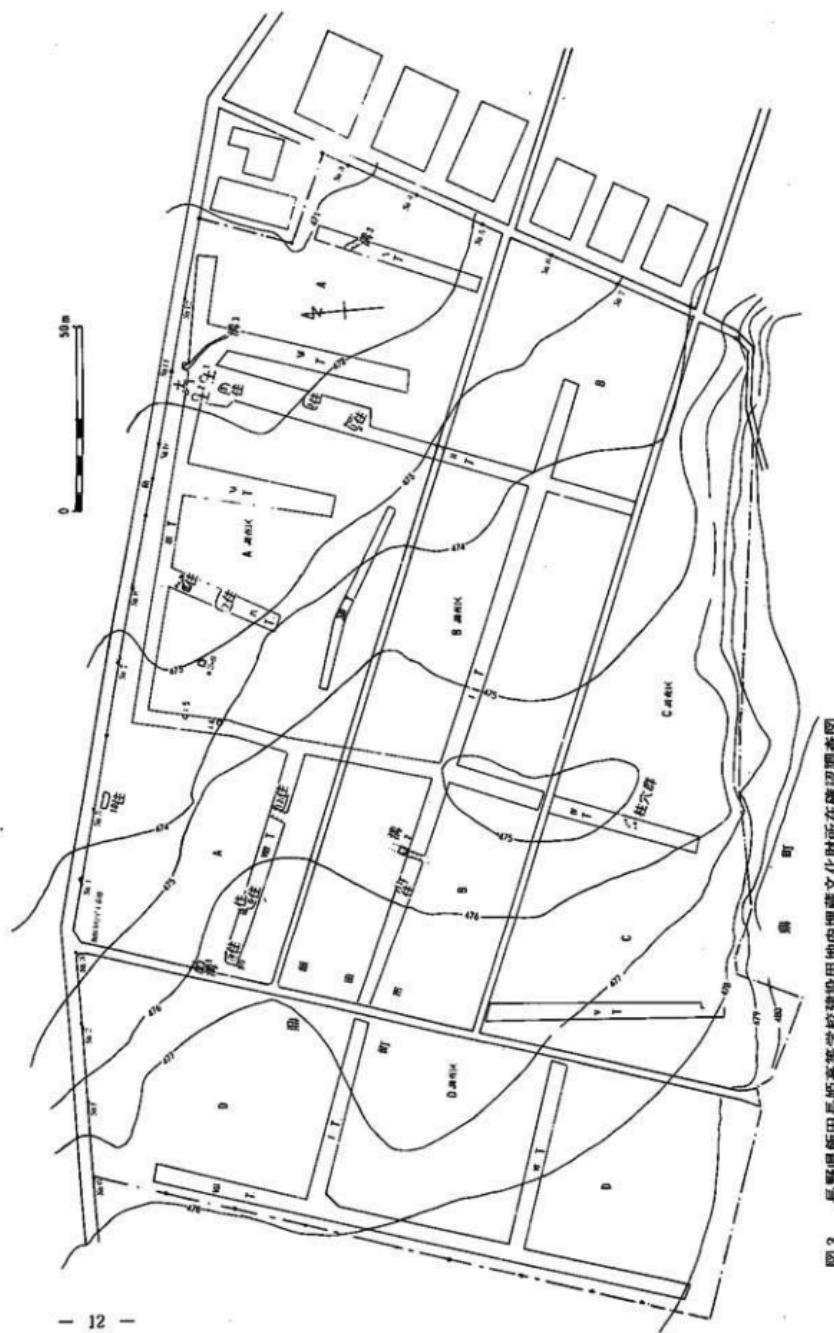


图3 長野県飯田長姫高等学校敷設用地内埋藏文化財所在確認調査図

2 第1次発掘調査

昭和53年度事業として、校舎建設用地内について県教委の要請により、飯田市教委によって第1次調査が行われた。調査は12月8日より12月27日の20日連続で行われ、厳しい寒さの中、毎朝の凍る土を排除しての作業であり、調査には苦労を重ねた。

調査範囲は鼎町との南北を境とする農道より東側65m、北の用地境界の道路より南90mの内調査不能地を除く約5,000m²である。この区域は北の用地境をなす道路より20~25m南に入りて小さな段丘崖があり、石垣となっている。その北側が下段平坦面であり、表土は深い。南側の上段面端部は土石流堆積が幅約20m余の帯状に西から東へと向っている。表土は浅く、すぐに砂礫層となる。それより南側はやや南東に緩く傾く地形をなし、表土は深くなっていく。1次調査区域の地形は複雑であり、追構検出には労苦を要した。調査にあたって、土石流堆積地帯を1区、その南側を2区、下段面を4区とし、確認調査時4トレンチ南側の柱穴群の周辺を3区として調査するが、3区は追構検出ではなく、調査を断念した。

第1次調査日誌（昭和53年度）

月・日	天候	日 誌		
12 8	晴	器材運搬、テント張り、準備をなす		
9	晴	結団式を行ない、確認調査により追構検出密度の高いトレンチ8号、1号の調査にかかる。1住、2住、3住のプラン提出。		
10	くもり 小雨 晴	3調査区IVトレンチ南側柱穴群とみる一帯の調査。追構なく調査を断念する。 1住、2住、3住の調査。小型バックホーンにより盛土排除作業。 溝1号延長調査、4住検出調査。	土坑1.2.3号検出掘り上げ	
11	晴、北風強し	調査 5住検出調査、1~5号住居址完掘。作業…溝1を追って排土を進める		
12	晴	集石が出、作業手間どる	作業…排土後の追構検出作業	
13	晴	調査	作業…溝2.3号検出調査	
14	晴	調査 大型ブルドーザーで盛土、表土排除。作業… 調査		
15	くもり 晴	調査一南北80mの確認 作業 6住、7住検出	調査、掘上げ 北の盛土地点でやめる 土坑8号検出（背磁片あり）	
16	晴	掘り上げ 小型ブルドーザーにより排土作業 集石列を検出	造構検出作業	
17	晴	溝1号、2住・3住測量 作業 カマド調査	土坑6号、溝4検出 長姫高土木科生徒により500分1回測量開始	
18	晴	測量。1住・6住 溝3測量 作業	8住、ピット群、土坑検出	
19	晴		作業 全員排土作業 住居址2と土坑13を発見	

月・日	天候	日誌
12・20	晴、土凍る	造構検出作業、上解のため苦労する。 9住～11住を検出。土坑10号～26号検出。
21	晴、(-6.3°)	8住、集石列、土坑群、ピット群調査、掘上げ。 9住～11住の調査 松沢市長視察
22	晴のち曇り	9住・10住・11住調査、9住掘上げ。土坑9～12号、16～20号調査掘上げ。
23	曇りのち雪	調査掘り上げ、土坑13～15号、21～24号調査掘上げ。 12住・13住・14住を検出、雪のため作業午後3時で打切る。
24	晴	12住～14住の除雪作業、調査。14住プラン検出に苦労する。 造構分布測量
25	晴	12住・13住・14住の調査。14住は火災の住居址炭火物多し。 上位面崖端部近くを調査するが造構なし。12住完掘、測量。
26	晴	溝1号の写真撮影、一霜柱を除去し撮影に苦労する。各造構写真撮影。 13住・14住の調査。13住完掘、測量。11住は貼床となっており、掘り下げ調査 15住を検出調査、壁は削られてなく、完掘、測量。
27	晴のち曇り	14住・11住調査、完掘、測量。造構分布測量を終え、現場調査終る。 器材、テントを撤去する。

現場調査以後、遺物、造構図の整理をなし、1次調査分についての報告を各分担についてまとめる。
(塙沢)

3 第2次発掘調査

昭和54年度第2次調査は運動場用地内の調査であり、第1次調査の東側110m、北の用地境道路より南25～60mの下位段丘面の約5000m²についてである。昭和54年7月10日・11日確認調査時の盛土をブルトーザによる排土作業を行い、12日より調査にかかり、9月6日までの延49日の発掘調査である。猛暑の時期であったが、時々小雨があったが天候に恵まれ、順調に調査を進めることができた。(佐藤)

第2次調査日誌(昭和54年度)

月・日	天候	日誌
7・10	晴	確認調査時トレント盛土の排除、ブルトーザによる。
11	曇り時々雨	西側約2分の1の表土を排除(確認調査4トレント西)
12	晴	器材運搬、テント設営、グリッド設定。
13	晴・くもり	北西隅よりグリッド調査、1次調査の溝1号につながる溝検出。 ブルトーザ排土後の土は乾き堅く、苦労する。
14	朝のうち雨 のちくもり	雨後の土はやわらかく、造構検出作業は進む。 16～20号住居址の存在を黒土のおちこみで認められる。

月・日	天候	日誌		
7・15	くもり・雨	日曜休み		
16	曇り雨強し	検出住居址周辺の排土作業		
17	くもり・雨	17~20住のプラン確認調査、23~27住を検出プランを確認。		
18	朝雨のち晴	28~33住を検出、住居址周辺の排土作業		
19	晴・くもり	34~37住検出、排土作業		
20	曇り・小雨	27住の調査—全面に木炭・灰があり、床面に著しい焼土あり、灰軸片・鉄鋸出土 136住の調査—遺物なし。		
21	曇り・小雨	完掘測量。完掘—東壁より石鍬1出土のみ。 23住の調査にかかる。	溝B1の検出調査 (部分調査)	
22	晴	日曜休み		
23	くもり・晴 暑い	調査、完掘測量 25住の調査にかかる—灰軸・土器片出土	測量	調査
24	晴暑さ厳しい	調査 33住調査—山茶駒床面出土		
25	晴	完掘 29住調査 32住調査—青磁片床面出土	完掘	測量
26	晴・雷雨	29住掘上げ 35住調査—中世とみる遺物なし	32住掘上げ 21・24住調査にかかる—ともに灰軸片多し	
27	晴	29住測量、35住完掘	調査—平安遺物多し。	24住覆土断面調査
28	曇り・午後にわか雨	34住調査 28住・30住・31住のプラン検出作業	21住覆土断面調査、遺物多し。 完掘測量	
29	くもり・晴	日曜休み		
30	晴・暑い	調査掘上げ、測量。28住・30住調査 平安遺物少なし	調査、カマド検出 帶金具出土	
31	晴・暑い	31住調査にかかる 22住調査	完掘測量。調査。 17住調査、芋町藏穴のため 輪郭を残すのみ	21住完掘、測量
8・1	晴・猛暑	完掘測量	完掘	45住検出、調査、遺物なし
2	晴	46住検出調査平安遺物多し	測量 掘上げ、測量、弥生後期とみる 17住調査、芋町藏穴のため 輪郭を残すのみ	18住プラン検出
3	曇り小雨あり	調査	大部分破壊	調査、平安遺物多し
4	〃	覆土断面調査	16住のプラン検出にかかる	石組あり、調査
5	晴・くもり	日曜休み		
6	晴曇り小雨	ほぼ掘上げる。カマドは崩されている。帶金具出土。	調査	石組測量
7	午前雨はげしく午後晴夕方雨	午前作業中止、午後作業 16住調査	19住・20住・26住・37住 土B3プラン検出	測量

月・日	天候	日誌		
8・8	晴・暑い	完掘測量。	完掘。 19住・37住調査。	石をはずし、完掘、測量
9	" "		19住・20住・26住・37住調査	
10	" "	測量。	調査、調査、完掘、掘上げ	
11	" "	38住・39住・40住のプラン確認調査。	測量	溝B1の東側調査
12	" " 夜雨	38住調査。39住調査掘上げ測量。		
13	くもり・晴	全体写真撮影、調査作業終了休む。		
14~16		盆休み		
17	晴・暑い	38住掘上げ、測量。カマド調査 平安遺物多し。40住とみるを調査するが荒れ多く不明 (確認調査時石製模造品有孔円板出土点)		
18	曇り時々雨	38住カマド新旧あり断面調査。 39住カマド調査。 土B6・7号検出。	荒れのため住居址とは不明、土B4検出 土坑B3・4・5号完掘、測量。	
19	晴・雨	日曜休み		
20	朝まで雨 晴	土B6・7号検出、掘上げ測量—繩文後土器出土。 各カマドたち割調査。 38住・39住東側の盛土ブルトーザで排除。		
21	くもり・雨	遺構検出の排土作業	40住を検出	
22	晴午後雷雨	土坑B8・9号検出掘上げ—中世陶片出土。	調査、土師器、須恵器片僅か(平安)	
23	" "	測量。遺構分布測量。 40住の南に接して漆黒の落ちこみあり排土作業	完掘、測量	
24	晴・俄か雨	午前中ブルトーザ排土作業。41住・42住・43住検出。住居址とならず、集石となる		
25	曇り時々雨	排土作業。溝B2の調査—溝は水害時の流路で消える。		
26	晴・くもり	日曜休み		
27	晴・終了時 より雨	41住調査—型土断面調査。遺物多し、平安期。溝B1の調査。		
28	晴	前夜の大雨のため排水作業。調査。	42住調査—覆土深く、平安期遺物多し	
29	晴・くもり	完掘、測量。	調査、灰釉陶器多し	
30	朝のうち雨 くもり・晴	43住のプラン検出作業	完掘	
31	晴	調査、小型の住居址、遺物少なし 平安期。	測量 44住を検出、繩文期	溝B1調査
9・1	晴・曇り・雨	完掘、測量。	調査、土器はなく、打石斧数点出土、測量。調査	断面図 をとる
2	くもり・雨	日曜休み		
3	晴	土坑B10号検出調査。	集石調査—木炭を多く含み東に傾斜する。	調査
4	晴・午後 にわか雨	土坑10号調査、繩文後期 土器片、打石斧出土。	集石調査—集石炉とみる 木炭多し。	溝B1調査

月・日	天候	日誌
9・5	晴	完掘, 測量 41住・42住・43住カマドたち割調査。
6	晴・くもり	矢龜先生一地形, 地質調査 テント, 器材撤収 現場調査を終る。 ↓ 測量

現場調査終了後、数回校舎建設用地工事中のパトロールをなす。

建物の整理、復元、作図、製図、追構図の整理、製図をなし、報告書の作成にかかる。(佐藤)

III 調査結果

(I) 第1次調査

第1次調査によって発掘調査された遺構は次のようである。

住居址 15

弥生後期…2 (11号・14号) 平安時代…8 (2号・3号～6号・12号・13号・15号)

中世…5 (1号・7号～10号)

集石列, 集石 6 溝址, 溝 6 土坑 26

土坑群 3 ピット群 1

1 住居址

1号住居址(図5)

確認調査の際11号住居址としたもので溝址1が約6m西側に位置する。規模は、4.3×3.1mの隅長方形のプランを測る。粘質の褐色土から黄色ローム層に掘り込まれた、竪穴住居址である。主軸方位は、N24°Eである。壁は、傾斜していて、平均20cm前後の壁高を持っているが、壁の状態は、あまり良好とはいえない。床面は、たたかれ非常に良好であるが、凸凹している。柱穴は不明である。床面の中央より北側にかけて石のはいった穴があるが、この穴は住居址に直接の関係はないと思われる。当住居址の、出土遺物は少なく、明確に時期の決定はできないが、山茶碗の破片により中世の住居址である。

遺物(図6)は僅少で、山茶碗と鉄片の出土をみたのみである。1の山茶碗はコネ鉢とみられ、ロクロ成形痕を明瞭に残している。胎土中に微石粒を含み、焼成は良好で青灰色を呈する。2の鉄片はその形態大きさ等不明である。(宮下)

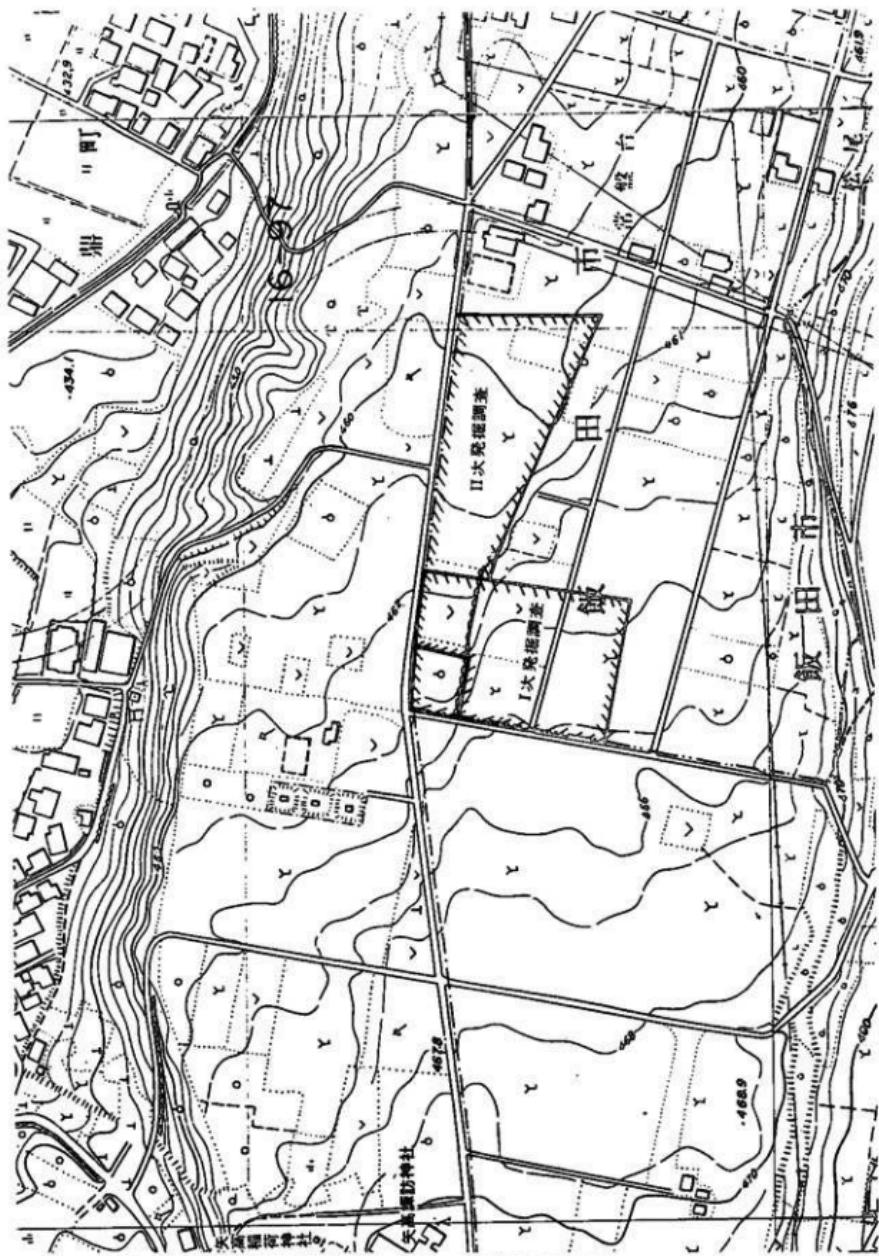
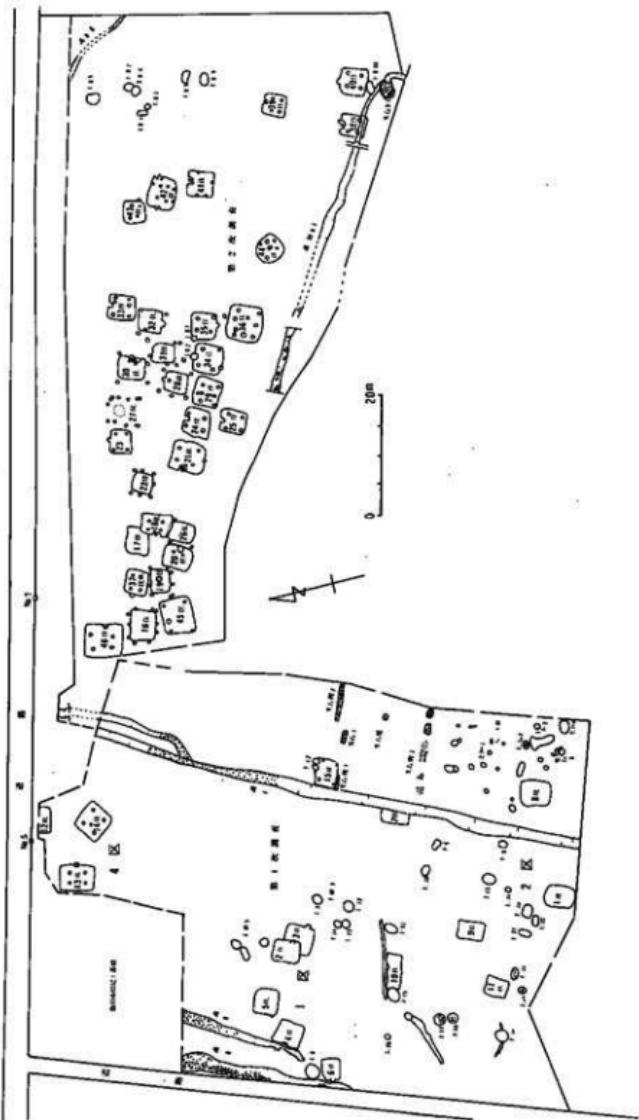


図4の1 猿小場遺跡地形詳図と1次・2次発掘調査区域図 (1:2,500)

図4の2 緊小場遺跡発掘調査遺構分布図



2号住居址(図7)

遺跡の北西寄りに3号住居址を切って造られており、確認調査時に6号住居址としたものである。この付近は遺跡内でも特に表土が浅い所で、検出面は表土より10~20cmの深さであった。

プランは東西約3.7m、南北約4.1mの隅丸方形で、ローム層に掘り込み、壁高は検出面より10cm前後を計る。表土から計っても20~30cm程度の比較的浅い窪穴住居である。壁の状態は不良で、検出に際しては、はっきり検出できない箇所もあった。床面はカマド付近を除いては軟弱であり、黒褐色の覆土とローム面の境をもって床面とした。ピットは4つ検出されたが、いずれも20cm前後と浅いものである。位置からみて、柱穴とは考えられないものである。P1についてはカマド付近にあり貯蔵穴かも知れない。

カマドは東壁のやや南寄りに設けられ、床面をややはりくぼめ設置している。石を両軸先端のみにつかった石心粘土カマドである。煙道は壁面を立ちあがって外へ出したものと考えられる。カマド内焼土は少なく、使いこまれて

はない。本住居址と3号住居址の切り合いの前後は、カマドの残存が最終的な決め手となった。

遺物(第8図) 須恵器、土師器が出土している。総量は少なく、出土地点も住居址内全面にちらばっていた。

須恵器は杯(2)、杯蓋(1)、壺(5)がある。杯(2)は胎土に小石粒を含み、焼もろくよくない。底部は回転系

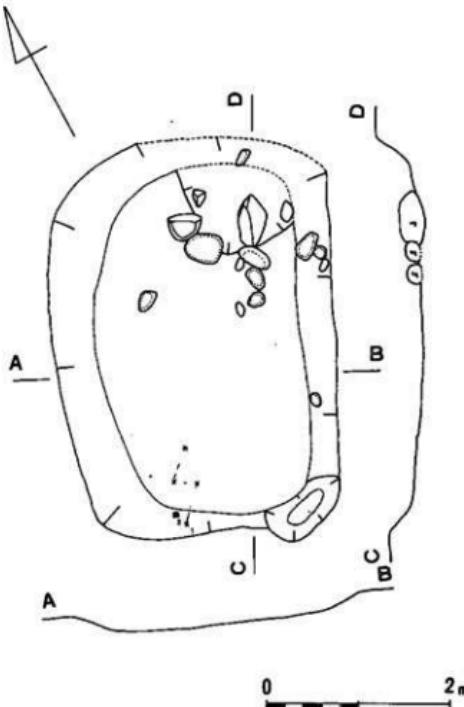


図5 1号住居址



図6 1号住居址出土遺物(1:4)

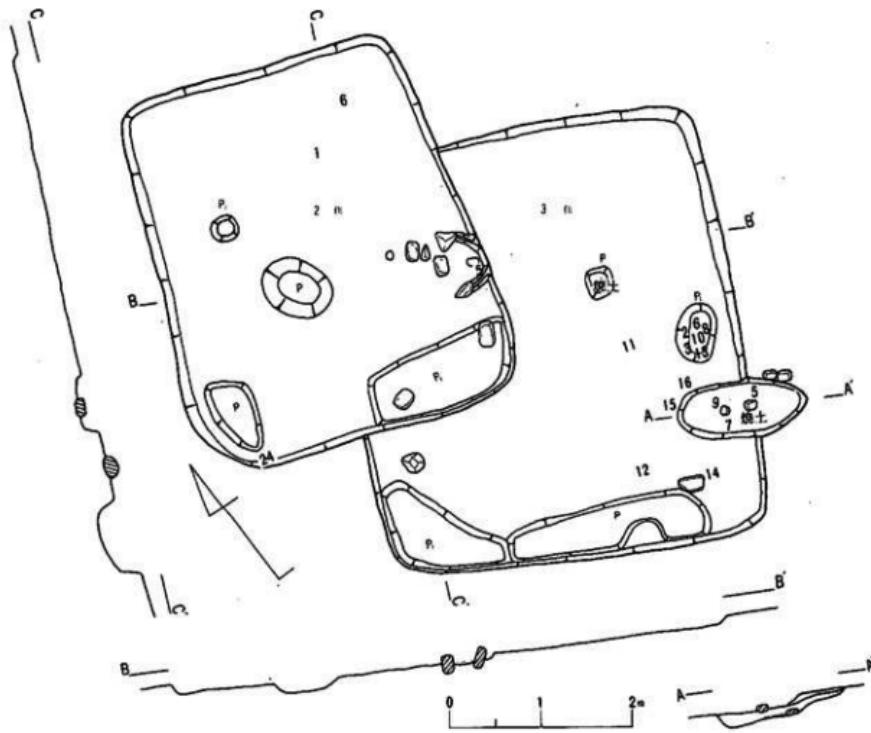


图7 2号・3号住居址

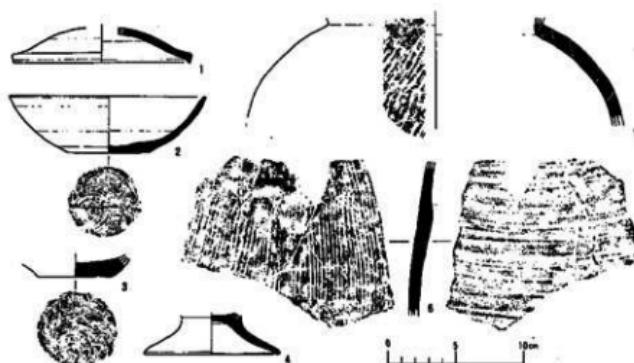


图8 2号住居址出土遗物 (1 : 4)

切を施す。杯蓋は胎土も焼成も良好で、色調も須恵器特有の暗青灰色を呈している。この2点はロクロ引きの痕を残している。甕(5)は胴部のみである。内面に輪積み痕を残し、表面は整形のためのたたき目痕を残している。肩口からは自然釉がかかっている。

土師器は杯(3), 高杯(4), 甕(6)がある。杯(3)は底部のみである。回転糸切痕を残し、内面はヘラミガキを施す。高杯(4)は脚部のみである。内外共にヘラのヨコナデ整形を施してある。甕(6)は胴部破片である。外側は櫛状工具による縁の整形を施し、内面は顕著なロクロ痕が残っている。鳥帽子形の長胴の甕と思われる。この土師器3点は、胎土、焼成共に良好である。

以上の遺物からみて本住居址は平安時代のものであると考えられる。(郷道)

3号住居址(図7)

遺跡の北西寄に2号住居址に切られて造られており、確認調査時5号住居址としたものである。表土と検出面の関係は、2号住居址と全く同様である。

プランは東西約4.3m、南北約4.7mの隅丸方形で、ローム層に掘り込んだ竪穴住居である。壁高は検出面より10cm前後と浅い。床面はカマド付近を除いては軟弱である。ピットは4つ検出されたがいずれも浅い。位置からみても柱穴とは考えられない。4つのピットのうち、P1からは須恵器、土師器の完形、半完形品が多量に出土した。このピットの貯蔵穴の性格を示すものであると思われる。P2からは焼土が検出されている。壁の状態、床面の状態、ピットの状態は2号住居址によく似ている。

カマドは粘土カマドと考えられるが、袖は確認できず、焼土混りの黒褐色土を取り除いた結果、壁に切り込んだ楕円形のピットが検出された。この上に粘土でカマドを作ったのであるが、袖は破壊してしまったものであろう。位置は東壁南寄りであり、2号住と同位置である。

遺物(図9) 遺物は多く、P1とカマド付近に集中する。この住居の性格を示すものとして、ふいごと鉄鋤頭が出土している。鉄鋤はほぼ同じ大きさのものがもう一点試掘の段階で本住居址の位置より出土している。

器の類は灰釉陶器(1)、須恵器(2~7・9)、土師器(8・10~14)が出土している。

灰釉陶器は碗型のものであり、口縁部が強く外反する。試掘の時点で取り上げられたものである。後述する他の器類より若干時代が新しいようであり、流れ込みの遺物の可能性も考えられる。

須恵器は杯(2~7)と長頸甕(9)が出土した。杯は無高台のもの(2~5)と高台をもつものの(6~7)がある。無高台のものはいずれも底部を回転糸切している。ロクロ回転は5の杯を除いて右回転である。胎土、焼成はあまりよいとは言えない。個別にみると、3は腰をしばり体部はロクロ痕を顕著に残し、口縁の外反はほとんどない。2は腰をやしばり、口縁がゆるく外反する。5は底部に糸切を切る1本の刻印がみられ、腰のしばりはほとんどなく、口縁はやや外反する。高台のつくものは堅い焼成である。いずれも付け高台で腰に稜があらわれる。7は口縁がやや外反する。6は腰から高台にかけてのゆがみがひどい。6・7の2点共ロクロは右回転である。長頸甕は頸部のみであるが、胎土、焼成ともによく自然釉が薄くかかる。地元の窯のものではないと思われる。

土師器は杯(8)と甕(10~14)がある。杯は内面黒色のもので焼成は良好である。甕はいずれも長胴型と考えられる。10は小型甕で外面体部は櫛状工具でたての整形を施し、口辺はヨコナデを施している。この小型甕にはススが多量に付着していた。12は木の薬底をもつ。11は体部の内外面をヘラナデ整形し、口辺にヨコナデを施す。13は体部外面、口辺内面を櫛状工具で整形する。口辺外面にはススが付着している。14は口辺部をヨコナデ整形する。2号住の土師甕にはロクロ痕がみられるが、本住居址の土師甕にはロクロ痕がみられない。

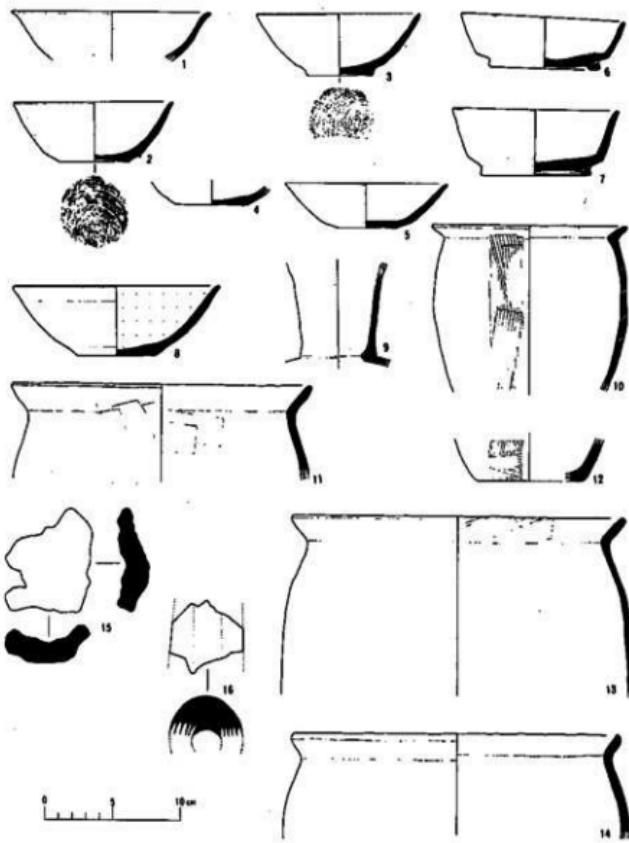


図9 3号住居址出土遺物 (1:4)

以上の出土遺物からみて、本住居址は平安の前半期に位置づけるのが最も適當かと思われる。

(郷道)

4号住居址(図10)

確認調査時4号・9号住居址としたものであるが、9号址はなく、1住居址となった。4.4×3.96m、隅丸長方形の竪穴住居址である。主軸はN50°Wを示す。

壁は上面が耕作の搅乱で破壊されたため浅く5~10cm程で、西側コーナーからカマドの一部までは溝2に切られるため不明である。床は全体がローム面まで掘られ、堅くたかれ良好である。ただし、カマドのある壁側を除いた3方は、北側で壁から0.5~1.5、南と東では10~30cm程不良である。カマドは西壁ほぼ中央にあり、上面は耕作の搅乱で荒らされており、粘土の痕跡と右抽石1個(本来なら立っているものが内側に倒れてしまっている)を残すのみである。火床は壁とほぼ同位置にあり、それから壁の外まで

カマドの本体があつたと思われる。焼土は厚い所で10cm程ある。カマドの一部と煙道は溝2に切られている。石組粘土カマドであるが右柚石一個以外の石は不明である。火床を中心にして土器が多く落ちこんでいた。柱穴は5個検出できたが

いずれも浅く、その中でP1は底まで床の状態であった。それぞれの性格は不明である。主柱穴も不明である。東側壁は

ば中央は外に張り出しており、入口のためのものかと思われるが断定はできない。平安時代（11世紀）の住居址である。

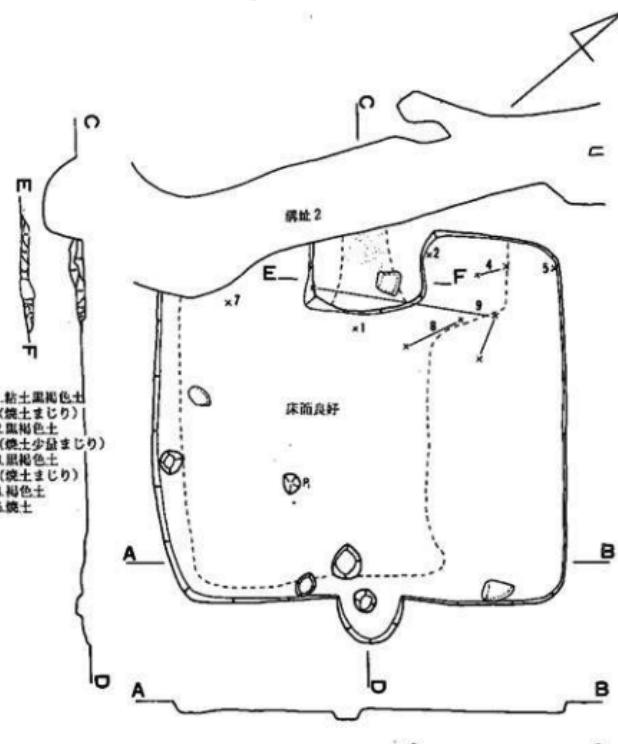


図10 4号住居址

0 2m

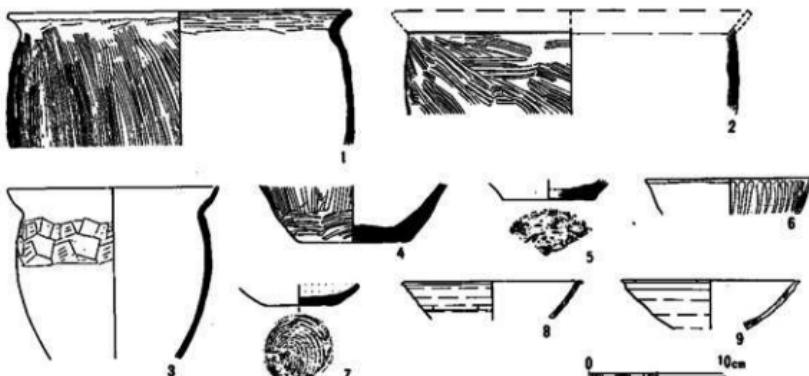


図11 4号住居址出土遺物 (1:4)

追物(図11) 土師器と須恵器と白瓷があるが、全体を図示しうるものはない。

土師器は壺(1~5)と杯(6・7)がある。1は壺の口縁と胴部の一部で、口縁が外反し胴部は直線的に落ちる。外面に細かいカキ目が施され、内部は口頭部にカキ目がその下はハケ状工具による調整がなされている。胎土は黄褐色で小石粒を含み良好、焼成も良好である。2は壺で口縁部ではなく、胴部の一部で復元実測をした。外面は粗いカキ目、内面は輪積みの痕跡が残り、そのあと横ナデがなされている。3はカマドの火床付近出土のものである。口頭部が外反し、口縁部がわずかに内側に曲がる。胴上部にヘラケズリがなされ、そのあと内外面全体にハケ状工具で調整がなされている。胎土は赤褐色で良好、焼成は不良である。4は壺の底部で外面にカキ目が施されている。底には木葉痕がある。胎土は黄褐色で良好、焼成も良好である。外面にススが付着して黒っぽくなっている。5は小型の壺の底部で、ロクロ使用の糸切底となる。内部はロクロナデがなされている。胎土は褐色で小石粒を含み良好、焼成も良好である。6は内面黒色の杯の口縁部で、外面はロクロナデ、内面は暗文が施されている。胎土は灰褐色で小石粒を含み良好、焼成も良好である。7は内面黒色の杯の底部で、左回りの回転糸切りとなる。胎土は灰褐色で小石粒を含み良好、焼成も良好である。

須恵器は杯と思われる破片が2点出土しているが図示しえない。

白瓷は2個体出土している。8は碗で内外面共ロクロナデがなされ、内面の全体と外面の一部に軸がかけたてある。胎土は乳白色で良好、焼成も良好である。⁽¹⁾11世紀鎌岡窯産のものである。9は碗で内外面共ロクロナデがなされ、内面全体と外面の口縁の一部に軸がかけたてある。胎土は乳白色で良好、焼成も良好である。⁽²⁾11世紀狼投窯産のものである。

注(1), (2)共、樋崎彰一先生の御教示による。 (山下)

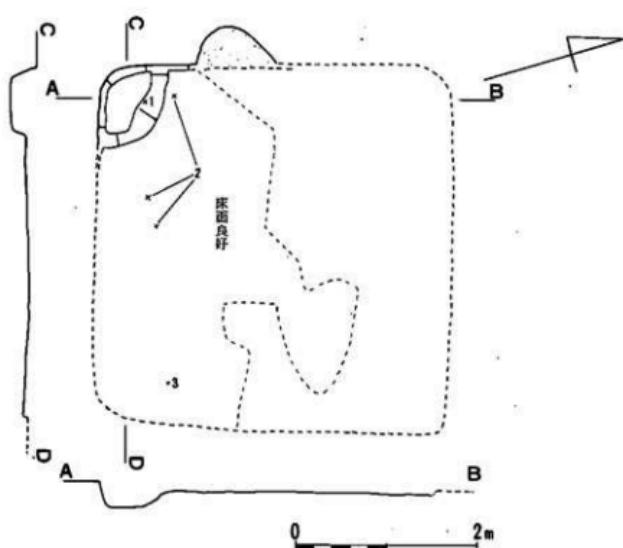


図12 5号住居址

5号住居址(図12)
耕作による搅乱のため南西コーナー部分が一部検出できただけで、あとは床面などで住居址を推定した。その推定によると、 $4 \times 3.9m$ の隅丸方形の竪穴住居である。主軸はN81°Wを示す。壁は搅乱のため南西の一部を確認したのみで、そこで10cm前後を測る。床は住居址のほぼ南半分は良好で堅くたたかれている。北側は不良である。西壁南寄の壁外に焼土があり、カマドの火床

であると考えられる。焼土が壁より外にあるため、壁から外にカマドの本体が出る構造であろう。石組粘土か粘土カマドであるかは不明である。主柱穴は不明である。南西コーナーにピットが確かめられ、貯蔵穴的な性格が強いと思われるが断定はできない。平安時代（11世紀）の住居跡である。

遺物(図13) 土師器、須恵器、白瓷がある。

土器は壺（1～3）がある。1は壺の口縁部で、口頸部がくの字に外反し、口縁が最大径となる。外面は口縁部が横胴部が緩いハケ状工具での調整がなされている。胎土は黄褐色で小石粒を含み良好、焼成も良好である。2は壺の口縁部で、頸部が直立し、口縁部が外反するのが特色となる。口頸部が内外面共横ナデ、それより下はヘラ削りがなされている。胎土は小石粒を含み赤褐色で良好、焼成も良好である。3は壺の底部で木葉痕を持つ。内面はクシ状工具による調整がなされている。胎土は黄褐色で小石粒を含み良好、焼成は普通である。

須恵器は4の杯がある。糸切り底を持つものと思われるが磨滅が激しく不明である。胎土は灰褐色から黄褐色で小石粒を含む。焼成は不良である。

(1) 白蜜は一片出土したのみである。11世紀後半の墓であるが、小片で図示しえない。

注(1)は横崎彰一先生の御教示による。(小平)

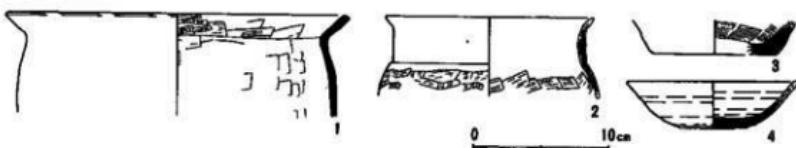


図13 5号住居址出土遺物 (1:4)

6号住居址（図14）

3.1×2.8mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸はN87°Wを示す。壁は北側で22cm、南側で19cm、東・西側で20cmを測り、良好な状態である。床は全体がローム面まで掘られ、ほぼ平らで堅く良好である。西南コーナー下が浅く掘り窪められていて、5個の石が置かれていて意図的になされたものであろうが、性格は不明である。カマドは西壁のはば中央に設けられ、炊口の天井石は発見されなかったが、残存形態は良好である。密接している溝3の側壁に焼土混りの暗褐色が検出されており、住居址の外まで煙道が延びていたのが、溝3に切られたものと思われる。石組粘土カマドである。カマド近くの床、特に左側の窪地へかけて焼土が残っていた。主柱穴は不明である。全体として、こじんまりとして整った住居址である。遺物、形態から平安時代の住居址である。



図14 6号住居址

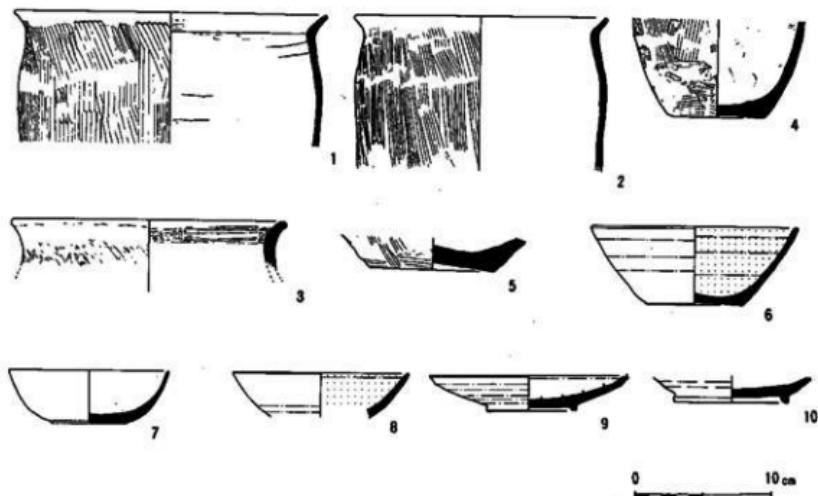


図15 6号住居址出土遺物 (1 : 4)

遺物 (図15) 土器器と白瓷がある。

土器器は壺 (1~5) と杯 (6~8) がある。1は壺の口縁と胴部で、外面は征目板を使った櫛状工具で縦の整形が施され、内面は口縁部が横ナデ、胴部には輪積み痕が残る。2は壺の口縁と胴部で、外面は櫛状工具による整形、内面は口縁部に横ナデが施されている。3は壺の口縁部で、外面は縦の、内面は横の櫛状工具による整形が施されている。4は壺の底部で内外面共櫛状工具による整形が施されている。5は壺の底部で外部に櫛状工具による整形が施されている。6・7・8はロクロ整形による内面黒色の杯である。

白瓷は9・10がある。9は皿で内外面共ロクロナデがなされ、内面に釉がかけてある。10も皿で内面に釉がかけてある。(塩沢)

7号住居址 (図16)

本住居址は、東側を溝1に切られているために、住居址の一部のみ調査した。

プランは、明確でないが、隅丸長方形と思われる。住居址は、粘質の褐色土から黄色ローム層に掘り込まれた、竪穴住居址である。壁は、傾斜していて、平均20cm前後の壁高を持ち、床面は、たたきの床面で硬く良好で、柱穴は不明である。床面と壁は焼けているが、火事とも思えなく、炭も全くない。床面と壁の状態から見ると、住居址内の床面と壁を、計画的に焼き硬めたのではないかと思われるが明確ではない。

当住居址には遺物がなく、時期は断定できないが、造構の状態から考えて、中世に属する造構ではないかと思われる。(宮下 秀広)

8号住居址 (図17)

土坑・ピット群7と溝址1の間に検出された竪穴住居址である。プランは北側が張り出す長方形で、6×3.6mを測る。方向は長軸でN 13.5° Eである。壁面はゆるく傾斜し確認面からの掘込みは約20cmであ

る。入口と思われる施設を北側にもち、確認面からの掘込みは約10cmでゆるやかな傾斜をもって床面に連続する。北側の一部は貼り床の状態が良く、他の部分は覆土が黒土で貼り床面下に黄色土がまじるという相違により、南側の一部を除きほぼ全体が貼り床であったことが確認できた。柱穴は4本と思われるが、北側に2本確認できただけである。P₁とP₂で、深さは床面からそれぞれ約50cmと30cmで差がある。他にはいくつかのピットが検出されたが、本住居址の柱穴であるか否かは不明である。

ピットの覆土は皆黄色土まじりの黒土である。

本住居址の時代を決定する遺物は出土しなかったが、住居址形や覆土の状態は、他の中世住居址と同様であり、本住居址も中世と考えられる。

遺物 (図18) 住居址のプラン検出面とはほぼ同じレベルで、図示できないが内耳の鍋と思われる瓦器片と1の鉤形の鉄製品が出土した。また、本住居址と直接関係はないが、

黒曜石剥片石器が出土している。(佐合)

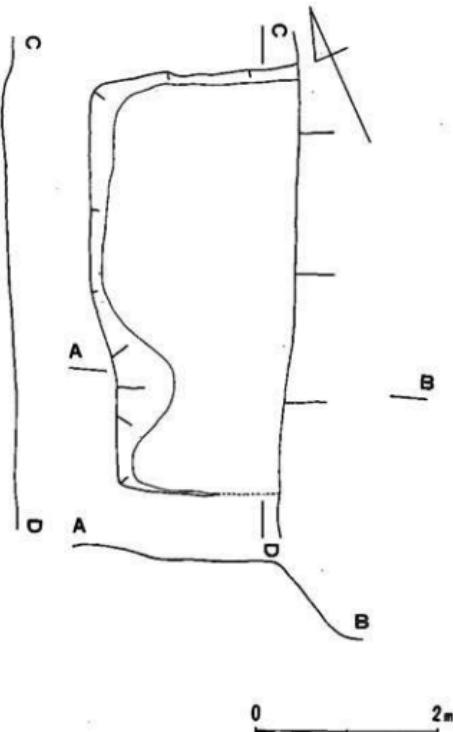


図16 7号住居址

9号住居址(図19)

本住居址は、4.7×3.5mの隅丸長方形のプランを有して、粘質の褐色土から黄色ローム層に掘り込まれた、堅穴住居址である。主軸方位は、N18°Eである。壁は傾斜していく、20cm前後で南側の壁は一部壊されている。床面は、ロームを硬くたたきしめ良好である。住居址の東側の石のはいった穴と、床面にあるP₁からP₃は、住居址の物ではないと思うが明確ではない。当住居址の遺物は、破片のみで完形品の出土はなかったが、陶器の破片から見て、時代は室町前期と思われる。

遺物(図20) 当住居址から、山茶碗、オロシ皿、砥石が出土した。

山茶碗(1・2)は底部の破片で全体の一部を残すのみである。胸部以下にヘラ削りの整形痕がのこる。高台は、ハリ付高台である。内面は、使用痕がはげしくのこり、磨いたようになっている。胎土中に微石粒を含むが、焼成とも良好である。色調は、二次焼成をうけているが、褐色土である。

オロシ皿(3)は、底部の破片で全体の一部を残すのみである。糸切底で明瞭に残す。胎土中に微石粒を含むが、焼成とも良好である。色調はうすい褐色土を呈する。

砥石4は、全面がはげしく使用痕が残る。石は凝灰岩である。(宮下)

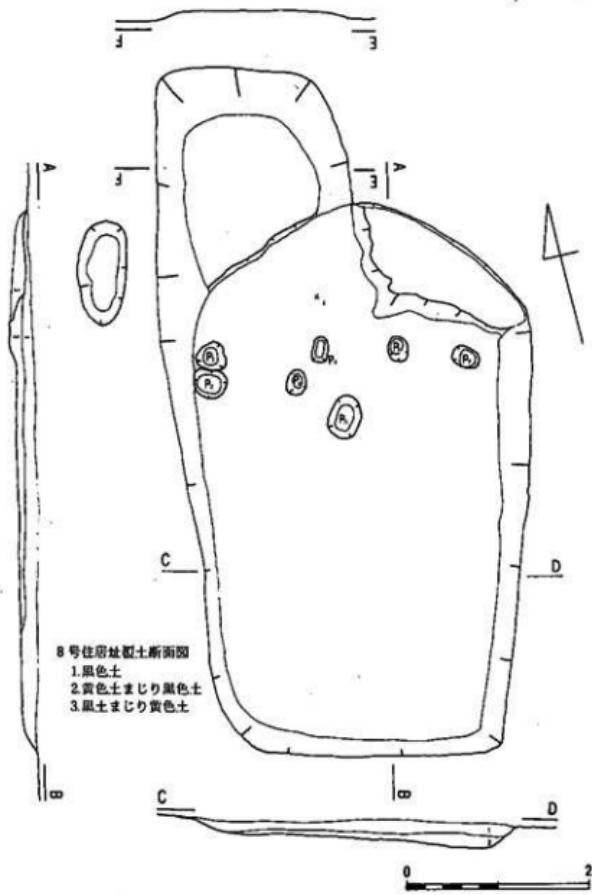


図17 8号住居址

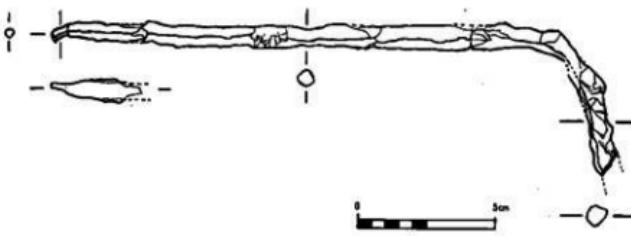


图18 8号居住址出土遗物（1：2）

10号住居址(図21)

5.2×3mの隅丸長方形の竪穴住居址である。長軸は、N75°Wを示す。壁はゆるやかに立ち上がり、北側で47cm、南側39cm、西側38cm、東側30cmを測る。床は全体がローム面まで掘られ、ほぼ平らで堅く良質である。北壁中央より東寄に、ほぼ50cm四方の突出部があり、性格はつかめなかった。遺物も畠土中より土師器、須恵器、白瓷が見つかったが、直接遺構とは結びつかない。遺構全体の様相からして中世かと思われる。図示しうる遺物はない。

(塙沢)

11号住居址(図22)

第1次調査区の南西端部に発見され、南北3.7×東西3mの隅丸長方形をなし、ローム層に20~30cm掘りこむ弥生後期の竪穴住居址である。壁面、床面とも堅くなく北側の半分に深さ10cm前後の掘りこみがつく。主柱穴は南側に2個発見されている。北側には発見にいたらなかった。炉址はP3とP1の線上の中心より西に片寄ってあり、浅い地床炉である。図22の1にみるとように床面上に貼床部と焼土帯があり、そこより遺物の大分の出土をみており、二次的な構造をもったともみられるが、調査に不十分な点があったことが惜しまれる。

遺物(図23)は比較的多く、土器は弥生時代後期中島式であり1の大型壺は口径21cm、立上り口

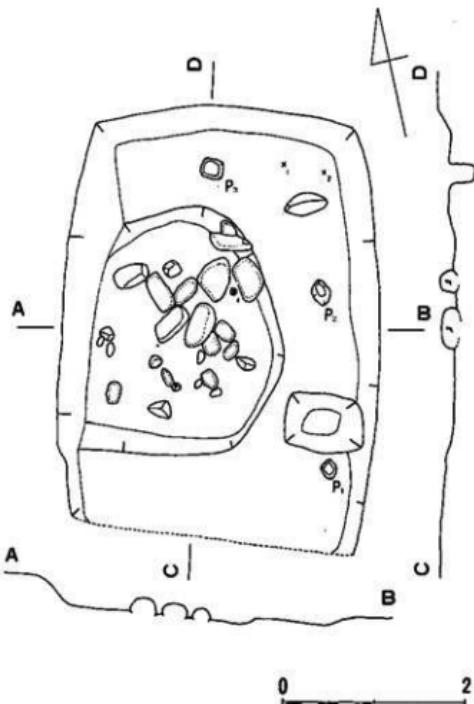


図19 9号住居址

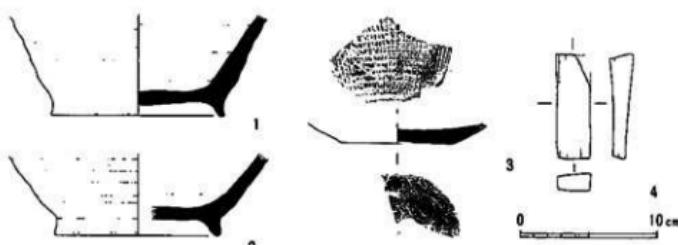


図20 9号住居址出土遺物 (1:4)

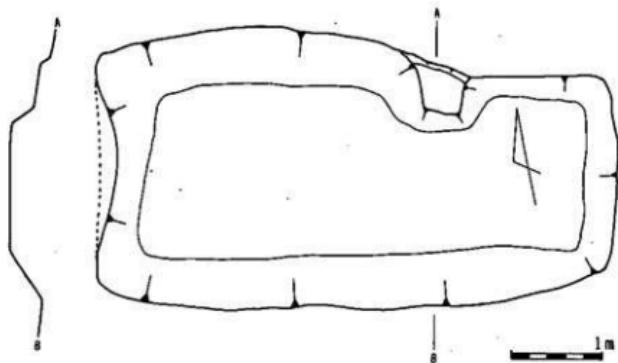


図21 10号住居址

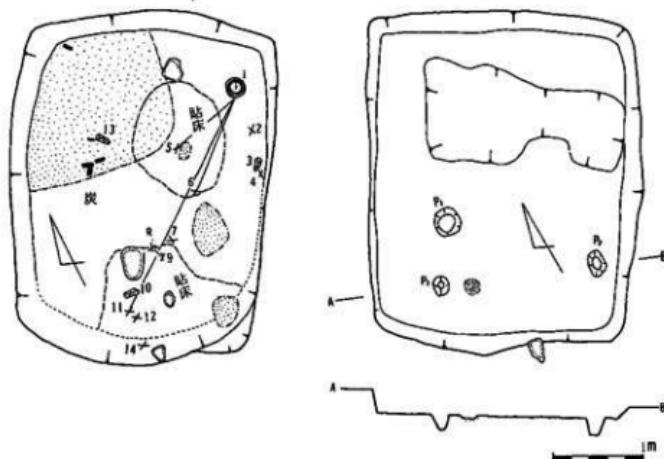


図22の1 11号住居址遺物、焼土分布図
(遺物に付く数字は遺物図のNoを示す)

図22の2 11号住居址

縁帶部には縦の沈線を、頭部に櫛描文の横帶文を、その上下に大きな波状文を施すものである。2・3の甕は口縁部は折れ曲るように強く外反し、中島式の特徴を表わし、頭部に洗練された櫛描文の波状文が施される。4の甕は口縁部は斜に立ち上がり、頭部に刷毛目状の擦痕が施され、弥生終末にみられるものである。石器には、6～8の石蹴と5の打製石包丁があり、いずれも硬砂岩製である。（塩沢）

12号住居址（図24）

調査範囲北端に位置し、4分の1位調査した。全体は不明であるが、隅丸の方形もしくは長方形の竪穴住居址である。床壁共に軟弱であり、柱穴は検出できなかった。床から少し浮いて礫が入っていた。

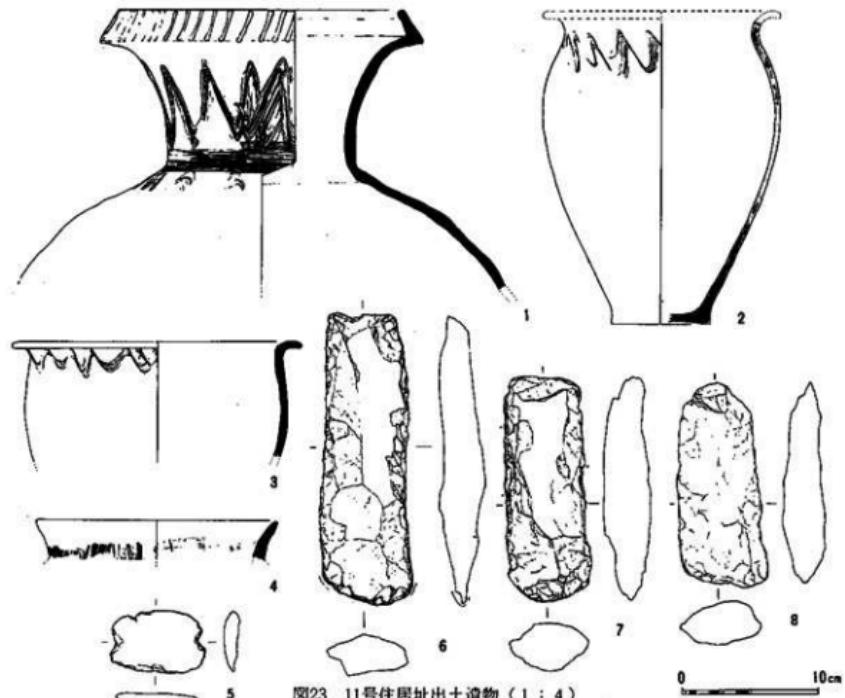


図23 11号住居址出土遺物 (1 : 4)

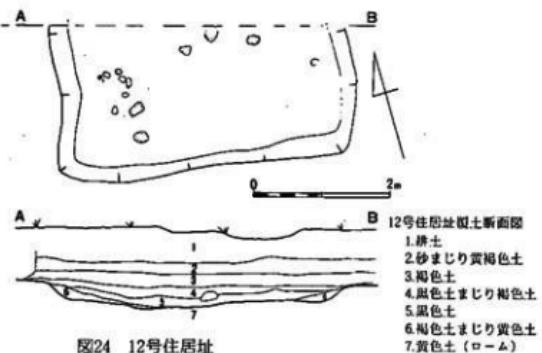


図24 12号住居址

遺物(図25) 内黒坏図25の2は確認調査の時、地表から0.8mの所で出土した。打製石斧1は半欠品で床面上から出土した。

土層からみると住居址のようであるが、遺物が少ない事、床壁が軟弱な事などから、住居址でない事も考えられる。また住居址としても、遺物が2個だけでは時代の極め手にはならず、時代は不明である。

(佐々木)

13号住居址(図26)

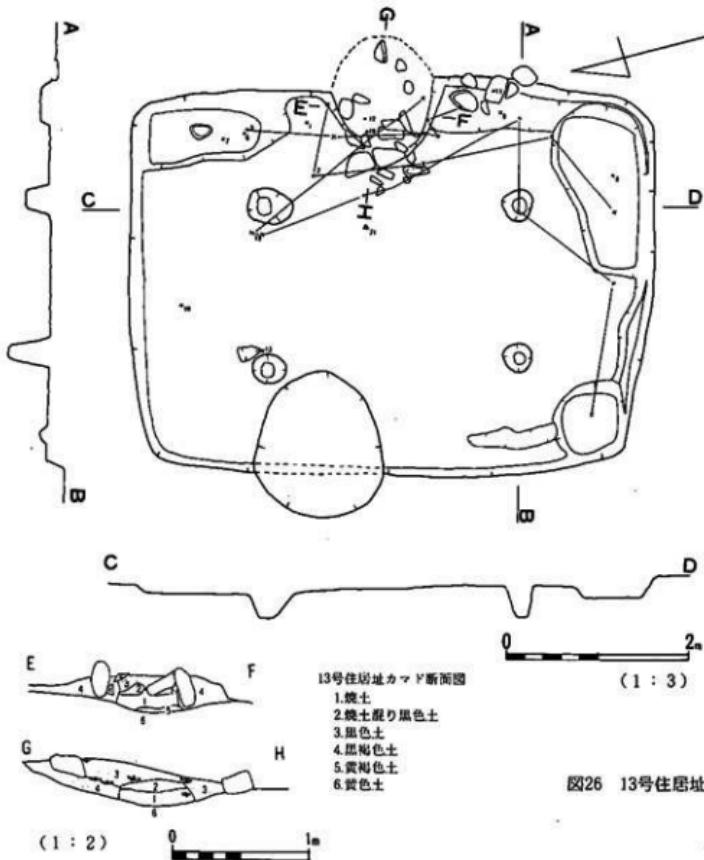
4.1×5.8mの南北に長い隅丸長方形堅穴住居址である。壁高は北側で18cm、南側で13cmの浅い掘込みである。主軸はN 103°Eである。西側壁及び床面の一部を近世の掘込みにより破壊される。主柱穴の4個は1.8×2.8mの長方形の角にあり、掘方は浅いが、底部はつき固められている。周溝は浅い掘込みで、北側を除く3方に確認された。床面上の施設として、北側を除く各隅に浅い掘込みがあったが、覆土からみて

住居に使用中に埋めもどしたと思われる。床は固くタタキ状にしっかりしていた。カマドは東側壁中央に作られており、カマドの半分が壁外に出る形態である。

石芯粘土カマドで、長さ60cmの天井石と思われる石がカマド前の床上にあり、焼けて割れていた。支脚は確認できなかった。カマド右側に石が数個あり、間に須恵器杯、焼土、炭があり、カマドにつくなんらかの施設と思われる。カマド中に遺物が多く入っていた。



図25 12号住居址出土遺物 (1 : 4)



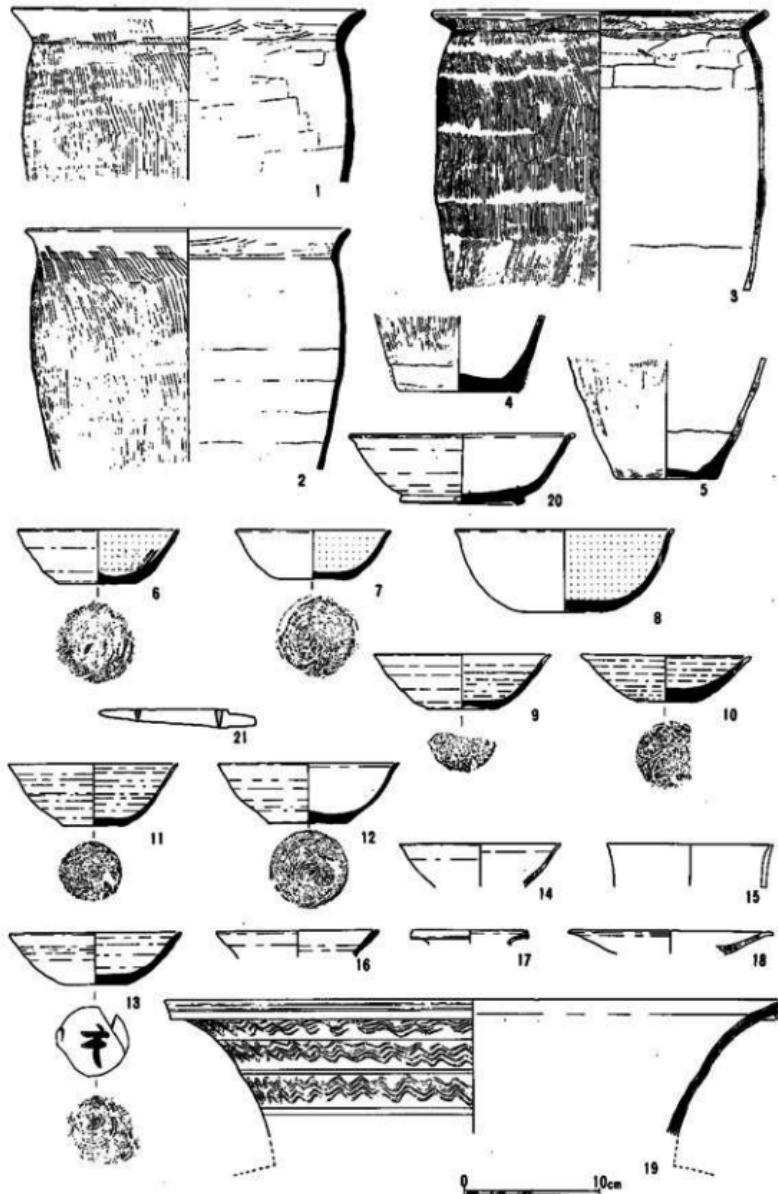


图27 13号住居址出土遗物 (1:4)

遺物(図27) 量が多い。土師器甕は3個体出土し、底部片も2個出土したが、直接接合はしない。図27の3はカキ目が細かくきれいで、薄手で整形も良い。1は口縁部に厚薄があり胴部も凸凹でカキ目も荒く粗製である。土師器杯3個体は共に内黒で7は黒光りがしている。須恵器杯は8個体出土し、墨書きのある13は灰青色の焼しまらない軟質の杯である。カマドから出土した35は器の色は赤褐色で、土師器のようであるが、胎土の焼しまりと薄さから須恵器であろう。杯のほとんど全部が2次焼成を受けている。灰釉高台付碗20はほぼ完形で北西の隅に置いた状態で出土した。緑釉皿18は胎土黄白色軟質で、口縁部に綠釉がわずかに残り、それとわかる。東濃産と思われる。灰釉大型の破片で図上復元口径45cmを測る19がある。胴部の破片もカマドを中心にして、散乱していたが、全体の復元は不可能である。灰釉瓶子口縁部片17があるが、あまりに小片で器形は不明である。刀子21は住居址中央部で、床に付いた状態で出土、平作りで茎は短く鋸化も比較的少なく保存状態は良い。

出土遺物から、平安時代の住居址である。灰釉大甕、緑釉陶器など出土し、他の平安時代住居址とは異なる性格を持つ住居址とも考えられる。灰釉大甕は、阿智村杉ノ木平遺跡に類例があり、住居址からの出土は希少である。口縁部の作り、しっかりした波状文などから、杉ノ木平例より古いと思われる。緑釉陶

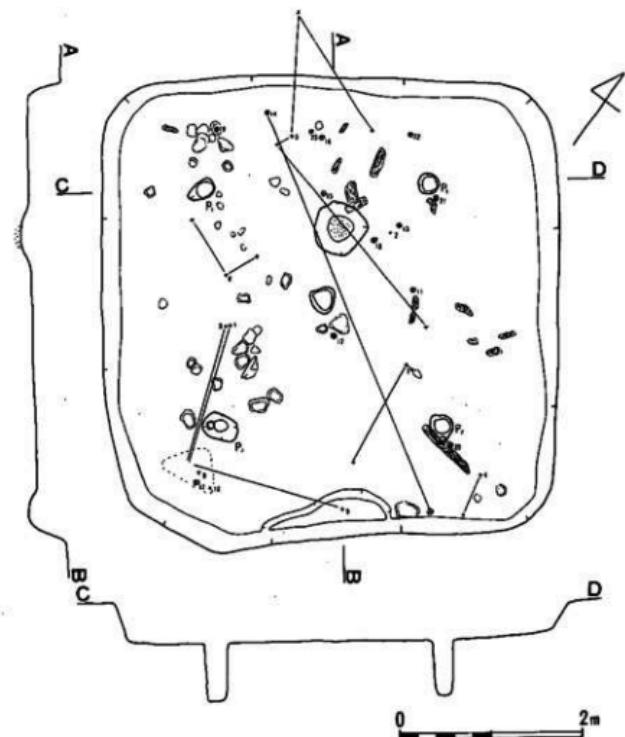


図28 14号住居址

器は、本遺跡において他の住居址からの出土ではなく、集落内における性格の特殊性を感じる。墨書きの文字は判読不可であり、意味も不明である。住居址の東側にカマドが作られており、諸々の条件を考えられるが、集落全体を見る上で意味をもつものと考えられる。（佐々木）



図29 14号住居址出土遺物 I (1:4)

14号住居址(図28)

5×4.8mの隅丸方形窓穴住居址である。壁高平均40cmで掘込みは比較的深い。主軸はN39°Eである。主柱穴4個は、2.6mの正方形角にあり、掘込みは平均60cmあり深い。主柱穴4個の対角線交点に浅い掘込みがある。炉は地床炉で主柱穴P1とP4の中心点より、内に40cmの箇所にあり、床面から8cm掘込み焼土の厚さは10cmある。床面はタタキ状になり状態は良い。周溝はない。南側壁下に、浅い掘込みがあり入口施設と考えられる。本住居址は火災に逢っており、後の搅乱がなく、炭化材が残っていた。長さ80cm直径12cmを測る炭がP2の横にあり、柱か梁であろう。状態良く、残る炭化材の他には炭は少なかった。床もあまり焼けていない。床上10cm迄に礫が相当混入していたが、主軸より北西がほとんどである。住居址覆土は、後の搅乱がなく最上部の黒土は、検出面ではほぼ梢円に入っており、断面は凸レンズ状に土が入っていた。

遺物(図29, 30) 弥生時代住居址としては、火災に逢っているためか、遺物量が多い。壹は口頭片2個体図29の2, 3図上復元で付く胴部、底部1があるが、完形になるものはない。口頭部片3は口縁部が外反しながら立ち上がり、頭部に2条の波状文と斜走短線を持ち、以下を欠く。胎土焼成良好であるが2次焼成のため器面が荒れる。口縁部片2は口唇部が内側に少し立ち、外側に波状文を施す。壹5, 6は両方とも底部を欠く。6は胴部から頭部を少しきびらせ、わずか外反する。口縁部と頭部に繩文を施すが器面が荒れ不鮮明である。胎土焼成は普通。5はくびれた頭部から外反した口縁部を持ち、頭部に3条の波状文を持つ。胎土は良く焼きしめる。台付壹4は胴部から上3分の1が現存する。口唇部にきざみ目を持ち、胴部はほぼ球形になる。器面をハケか櫛状工具で調整しているが、2次焼成のため不鮮明である。浅鉢7は底部から浅く広がり口縁部が立ちあがり、口縁部外側に櫛状工具による押引き文を施す。口唇部

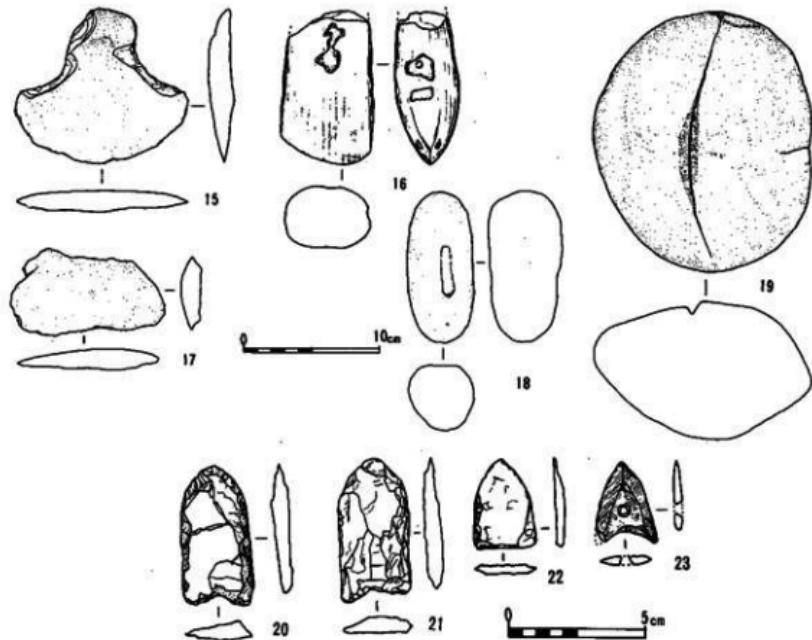


図30 14号住居址出土遺物II (1:4) (1:2)

にハケの横ナデ痕が残る。器面は荒れ微石粒でザラザラしている。高杯8は深い杯部で立ちあがり内外共にハケでていねいに整形してあり、精製された胎土で、焼成も良好である。9、10は共に台の部分だけなのではっきりしないが、10の方は内面がヘラ磨きできれいに仕上げてあるので、高杯の脚部と思われる。9は内面に炭化物の付着がある。これも内面はヘラ磨きである。

石器には磨製と打製があり、砥石と思われる礫図30の19がある。磨製石斧16は刃部が斜めで使用による欠損部がある。柄部で折れ残長11cmである。全体にていねいに研磨されているが、敲打され1mmくらい凹んだ部分が7ヶ所あり、破損後敲打器として転用されたと思われる。同一の原材と見られる磨製石鎌23と未製品20、21、22があり、剥片は出ていない。15は有肩屬状型石器であり、硬砂岩製である。石器図29の14は2個に割れており、北と南の壁下から出土した。割れ口に使用痕が残り破損後も使用されたようだ。

弥生後期初頭に位置づけられる住居址である。中期的な壺図29の3、壺6、後期的な壺2、東海的な台付壺4などバラエティに富んでいる。火災に逢った住居址であり、切り合い後の擾乱など確認されず、1住居址の1セットとして、当地域弥生時代中期終末から後期へ移行する段階を考える上で、今後の研究に欠くことの出来ない好資料といえる。（佐々木）

15号住居址（土坑1・2）（図31）

土坑1、2は、当初土坑としてとらえたが、2次調査の進行に伴ない、住居址が確認され、本住居址につくものと思われる。

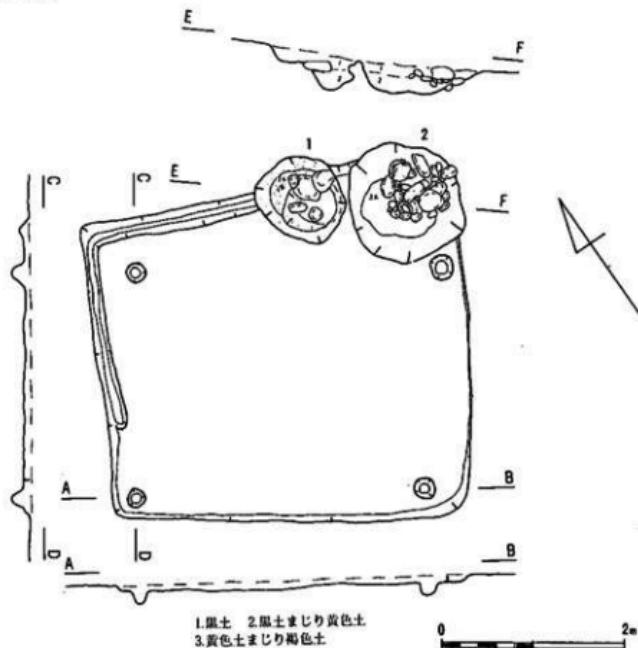


図31 15号住居址

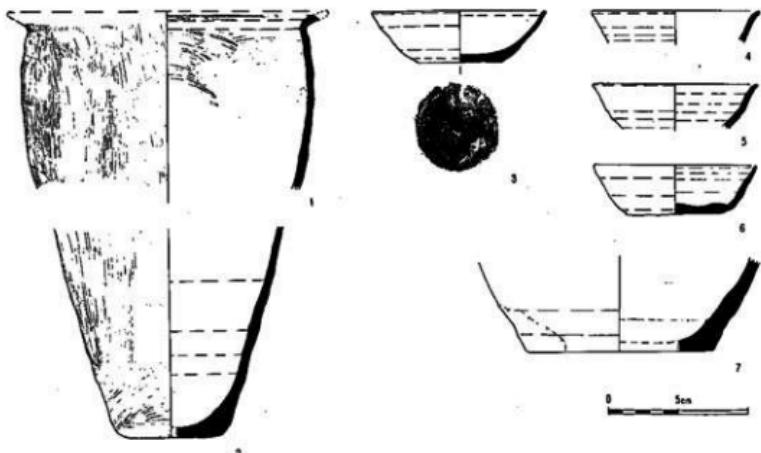


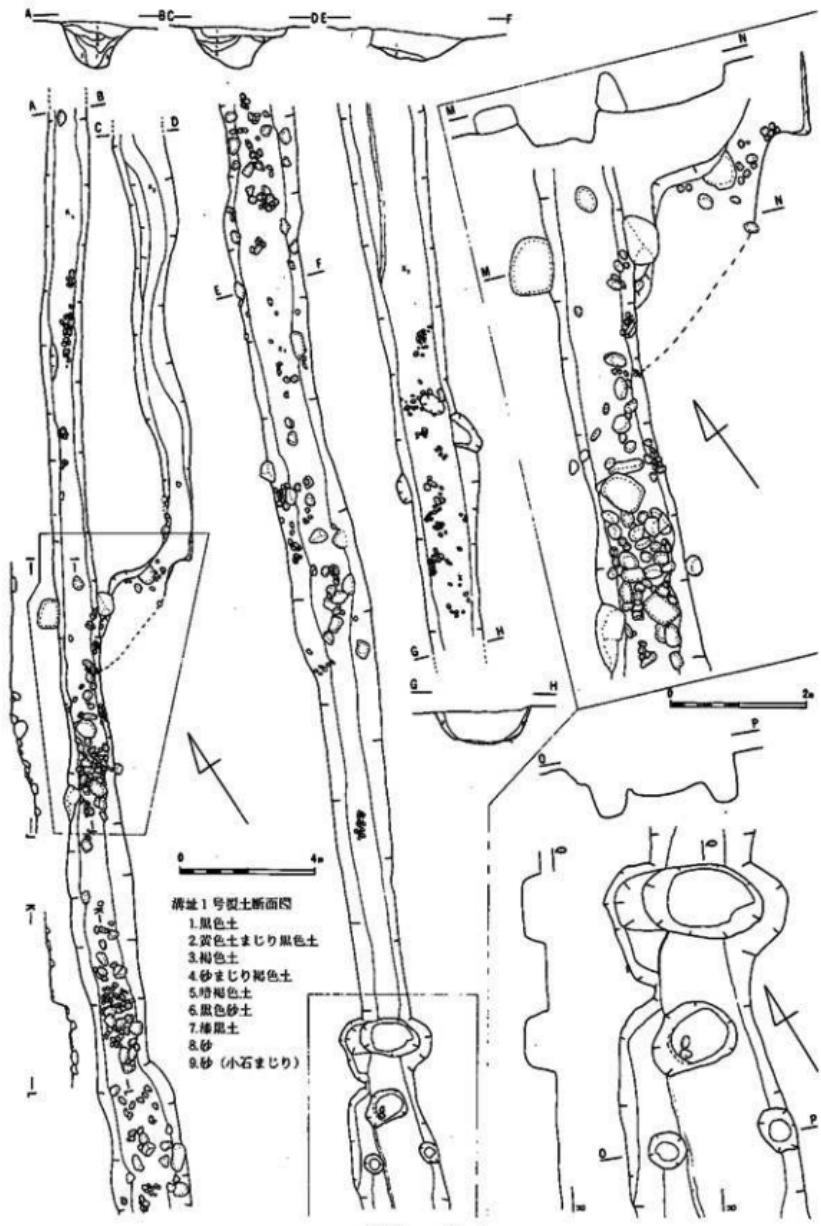
図32 15号住居址出土遺物 (1 : 4)

本住居址は確認調査時12号住居址としたものである。溝址1のすぐ東側に並んで、丘陵の肩の位置に検出された平安時代の住居址で耕作などにより壁面はすべて削り取られており、床面以下だけが残存した。また、集石列1と南側の壁部分と思われる所で接していたが切合い関係は不明である。

プランは不整形形をなし、 $4 \times 3.5\text{m}$ を測る。方向は長軸で、N57°Eである。貼り床で、床面以下の掘込みは約6cmであった。柱穴は4本で、住居址のプランより少し東に傾いて検出された。深さは床面から20cm程度である。東のコーナーと北側壁のはば中央に、当初土坑1, 2としてとらえた掘込みがあり、いずれも本住居址に付属する貯蔵穴と思われる。貯蔵穴1には焼土、炭を残している。貯蔵穴1, 2とも中間層に10~30cm前後の石が入っており、住居址を放棄後投げ入れられたものであろう。

遺物(図32) 出土量はあまり多くない。土師器には1~4があり、貯蔵穴1から壺形土器3個体分が出土したが図示できるのは1と2である。1, 2とも長胴の壺とみられ、1は口縁部と胴部の中ほどから底部を欠くが、口径は23cmほどであろう。外面に細かなカキ目痕を、内面には横ナデの調整痕をもつ。2は胴部の破片と底部が出土し、底部に葉脈痕を残す。内面の壁形は不明であるが、外面にはカキ目痕をもつ。1, 2とも2次焼成を受けていて、黒褐色ないし赤褐色を呈し付着物がある。胎土は普通である。3, 4は杯形で、3はほぼ完形品で貯蔵穴2から出土した。ロクロ痕を良く残していて、右回転である。糸切底で、胎土は微石粒を含んでいるが、焼成ともに良好である。4は口縁部の破片で外側に少し開くものである。褐色と黒褐色を呈し、胎土中に微石粒を含むが、焼成とも良好である。

須恵器には5~7がある。5, 6は杯形で、5はロクロ水引の整形をもち、胎土中に微石粒を含んでいる。2次焼成のため赤灰色、灰色部の半々である。6は糸切底で、後にナデの調整をしている。全体の整形はあまり良くない。内外面とも青灰色で、胎土中に小石粒を含んでいる。焼成は良好である。7は平底の壺で、外面に平行タタキ目をもち、内面にはハケとロクロの整形痕をもつ。底部は削りである。内外面とも青灰色で一部に灰がかぶっている。小石粒を含むが胎土、焼成とも良好である。他に丸底で大形の壺2個体分。糸切底、貼り付け高台の自然釉のかかった壺2個体分が破片で出土している。(佐合)



2 溝址・溝

溝 1 (図33)

第7号住居址と集石列1を切っている溝である。主軸N24°Eで80mにわたって確認された。幅2mの溝で南から北に流れている。南と北にさらに続いているが、南側は1次調査では確認できなかった。また北側は用地外である。

南側の平坦な場所には、溝の底面より高さ約15cm、最大幅50cmで長さ8mにわたり張り出す施設がありその北側には、溝のプラン検出面で、径270×150cm、深さ100cmと径120×90cm、深さ110cmの掘込みと両側の壁上に、径50cm、深さ90cmの掘込みが確認された。用途は不明であるが、溝に伴う施設と考えられる。この場所で溝の掘込みは約50cmである。溝の北側では、2本に別れている。分岐点より南に4mと12mには地形を利用して水をせき止めていた痕跡がある。この部分には、大小さまざまの石が認められ、石を使って補強しているものと考えられる。東側の溝は分岐点上で30cmほど高くなっている。本流と考えられる溝の両側には、80×50cm、高さ40cmほどの石が置かれていて、東側の溝へ水を移す施設を造っていたと考えられる。溝の掘込みは、この部分で本流、東側とも約70cmである。また土層の状態は、本流に砂ではなく、土層の大きな変化も認められず、流れは同じ場所を一定して流れていると思われる。東側の溝には小石の入った砂など、土層の変化が激しく、また流れも左右に変っていて、流れは一定していないかったと思われる。以上の事から、溝全体が人為的に構築されたものである。

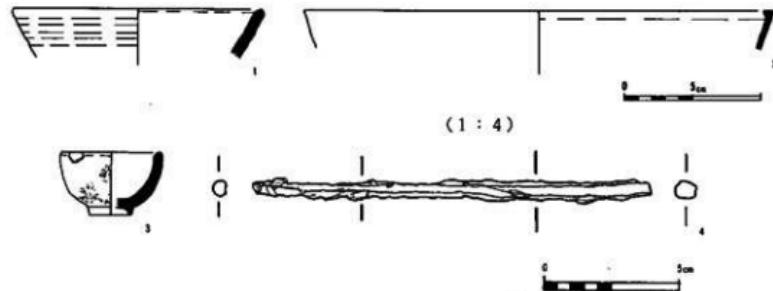


図34 溝1出土遺物 (1:2)

遺物(図34) 1~4があり、1は常滑の鉢である。3は砂層から、2は鉄鍋で漆黒土層から出土した。4は用途不明の鉄製品である。

なお、これらの遺物から見て、中世に位置づけられる遺構と思われるが、溝という性格から周囲の住居址などからの流入物である可能性もあり即断はできない。また、遺構とは直接結びつかないが、弥生時代の摩滅した壺の破片、石包丁、黒曜石の鐵が出土している。(佐合)

溝 2 (図35)

4号住居址の南西側からほぼN280°Eの方向へ、幅0.8~2.3m、深さ20~70cm、調査した範囲で約11mの溝である。4号住居址の南側では90°曲がり、すぐまた90°曲がった所まで確かめられ、それより南

は不明となる。

4号住居址の西側では幅80cm、深さ20~30cmのU字形の溝で、4号住居址の北側で2つに分かれ、5~10cmの境ではほぼ平行に約6m続き、また一つとなる。西側の溝はそれまでの溝とほぼ同一のU字形であるが、東側は下部で壁が内側にえぐれて、深さも20~40cm前後深くなっている。2つの溝が一つになる所から北側は、大きいものは1mから小さいものは小石まで、10~30cmくらいを中心にして礫が溝の全面に入る。調査は段丘崖の上部までしかできなかったが、溝は一段下まで続くものと思われる。

土層は検出面から暗褐色土が入り、その下灰色砂土となる。また溝が2本ある所では、深い方の溝の下層に粗い砂が入る。段丘崖上の礫が入る所では、砂の層に礫が混入する。

溝の性格は砂が入る土層や規格性のない掘り方や方向などから、自然による土砂の流入によって掘られたものである可能性が強い。礫が入るもの土砂の流入と同時であろう。しかし、水をひくための用水路として利用された所に、土砂が流入した可能性も少し残されている。

溝の時期は決め手になる遺物が出ていないので確実に決定できないが、平安時代の住居址を切っているため、平安時代以降で、かなり新しい時期ではないかと思われる。

遺物(図36) 出土遺物は少なく、土師器、白瓷、石器、鉄器が各々1個づつ出土しただけである。

土師器はカキ目のある壺の破片であるが、磨滅が激しく、流れ込みによるものであろう。

白瓷は1で碗である。外面ともロクロナデがなされ、全体に淡黄色の釉がかかる。胎土は乳白色で良好、焼成も良好である。11世紀、¹¹篠岡窯産のものである。溝3の西側から出土したものと同一個体で、流れ込みによるものであろう。

石器は2で横刃形である。緑泥岩を利用したものであるが、作りは稚である。流れ込みによるものである。

鉄器は3で砂層と底との境の出土である。断面はほぼ正方形をしている。手前から3cm程から多少太くなり、そこから先端に徐々に細くなっている。先端は少し欠けている。太くなる手前まで柄をつけたと思われる。余り風化しておらず、良好な保存状態である。

注(1) 植崎彰一先生の御教示による。(山下)

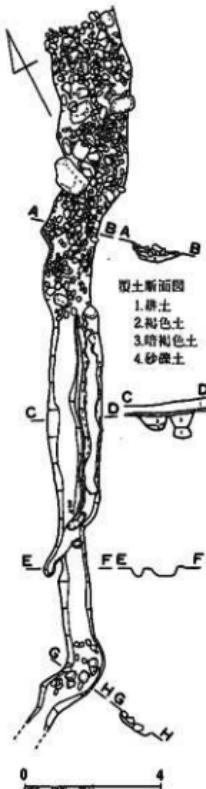


図35 溝 2

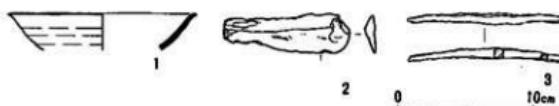


図36 溝 2 出土遺物 (1:4)

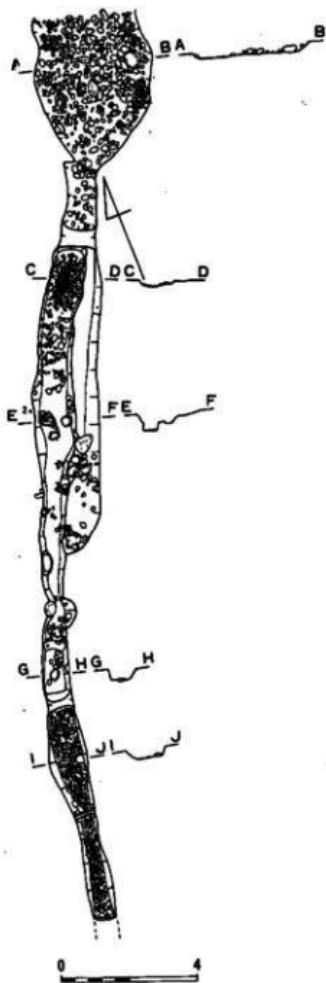


図37 溝 3

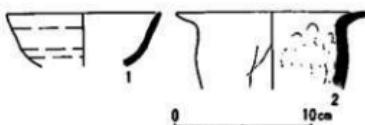


図38 溝3出土遺物 (1:4)

溝 3 (図37)

6号住居址の西からほぼN23°Eの方向へ、幅0.6～1m、深さ10～30cm、調査した範囲で約13.5mの溝である。6号住居址の南側で不明となる。調査は小さな段丘崖上部までしかできなかったが、下まで続くものと思われる。

両側から約3m、深さ約30cm、8cm隔てて次に約3m、深さ約30cm、次に10cm隔てて1.6m、深さ30～40cmと各々舟底のように深くなつて区切られており、前者の2つには10cm以下の石が底に全面に入っている。北側の小さな段丘崖の上部で溝は大きくひろがり、10～30cmの礫が全面に入る。礫が入る位置は地形的には溝2とほぼ同じである。

土層は礫が混る暗褐色土を中心で、底に褐色土ないし黄褐色土の砂質土に入る。溝に入る礫は自然の流入によるものと思われる。

溝の性格は溝2と同じように、自然の土砂の流入による可能性が強い。時期は遺物が少ないため確実な時期はわからないが、近世陶器らしい遺物がでているので、かなり新しい時期のものであろう。

遺物 (図38) 出土遺物は少なく図示しうるもののは、1の近世陶器の鉢だけである。黄緑色の光沢のある釉がかかりひび割れている。胎土は乳白色で良好、焼成も良好である。もう一片常滑焼の盤の一部が出土している。

溝3に直接関係する遺物ではないが、溝のすぐ西側に2が出土している。口縁が強く外反する妻で、口頸部はハケ状工具による調整、胴部はヘラ削り、内面には手指圧痕がある。外面にヘラ記号がある。胎土は赤褐色で小石粒を含み良好、焼成も良好である。この近くから溝2出土白瓷と同一個体のものが出土している。

(山下)

溝 4 (図40)

10号住居址に位置し、東西に長さ6mで幅は約20～40cmで、深さ約7cmの自然の溝である。

土層は、川砂の單一層である。溝での遺物の出土が全くなく、時期などは不明である。

(塩沢)

溝 5 (図40)

土坑17と26の中間を南西から北東に延びている。長さ10m、幅40~80cm、深さ平均20cmの溝である。北東端に直径1m、深さ20cmの円形の落ち込みがある。覆土は黒色土が入っており明確に検出した。底部は堅い、遺物もなく、時期、性格共に不明である。(塩沢)

溝 6 (図40)

土坑18を横切り東西に延びる長さ6.6m、幅30~40cm、深さ平均11cmの浅い溝である。土坑18と同様な白色微細な砂で埋まっている。遺物はなく、時期、性格共に不明である。(塩沢)

3 土 坑

3号土坑群 (図39)

3号住居址の東側に検出された。ここは遺跡内では特に表土が浅い所で、検出は表土下約10cmである。一括して3号土坑群としたが、土坑の検出状態からみて同性格の土坑とは考えられない。3-1号土坑は平面プランが円形で、断面は袋状を成している。最も土坑らしい土坑である。この付近は礫が多く、3-2, 3-4号土坑にみられる礫が土坑に付随するものと断定できない。

土坑内遺物は出土しておらず、土坑の時代判定はできない。(郷道)

4号土坑 (図44)

土坑4は、4トレンチの中程に位置する。1.7×1.2m、深さ0.5mの規模である。遺物は出土せず、性格など確認出来ない。時代も不明である。(佐々木)

5号土坑群 (図39)

2号住居址の西側に検出された土坑群である。3号土坑群に述べた点とまったく同様の状態である。

土坑内遺物は出土していない。(郷道)

6号土坑 (図40)

土坑6は、6号住居址の北側約90cmに位置する。規模は、東西に長軸を持ち、2.2×1.5mの楕円形のプランを呈している。深さは、中央で54cmで、底はほぼ平らである。土坑内の土層は、礫混りの単一層から成る。土坑内の遺物出土は全くなく、時期、性格などは不明である。(塩沢)

土坑・ピット群7 (図42, 43)

溝1の東に第8号住居址に接して検出された土坑とピットである。全体を土坑・ピット群7としてとられた。

7-1は、径が1.3mのはば円形で、ゆるやかな傾斜で約30cmの掘込みを持つ。壁面、底面とも叩きしめられている。

7-2は、一辺が1mほどの方形で、掘込みは浅く約10cmである。底面には直径30cmほどの石が密着して入っているが、土坑に伴なうものかは不明である。

7-3は、4×1.2mの長楕円形で、約60cmの掘込みである。南側に浅い10cmほどの掘込みがあるが、土

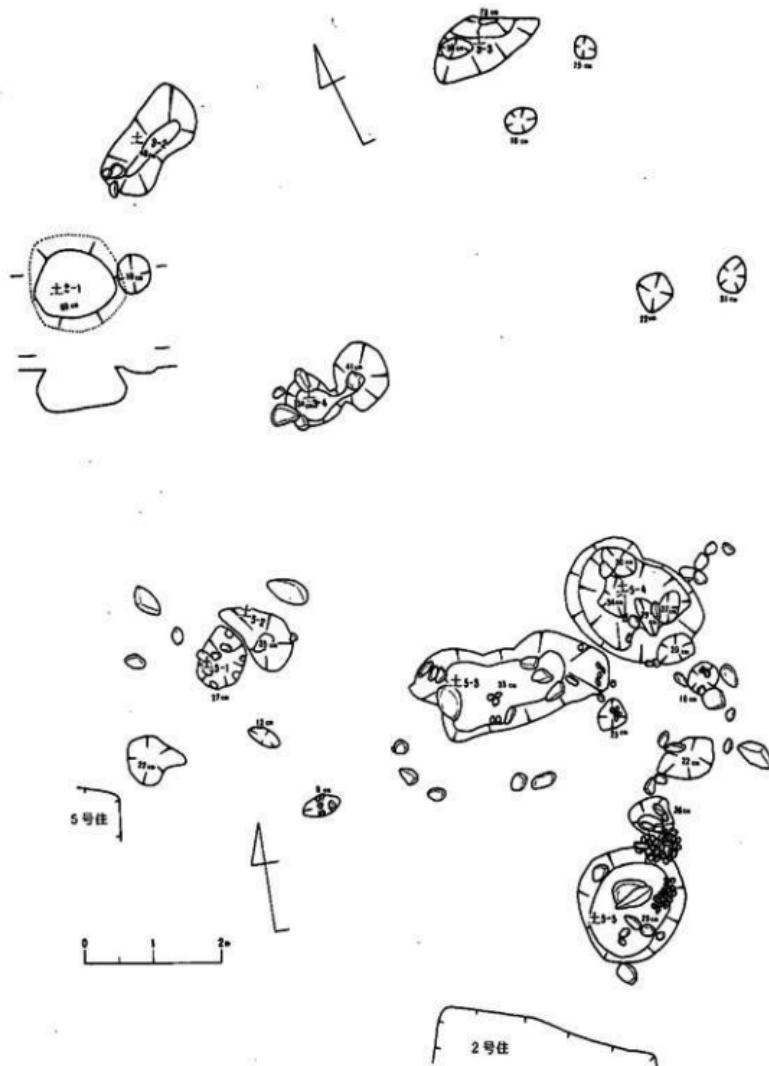


图39 3号, 5号土坑群

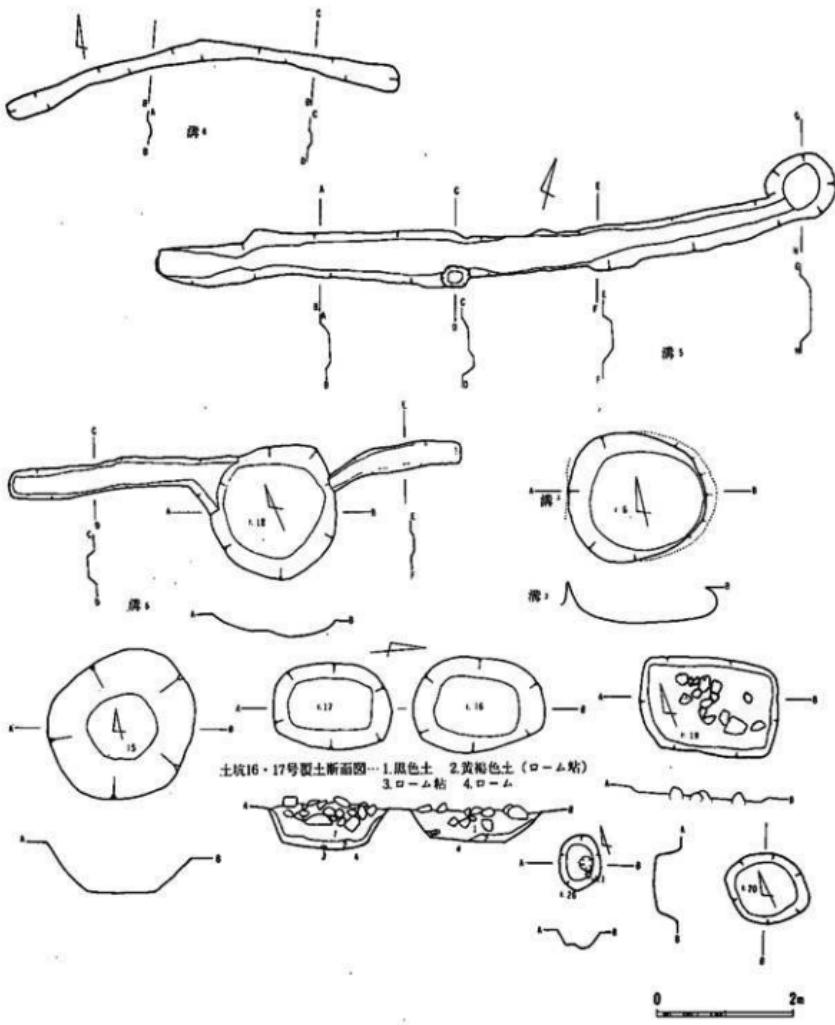


図40 溝4・5・6, 土坑6・15・16・17・18・19・20・26号

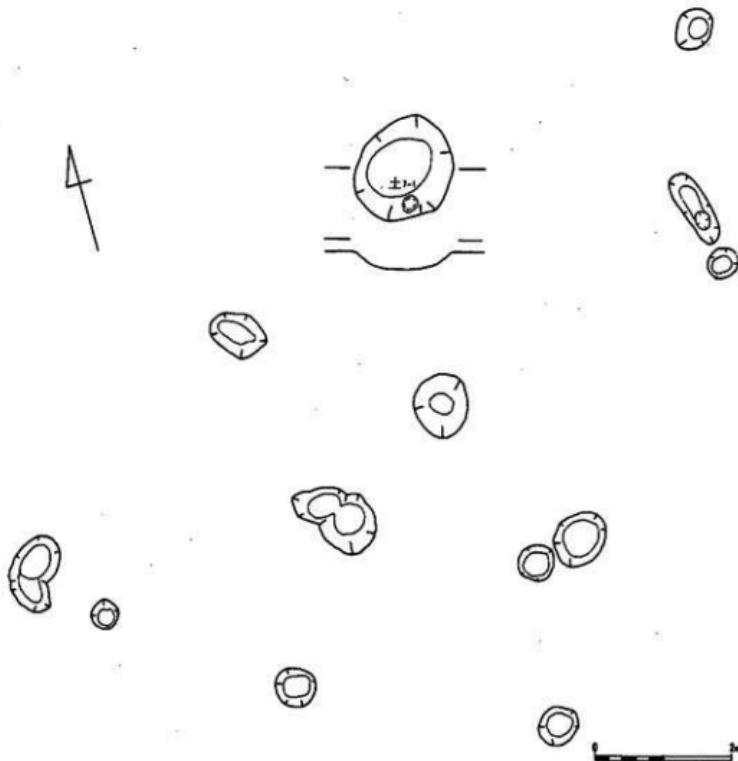


図42 7号土坑群 I , ピット群

坑との関連は不明である。

7-4は、 $3.4 \times 1.4\text{m}$ の不整方形をなし、40cmの掘込みである。西側の壁面は、ほぼ垂直に掘込まれてゐるが、東側は西側にくらべ傾斜をもつ。

覆土は7-3が黒色土、他のものは暗褐色土である。

ピットは7-5～7-22がある。直径80cmで浅い落込みのものから、直径40cmで深さ40cm前後のものまであり、建物址と判断できる統一性は認められず、押毬に番号は付さなかった。覆土は、ほとんどのものが暗褐色土である。土坑、ピット群7からは時期などを位置付けられる遺物は出土しなかった。

(佐合)

8号土坑 (図44)

土坑8は、溝1の西側約70cmに位置する。規模は、南北に長軸をもち $1.1 \times 0.9\text{m}$ の不整円形のプランを呈している。深さは、中央で13cmで底は凸凹である。土坑内の土層は、焼土と炭が混る褐色土の單一層から成る。性格等は明確でないが、灰、炭など捨てるための住居址に付属する施設と考えられる。遺物は、



図43 7号土坑群Ⅱ, ピット群, 集石 3

青磁と山茶碗が出土した。青磁2は、北側の壁の上から、山茶碗1は、南側の壁に横になっていた。遺物から見て、中世に位置づけられる。

遺物(図45) 山茶碗1は、山茶碗の碗で底部の破片で全体の一部を残すのみであるロクロ痕を明瞭に残す。底は糸切である。高台はハリッケで、高台には羽痕がつく。胎土中に微石粒を含むが、焼成ともに良好である。色調は灰色を呈する。青磁2は碗で口縁部の破片で全体の一部を残すのみである。洞部から底部にかけて輪花文がつき釉はうすいが、ほぼ均一にかかっている。胎土、焼成ともに良好である。色調は、青白色を呈する。 (宮下)

9号土坑 (図44)

土坑9は、溝1の西側約3.6mに位置する。規模は、東西に長軸を持ち 1.55×1.15 mの三角形のプランを呈している。深さは、中央で11cmと浅く、壁側がすこし深くなっている。土坑内の土層は、褐色土の単層から成る。土坑内の遺物がすくなく小さな灰釉と思われる物が1点出土したが、時期、性格等は不明である。 (宮下)

10号土坑 (図44)

土坑10は、土坑9の西側約3mに位置する。規模は、東西に長軸をもち 1.6×1.35 mの不整梢円形のブ

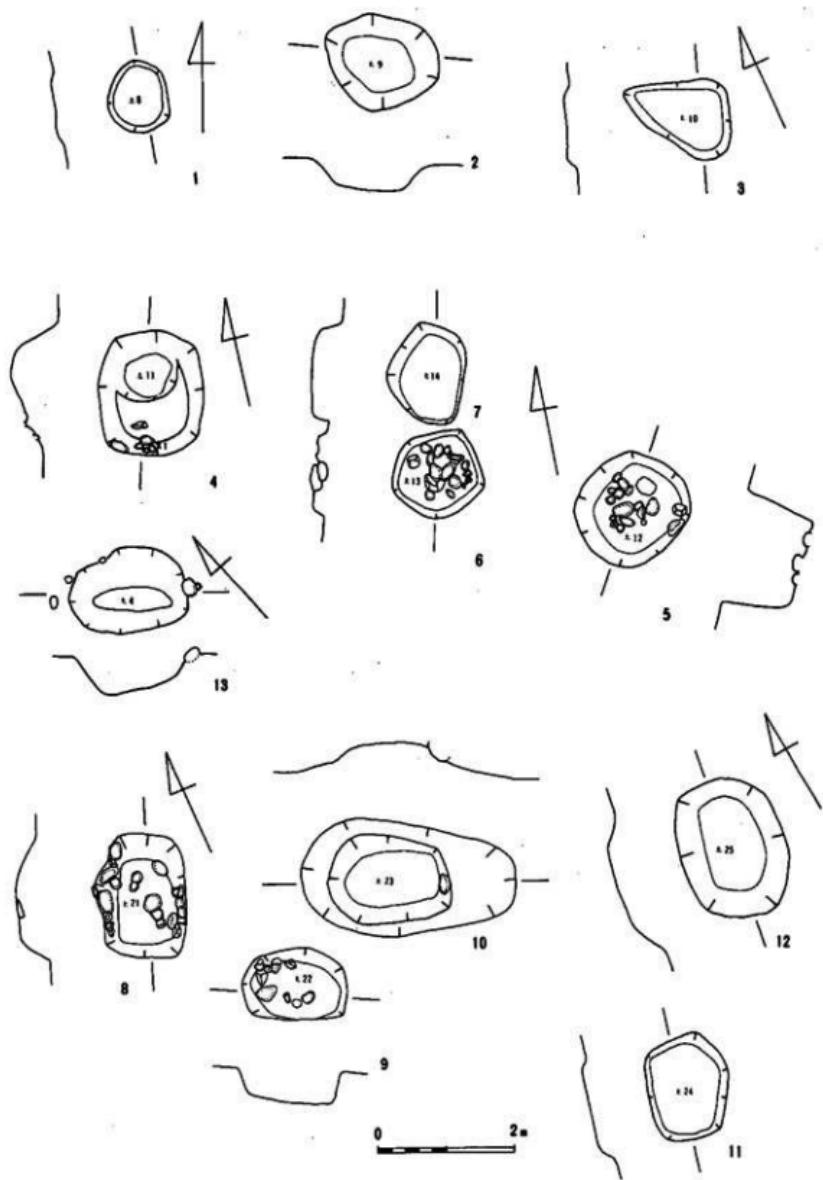


图44 土坑4·8·9·10·11·12·13·14·21·22·23·24·25号

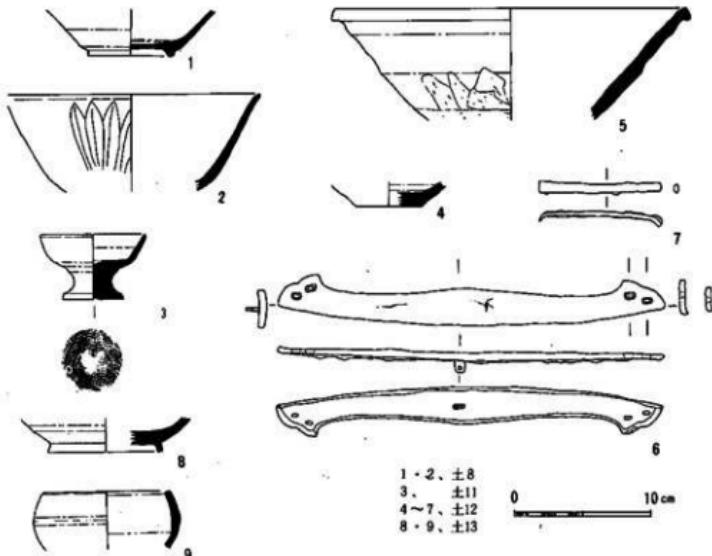


図45 土坑8・11・12・13号出土遺物 (1:4)

ランを呈している。深さは、中央で40cmで、底はほぼ平らである。土坑内の土層は、2層である。1層は褐色土、2層は褐色土で黄色土が混る。土坑内の遺物の出土が全くなく、時期、性格等は不明である。

(宮下)

11号土坑 (図44)

土坑11の規模は、南北に長軸をもち $1.8 \times 1.55\text{m}$ の長方形のプランを呈している。深さは、中央で61cmで底はほぼ平らである。土坑内の土層は、白っぽい砂利が入り南側の壁に沿って拳大の石が乱雑にはいりこんでいた。土坑内の遺物は、南側の石の所の東側から仏飯器の出土をみており、土壌ともみられ、室町前期ではないかと思われる。

遺物(図45の3) 完形の仏飯器で胎土、焼成とも良好である。底には、糸切痕が明瞭に残る。色は灰色で、少し黒みがある。 (宮下)

12号土坑 (図44)

土坑12の規模は、南北に長軸をもち、 $1.7 \times 1.65\text{m}$ の円形のプランを呈している。深さは、中央で1mで底に石が入りこむ。土坑内の土層は、3層である。1層は、白っぽい砂利で、2層は、砂利で褐色土混り、3層は、石と2層の土が入る。土坑内の遺物は、山茶碗、鉄器、須恵器が出土し、形態から見て中世の土壌と見られるものである。

遺物(図45の4～7) 4の須恵器の皿は底部破片で全体の一部を残すのみである。内面は、使用痕がはげしく残り、磨いたようになっている。底部は糸切底である。胎土、焼成とも良好である。色調は灰白色を呈する。5の山茶碗の鉢は口縁部の破片で全体の一部を残すのみである。ロクロ痕を明瞭に残す。

胎土中に微石粒を含むが、焼成ともに良好である。色調は灰褐色を呈する。鉄製品6は、飾金具ではないかと思われる。裏面は鉄で、ほぼ中央に横に止め板があり穴があいている。前面には銅板を張りつけてある。両隅には2個づつ穴があいている。7は、鉄片で形態、大きさ等不明である。（宮下）

13号土坑（図44）

土坑13の規模は、南北に長軸をもち $1.13 \times 1.3m$ の不整円形のプランを呈している。深さは、中央で20cmで底に石が入りこむ。土坑内の土層は、砂利で褐色石混りの単1層からなる。土坑内の遺物は、灰釉の皿と磁器と思われる破片が出土したが、明確に時期はわからないが、中世ではないかと思われる。

遺物（図45の8・9）8は灰釉の皿で、底部の破片で全体の一部を残すのみである。胎土中に微石粒を含む。焼成とも良好である。色調は灰色を呈す。磁器9は、口縁部の破片で全体の一部を残すのみである。焼成、胎土とも良好である。色調はうす紫を呈する。（宮下）

14号土坑（図44）

土坑14は、土坑13から北側約30cmに位置する。規模は、南北に長軸をもち、 $1.45 \times 1.15m$ の不整楕円形のプランを呈している。深さは、中央で20cmで底はほぼ平らである。土坑内の土層は、褐色土の単1層から成る。土坑内の遺物の出土は全くなく、時期等は不明である。（宮下）

15号土坑（図40）

土坑15は、10号住居址の面に接し、規模は南北に長軸をもち、 $2.2 \times 2m$ の不整円形のプランを呈している。深さは、中央で60cmの碗状になっている。土坑内の土層は2層である。1層は、白色砂、2層は、灰色粘砂である。土坑内の遺物出土は全くなく、時期、性格等は不明である。（塩沢）

16号土坑（図40）

11号住居址の北北西5.5mの所にあり、土坑17と南北に並んでいる。 $2 \times 1.4m$ の不整楕円形で、深さ40cmである。検出面で10~30cmの石が確認された。底は平らである。遺物はなにもないが、土坑17と同位置で同じような状態であり同時期と考えられる。（塩沢）

17号土坑（図40）

土坑16の南に接しており、 $1.8 \times 1.3m$ の楕円形で、深さ60cmである。上層部に集石がある。腹土中より山茶碗3個が出土した。中世の土壤と考えられる。

遺物（図41）1~3がある。1, 2, 3とも山茶碗の底部で、外側はヘラの削りの整形をもち、内側は使用のための磨滅が激しい。高台は貼付けである。（塩沢）

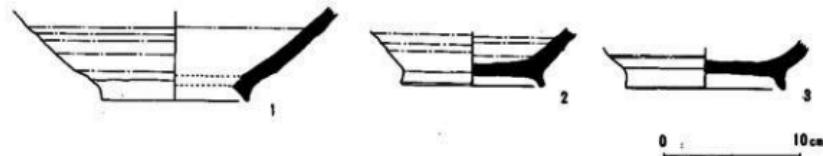


図41 土坑17号出土遺物 (1:4)

18号土坑（図40）

11号住居址の西南西5.5mの所にあり、 $1.8 \times 2\text{m}$ のほぼ円形で、深さ約20cmで、浅い鉢状の土坑である。溝6が東西に横切っている。底面は西北に比べ南東が深く掘り凹められている。覆土は白色細粒の川原砂である。時期などを位置付けられる遺物は出土しなかったが、覆土の状態から、土坑15と同時期と考えられる。（塩沢）

19号土坑（図40）

11号住居址の南東3mの所にあり、 $1 \times 1.2\text{m}$ のほぼ円形で、深さ40cmである。底は平らである。覆土は黒色土である。時期などを位置付けられる遺物は出土しなかった。（塩沢）

20号土坑（図40）

11号住居址の南側約4.5mに位置し、南北に長軸をもち、 $2 \times 1.4\text{m}$ の長方形プランを呈している。深さは中央で40cmで、底は平らである。土坑内の土層は2層で、1層は頭大の石で、2層は暗褐色土である。土坑内の遺物の出土は全くなく、時期、性格等は不明である。（塩沢）

21号土坑（図44）

土坑21の規模は、南北に長軸をもち $1.8 \times 1.2\text{m}$ の長方形プランを呈している。深さは、中央で50cm、底はほぼ平らになっている。土坑内の土層は、2層である。1層は褐色土、2層は褐色土、黄色土混りである。底の東側と西側の壁に人頭大の石が入るが、この石の性格等は不明である。土坑内の遺物の出土は全くなく、時期、性格等は不明である。（宮下）

22号土坑（図9）

土坑22の規模は、東西に長軸をもち $1.55 \times 1\text{m}$ の長方形のプランを呈している。深さは、中央で50cm、底はほぼ平らである。土坑内の土層は、3層である。1層は褐色土、2層は焼土で褐色土が混る。3層は褐色土、黄色土混りである。土坑内の底の壁には、土坑21と同じく石が入っているが、方位が南北と違うが似ているが、性格等がわからない。土坑内の遺物は、山茶碗と思われる破片が出土したが、遺物から見て明確でないが、中世の造構ではないかと思われる。（宮下）

23号土坑（図44）

土坑23の規模は、東西に長軸をもち $3.15 \times 1.65\text{m}$ の楕円形のプランを呈している。深さは、中央で52cm底はほぼ平らである。壁は、南側が中間で傾斜して上にあがる。土坑内の土層は、褐色土の単1層から成る。土坑内からの遺物の出土が全くなく、時期、性格等は不明である。（宮下）

24号土坑（図44）

土坑24の規模は、南北に長軸をもち $1.5 \times 1.2\text{m}$ の不整長方形のプランを呈している。深さは、中央で11cmと浅く、底はほぼ平らである。土坑内の土層は、褐色土の単1層から成る。土坑内の出土遺物は全くなく、時期、性格等は不明である。（宮下）

25号土坑（図44）

土坑25の規模は、南北に長軸をもち $2.1 \times 1.6\text{m}$ の楕円形のプランを呈している。深さは、中央で33cm、

底はほぼ平らになっている。土坑内の土層は、褐色土の単1層から成る。土坑内での遺物の出土は全くなく、時期、性格等は不明である。（宮下）

26号土坑（図40）

10号住居址の西側約6.5mに位置している。規模は、南北に長軸をもち 0.8×0.5 mの楕円形のプランを呈している。深さは、中央で30cm、底は凸凹している。土坑内の土層は、黒色土の単1層から成っている。土坑内の遺物は全くなく、時期、性格等は不明である。（塩沢）

4 集石・集石列

集石列1（図46）

溝址1にこれら、第15号住居址の南壁に接して、幅40cmで長さ2.2mにわたって確認された。N $67.5^{\circ}W$ の方位を示し、直径20cm以下の自然石を高さをそろえて並べている。遺物はないが、切合いの状態からみて、集石列、集石の中では古いものである。

集石列2（図46）

溝址1の東側10mで丘陵の肩の部分に検出され、N $65.5^{\circ}W$ の方位を示し、幅60cmで長さ6mにわたり確認された。5~30cmほどの自然石と割石が用いられ、やや東に傾斜している。東側へさらに続いているが1次調査では全体を確認できなかった。

遺物（図47） 本集石列に伴なうものか不明であるが、瓶子と石器がある。1は瓶子である、山茶碗系で、ロクロのいねいな整形をもつ。底部は糸切で粗痕がある。外面には全体に薄く自然釉がかかっている。内外面とも灰白色で、胎土、焼成とも普通である。

集石列3（図46）

土坑、ピット群7の北の端に検出され、N $68^{\circ}W$ の方位を示す。幅1mで長さ14mにわたり確認された。20cm前後の集まりと約10cmの石の集まり、また、中には40cm前後の大きな石を入れている3種類がある。人為的にそれぞれが規格されていて、全体で石列を造っている。それぞれの集まりと集まりの間には石の無い所があるが、石の取り除かれた痕跡は確認できなかった。また、溝址1をはさんで西側に石が点在しており、西側にも伸びていたものと思われる。なお、東側へのつながりは、1次調査では確認できなかった。遺物は、染めつけの皿の破片と石器が、それぞれ1つ出土しているが、遺構に伴なうかは不明である。

集石1（図46）

集石列1と2の中間に検出され、N $33.5^{\circ}W$ の主軸を示す。20cm前後の比較的大きな石の集まりである。人為的に集められたものであろうが、遺物もなく目的は不明である。

集石2（図46）

集石列3の北に検出された。規格性はなく、人為的に集められた物かは不明である。遺物は、集石から少し離れて、近世と思われる天目茶碗の破片と石器が出土しているが、本集石に伴なうものか否かは不明である。

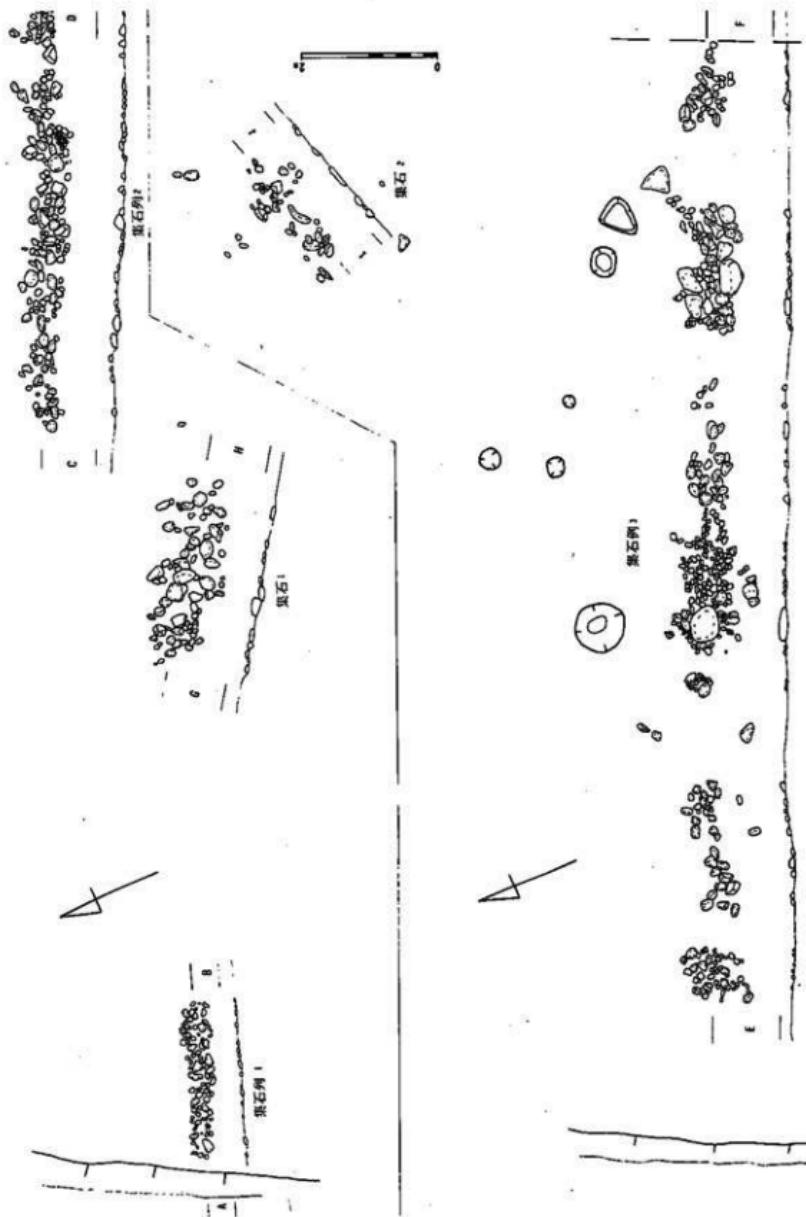


图46 集石列1·2·3号, 集石1·2号

集石 3 (図43)

土坑、ピット群7の南端に検出された。集石2と同様に、人為的なものかは不明である。また、遺物もない。

以上、集石列、集石とも石質はすべて花崗岩である。

(佐合)

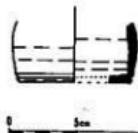


図47 集石列2号出土遺物(1:4)

5 遺構外の遺物

各遺構に関連する各期遺物の他に、それぞれの遺構とは直接結びつかないもの、遺構外から出土したものがある。そのほとんどは石器であり、土器はごくわずかである。

土器には、縄文中期・後期、弥生後期、平安土師器・須恵器・灰釉陶器、中・近世陶磁器の破片があるが、いずれも図示できるほどのものはない。

縄文中期土器片は、磨滅の著しい小破片のみであり、西方追跡からの流れ込みが考えられる。

縄文後期は、西方段丘崖下柱穴群周辺に集中して出土したもので、何らかの生活痕跡を残していたと考えられるが、それを決定する根拠は認められなかった。主体は、粗製深鉢片であるが、若干注口土器とみられる小破片もある。

弥生後期以降の遺物は、それぞれ発見された遺構と関連するものであるが、いずれも小破片である。

石器は、調査範囲内全体から出土しており、完形に近いものを主として、調査区毎に順次説明する。

1区からは、48図1~3が出土している。1, 2はいずれも大形の打石斧で、弥生後期の石鎚と考えられる。2は、先端部に磨痕があり、使用痕跡と考えられる。3は、大形の横刃形石器である。1~3いずれも硬砂岩製である。

2区からは、48図4~8が出土している。4は当方弥生後期通有の打製石包丁である。5は、小形の横刃形石器である。6~8は、打製石斧で、6は完形品であるが、7, 8はそれぞれ先端部、基部を欠く。7は弥生時代の石歯と考えられ、8は先端部に使用痕とみられる削痕が認められ、側縁部には敲打による調整痕が認められ、やや特異な製法の考えられるものである。いずれも硬砂岩製である。

3区(確認調査時のIVトレンチ南側の柱穴群周辺)からは、48図9~18が出土している。9~13は打製石斧であるが、それぞれ形の異なるもので、特に11は小形で破損品を再加工している。10~12は先端部に使用痕とみられる削痕が観察される。14~16は横刃形石器で、14は刃部に使用痕とみられる小剥離痕と、基部に敲打痕が認められる。9と11が緑色岩系の石材の他は硬砂岩である。17, 18は砥石で良く使われている。いずれも半欠品であるが、17は欠失後も使用された痕跡が認められる。どちらも凝灰質で、平安時代以降のものと考えられる。

4区からは、49図1~6が出土している。1~3が打石斧で、1, 2は先端部に使用による削痕が顕著に認められる。3は先端部を欠くが、大形の弥生後期の石鎚と考えられる。4は乳棒状磨石斧の半欠品である。縁部には敲打痕が残すが、表裏面はていねいに磨かれ平らな面が作り出されている。5, 6は横刃形石器である。1, 2, 4は緑色岩系の石材で、他は硬砂岩である。

確認調査時D区からは、49図7~9が出土している。1, 2は打石斧であるが、7は全体の風化が著しい。8は先端部のみの欠失品であるが、使用痕とみられる削痕がよく観察される。9は小形の特殊な打製石器で全面に削痕があり、使用痕の可能性もある。9が緑色岩系の石材の他7, 8は硬砂岩である。

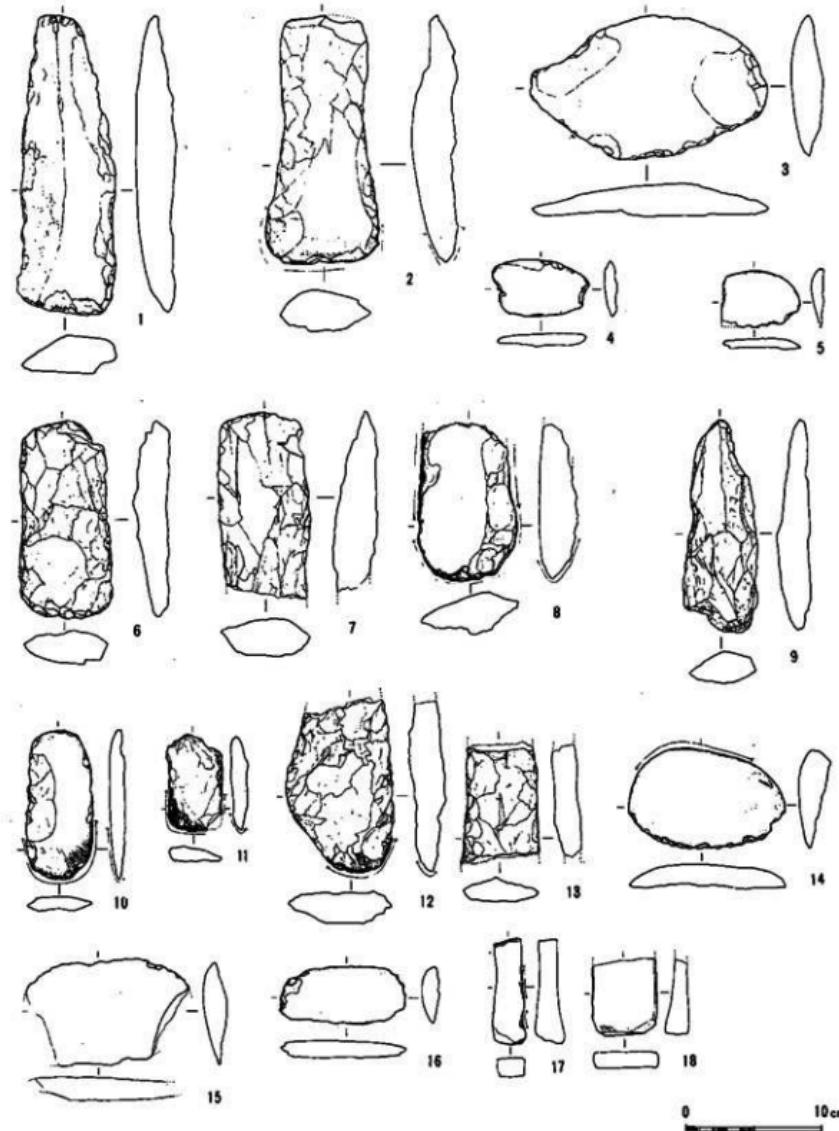


図48 遺構外出土遺物 I (1:4)

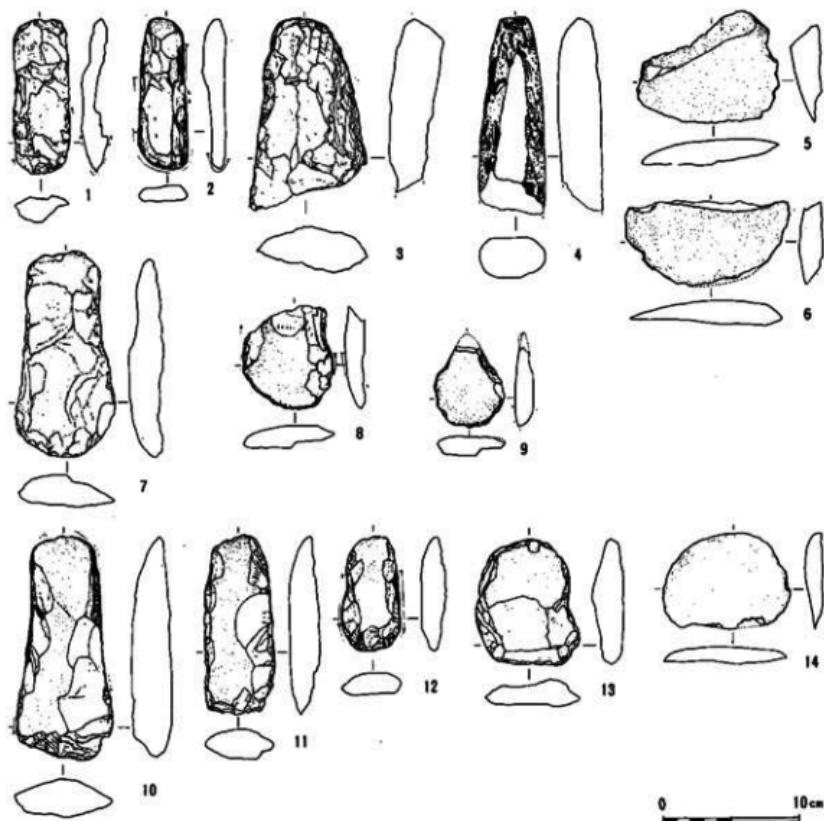


図49 造構外出土遺物II (1:4)



図49のII 造構外出土遺物III (1:2)

49図10~14は表面採集など出土地点の不明なものである。10~13は打石斧である。10, 12は側縁の一部を敲打調製するもので、48図8と同様製作方法に特異な形を示している。13はやや形態の異なる石器で弥生時代に属するものと考えられる。14は横刃形石器である。いずれも硬砂岩製である。

なお、それぞれの所属時期について、弥生時代、平安時代以降のものについては記述のとおりであるが説明しなかったものについては、ほとんどが縄文時代中期、後期に属すると考えられるが、断定はできない。縄文時代の土器が少ないので比べ、石器の出土が調査範囲内全体にわたり、その量も多いことなどから、単なる流れ込みと処理できないと思われる。例えば、同一段丘上における縄文時代の居住地域と今回調査地点とは、まったく無関係とは断定できず、むしろ強い関連が考えられ、今回出土した石器群の持つ意味を考察すれば、住居址等諸遺構によってのみ考えられていた当時の生活をより広い視野で把えられるのではなかろうか。

図49のⅡ1は黒曜石製の石器で、確認調査のA区2~9グリッドの黒色土中より出土した。一部に原石の節理面を残すが縫形の剥片を加工している。剥離時の打点を基部とし、基部から右側辺を2cmの範囲を裏面からプランティングし、抉状を呈し、その上部約3cmが刃部となる。左側辺は、ほとんどが節理面であるが、基部から先端まで裏面から左側辺の中程までプランティングが施されている。なお、刃部は使用痕とみられる小剥離がみられ、先端寄りの剥離は著しい。また、先端部はわずかに欠失しており、刃部の小剥離とともに使用形態を考えさせるものである。

図49のⅡ2も黒曜石製の石器で、42号住居址覆土から出土した。1と同様に剥片を用いた石器である。打点を基部に右側辺の基部と先端に裏面からのプランティングがみられるが、中間部は新しい欠損により不明である。左側辺全体が刃部となり、先端近く裏面に急な小剥離を集中的に施し先端部を尖している。刃部の基部近くと中程に使用によるとみられる小剥離が観察される。

上記2点の石器は他の伴出資料がないが、形態からみれば、先土器時代のナイフ形石器に類するものと考えられる。先土器時代に属するとすれば、伊那谷の段丘上の新資料として該期文化等考究するに種々の問題を提起するといえる。（小林）

(II) 第2次調査

第2次調査で発掘調査した遺構は次のようである。

住居址 31…縄文後期？ 1 (44号), 弥生後期 2 (36号・45号)

平安時代 17 (17号・18号・20号・21号・23号～25号・27号・30号・37号～43号・46号)

中世 11 (16号・19号・22号・26号・28号・29号・31号～35号)

土坑 10

集石址 1

溝址・溝 2

1. 住居址

16号住居址 (図50)

第2次調査の最

西端に発見され、

同時期の19号住居

址の西3mにある。南北4.15m×東西

5mの隅丸方形、深さローム層に25

cm掘りこむ竪穴住

居址である。床面

はあまり堅くなく、柱穴は壁に付くか、

竪穴外周に12ヶが

あり、竪穴内に9

ヶが発見されている。

建替のなされた住居址とみられ、また柱穴の配置も

整っていない。カ

マドははっきり認められなかったが、

東壁に付く焼土が

あり、ヘッティを置いたものと思われる。

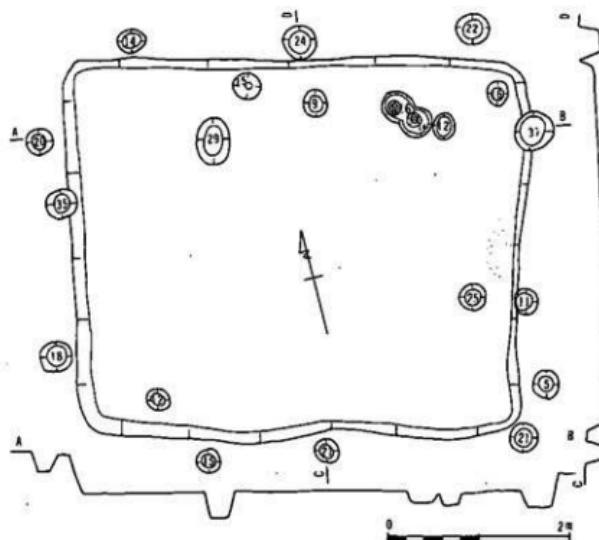


図50 16号住居址

遺物 (図101の15～18) は少なく、時期の明らかなものは18のオロシ皿片のみである。17の瓦質の半円状の1孔をもつ北東の柱穴内の出土で、弧をもつ側面は擦って加工されており、その用途、時期は不明

である。15・16の鉄塊の一つは明らかにルツボに入っていた痕跡を示すものとして注目される。遺物と住居址の形態から中世の住居址とみたい。

上層よりの出土に(図98の15~17)打石斧3と横刃形石器1があり、縄文中・後期の造構が周辺に存在していたものとみられる。

17号住居址(図51)

18号住居址に南東隅は切られ、西側の一部を残すのみで、戰時中から終戦後サツマイモの貯蔵穴が掘られ大部分はそれによって破壊されている。残る西側では、南北3.5mの隅丸方形をなし、ローム層に北壁で20cm、南壁で30cmの深さに掘りこむ竪穴住居址とみられ、平安時代前半の住居址とみたい。

遺物(図87の9)は僅少で図示したものは須恵器の皿とみると1点であり、その他須恵器の小片がある。いずれも良質な須恵器であり、平安時代後半の18号住居址出土の須恵器より古く、平安時代ないし、それをさか上るものともみられる。

18号住居址(図52)

17号住居址の南東隅を切り、26号住居址が南側に僅かかかってのっている。南北4.85m×東西3.5mの隅丸長方形をなし、ローム層に35cm掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く主柱穴4ヶ所が整った配置にあり、カマドは西壁の中央より南寄って付き、石組粘土カマドである。覆土に4ヶ所とみる集石があり、住居の廃絶後人頭大から一抱え余りの大石を入れ

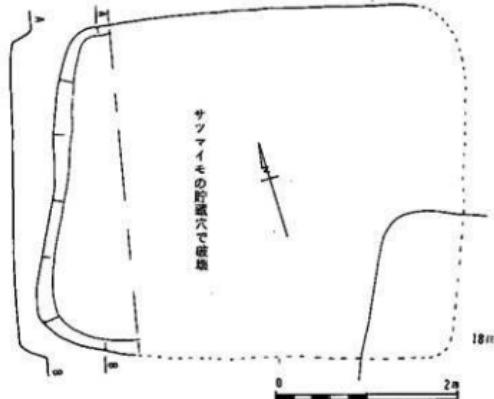


図51 17号住居址

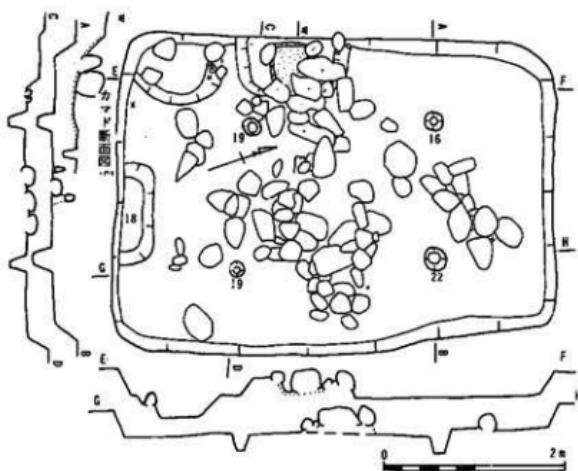


図52 18号住居址

れたものであり、窓櫻墓ともみられるがその性格は不明であった。南西隅に灰溜があり、南壁中央部に接して隅丸長方形の浅い掘りこみがあり、貯蔵穴ともみられる。

遺物（図86・101の10）には土師器・須恵器・灰釉陶器がある。土師器には1～7の壺、8・10・11の杯9の皿がある。壺1・2・4はロクロ成形がなされ、杯・皿もロクロ成形であり、杯は内面黒色である。いずれも胎土・焼成は良い。須恵器には14・15の壺の破片と12・13の杯があり、いずれも地方産である。灰釉陶器には16の碗、17の皿、18の段皿があり、段皿は東濃産である。皿の内面には重ね焼きの痕跡を残し、碗とともに狼投産のものである。鉄器に図101の10の鐵鋤の茎片ともみられるのがある。遺物の大部分は平安時代後半のものである。

19号住居址（図69）

中世の16号住居址の東3mにあり、平安期の37号住居址に隣接している。南3.2m×東西3.7mの隅丸長方形をなし、ローム層に30cm掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く、竪穴内には柱穴ではなく、南と北側のテラスに3または4こずつが不規則な配置にある。竪穴のほぼ中央部にヘツツイを置いたとみる焼土をもつ梢円形のマウンドが付いている。

遺物（図99の3）は少なく図示したのは青磁の茶碗1こである。良質な青磁である。図示以外に山茶碗の小片が僅かに出土をみているのみであるが中世の住居址とみることのできるものである。

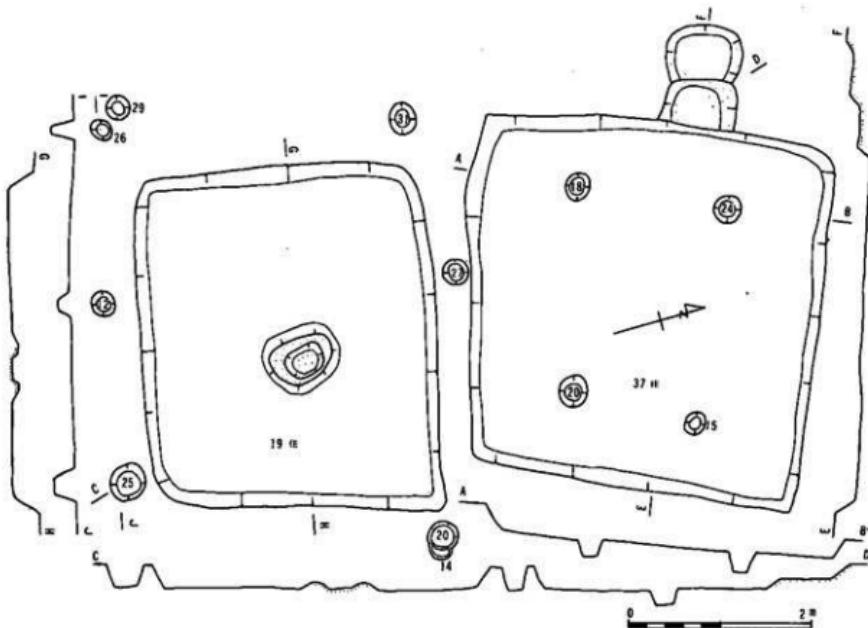


図69 19号住居址・37号住居址

20号住居址(図53)

中世の住居址26号址が東に、19号址が西に隣接し、平安期の18号住居址が北東1.2mにある。南北4.8m×東西3.6mの不整形な隅丸長方形をなし、ローム層に深さ25~30cm掘りこむ平安時代の窪穴住居址である。床面はあまり堅くなく、主柱穴は4こであるが西側の2こはテラスにある。カマドは東壁に中央部から僅か南に寄って付き粘土カマドである。

遺物(図97の7)は僅少で図示できるものは1点の灰釉陶器の杯のみである。薄手の作りで両面に軸が付き猿投系とみられる。図示外には須恵器片と土師器のカキ目をもつ国分式の壺片数点がある。

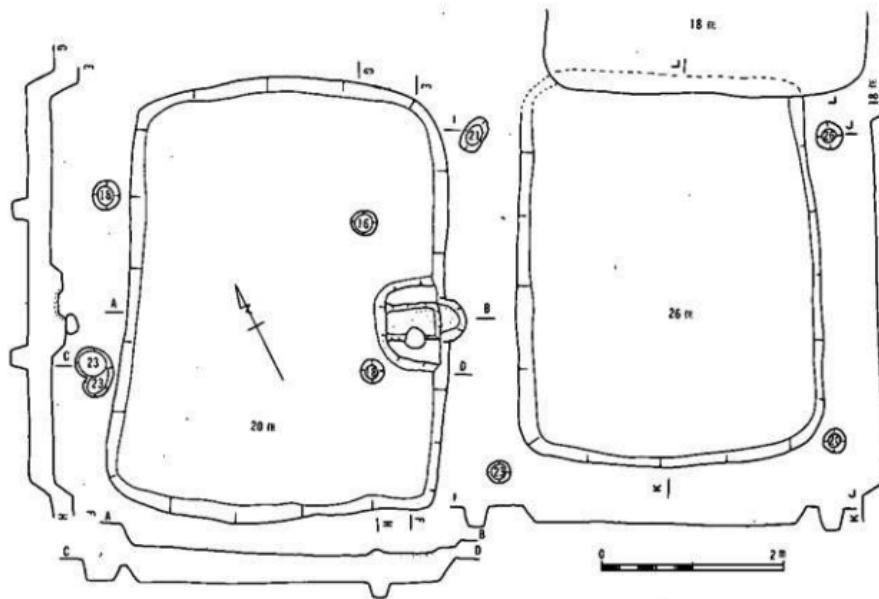


図53 20号住居址・26号住居址

21号住居址(図54)

確認調査時にIXトレーナーに発見され7号住居址としたものである。南地5.65m×東西5.2mの隅丸方形をなし、ローム層に20~30cmの深さに掘りこむ平安時代後半の窪穴住居址である。床面は比較的堅く、主柱穴は4こ整った配置にある。カマドは西壁の中央部に付き、石組粘土カマドである。カマドの前方に、1.6m×1.3mの楕円形に焼土があるが性格は不明である。カマドの左右に大きな掘りこみがあり、左側(南)の掘りこみは3段となり、その中よりの遺物が多く、帶金具の出土もみている。カマドに対する東壁には出入口とみられる段が付いている。

遺物(図85・101の1・11)は多く、土師器には1~5の壺があり、2のロクロ成形の内面黒色を除き国分式で4・5にみる木葉底がある。杯は6~13があり、いずれもロクロ成形であり、13を除き内面黒色

である。須恵器
14・33の壺と15
・16の杯がある。
14は内外面にタ
タキ目をもち、
33は壺ともみら
れ外面はタタキ
目の上に自然釉
がのり、内面に
木灰釉ともみら
れる褐色の口縁
部にかかるもの
であり、杯15と
ともに地方産。
14・16は美濃須
衛窯産である。
灰釉陶器には17
の短頸壺は疊骨
器とみるもので
あり、住居址出
土例は稀である。
18~29の碗、30
の段皿、31・32
の皿があり、22
の碗底部に×印
の窓印がついて
いる。32の皿は
釉がなくなる11
世紀末のもので

美濃須衛窯である。17の2は長頸瓶の底部で11世紀前半である。31の皿が猿投産以外は美濃・東濃産であり、重ね焼の痕跡をもつものが数点みられる。

鉄器（101の1・11）の1は帶金具で鐵製の大型であり、11は鐵鍔の茎片ともみられる。

22号住居址（図55）

18号住居址の東3mにあり、3.1m×3.1mの隅丸方形の深さ15cm～25cmローム層に掘りこむ堅穴住居址であり、堅穴内には柱穴ではなく、堅穴の周囲を北側を除き2間×2間に配置されている。焼土はみられない。

遺物(図97の8・9)には8の柱穴内出の弥生終末期の広口壺の肩部片とみられるものと9の平安期後半の須恵器腹片があるが、直接本址に結ばるものとは思えない。住居址の形態からみて中世の住居址と考えたい。

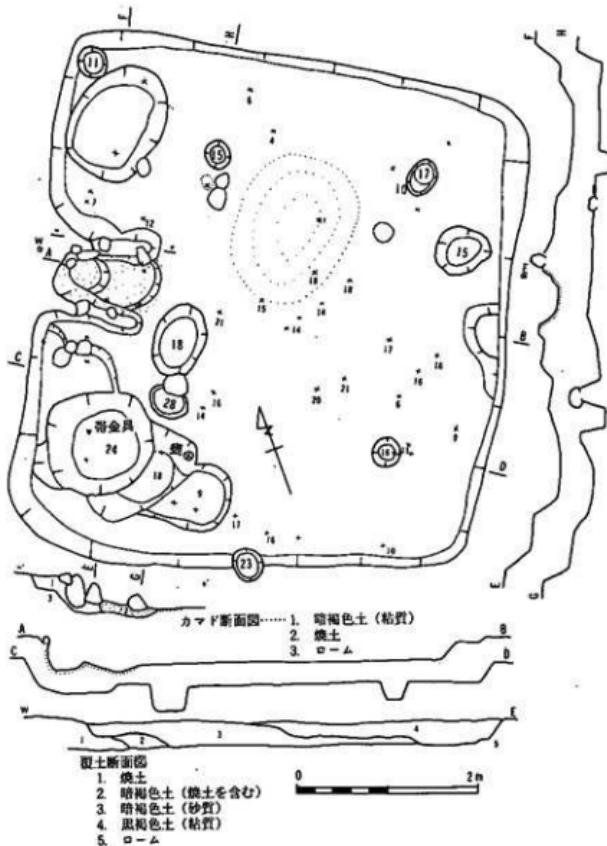


図54 21号住居址（平安）

23号住居址（図56）

確認調査時に発見され、8号住居址としたものである。東側に隣接して、27号住居址がある。南北3.3m×東西3.7mの隅丸方形をなし、ローム層に15cm前後の深さに掘りこむ竪穴住居址である。床面はあまり堅くなく、柱穴は5つ発見されているが、主柱穴は4つである。カマドは北壁の中央よりやや東に寄っており、壁を掘りこみ竪穴の外側に突出して造られた掘りこみのカマドである。北西の柱穴際に灰溜とみる掘りこみがあり、炭・灰が充満していた。

遺物（図97の1～4）は少なく土師器の壺に1・2と小片数点があり、1は薄手の頸部に指圧痕をもつもので混入品とみられる。2は図示外の数点はカキ目をもつ国分式のものである。3・4は灰釉陶器の壺であり、3は釉がみられない。4は猿投、3は美濃產で11世紀後半のものである。

24号住居址（図57）

21号住居址の東に隣接しており、南北4.15m×東西4mの隅丸方形をなし、ローム層に深さ10～15cm掘りこむ浅い竪穴住居址で平安時代後半のものである。床面は堅くなく主柱穴は4つであるが他に2つの柱穴があり、その配置からみて建替えが行なわれたとも思われる。カマドは北壁の中央部に付き粘土カマドである。その西に径110cmの円形の灰溜が付き底に人頭大の石が10個余置かれている。南東隅壁に土坑状の掘りこみがあるがその性格は把握できなかった。

遺物（図88）には土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄器片がある。土師器には2の壺はロクロ成形によるもので肩部にはタタキ目が付き黄赤色を呈す胎土・焼成の良好なものである。3・4の底部はカキ目が施

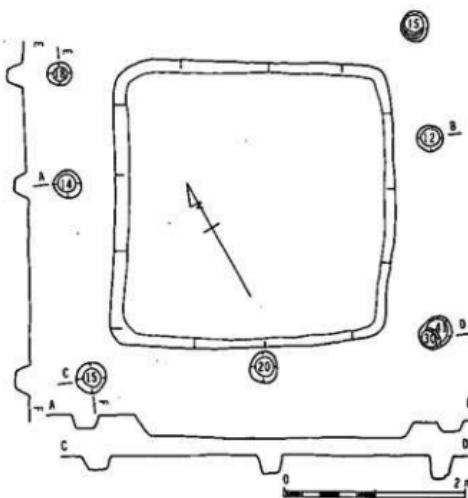


図55 22号住居址

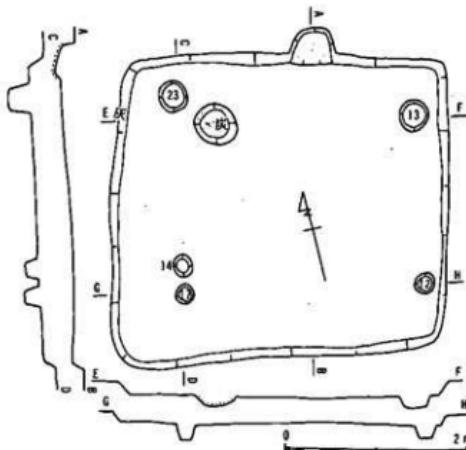


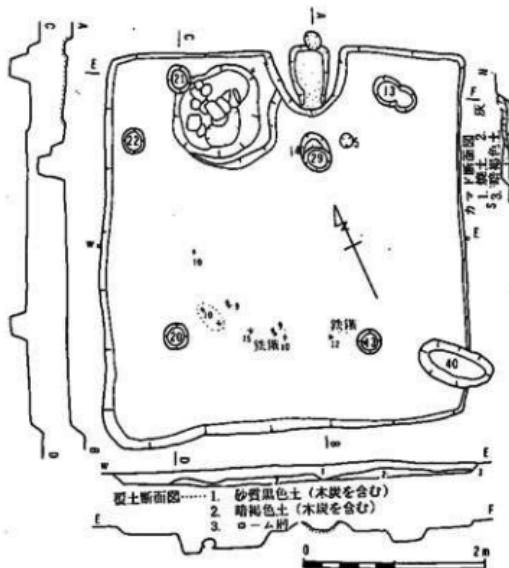
図56 23号住居址

され木葉底である。1つの須恵器の広口壺は21号住居址出土と付き、また、21号住居址出土の灰釉長頸瓶に本址出土の破片が付いている。灰釉陶器には5～9の碗があり、多治見産と美濃産であり、11世紀のものである。鉄器片10・11は鐵鎌の茎片とみられる。

25号住居址（図58）

24号住居址の南1.6mにあり、南北4.1m×東西3.4～3.8mの不整形な隅丸方形をなし、ローム層に10cm前後掘りこむ平安時代後半の竪穴住居址である。床面は堅く、カマドは北壁の中部に付くが、僅かに高い段をもちヘツツイを置いたものとみられ焼土は著しい。主柱穴は4つであるが、他に3つが各主柱穴に隣あっており、西壁の中央部をやや北に寄つてある焼土からも建替えの行われた住居址とみられる。西と北のテラスに4つの柱穴が発見されているが本址との連関は不明であった。竪穴のはば中央に径65cmの円形の浅い掘込みがある。

遺物（図89）には土師器・須恵器・灰釉陶器があり、土師器には1～3の圓分式の壺がある。須恵器は4の広口壺の口縁部と5の底部、6の21号住居址出土の図85の33と付く広口壺の破片があり、また7も図85の14と付く壺の破片とみられるものがある。灰釉陶器の8の長頸瓶の口縁部は美濃産であり、9の皿は二次的な火力によって変色して



いる。隣りあう21号・24号住居址との関連が注意される住居址であり、11世紀に位置づくものである。

26号住居址（図53）

18号住居址の南に接し、北側の1部は18号住居址の上に張床をもってのっていたが、18号住居址が先に調査したため、この張床面を削りとった誤を犯したものである。南北推定4.3m×東西3.35mの隅丸長方形をなし、ローム層に20cmの深さに掘りこむ竪穴住居址である。竪穴内には柱穴ではなく、東西のテラスに2つづつの柱穴がある。床面はあまり堅くなく、焼土の検出もない。遺物の出土をみないが、住居址の形態からみて中世の住居址と考えたい。

27号住居址（図59）

23号住居址の東に接し、南北5.6m×東西4.7mの長方形に柱穴がとりまくものであるが、柱穴の配置からみて2間×3間の建物址であり、柱穴の数と配置からみて建替えの行われたものとみられる。中央部に変形の約2.3m×0.6mの著しい焼土があり、その南面は掘り込みとなつておおり北側には木炭・灰の堆積が広がっている。火災の住居址とも初めはみられたが、柱の焼けた痕跡はなく、掘り込み内より鉄器片・鉄鋸數点が検出され、鐵治の工房址として調査をすすめたが、それを裏付けけるにはいたらなかつた。

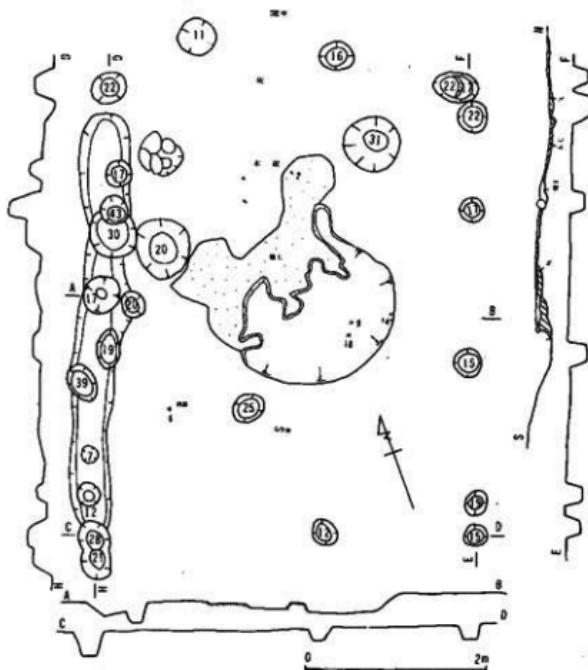


図59 27号住居址

遺物（図87の1～8、101の3～6）は少なく、土師器・須恵器・灰釉陶器の小片が多い。土師器では図87の6の四分式壺片と図示外の小片10数点があり、7は底部の厚いロクロ成形の碗である。須恵器には8の壺の破片と、図示外に杯の小片数点がある。灰釉陶器に1～5の碗と図示外の小片は多く、この中に段皿の小片1点があり、いずれも11世紀のもので美濃産のものが主となっている。鉄器（図101の3～6）には3・4の鐵鋸の基片とみるもの、5の釘、6の不明鉄片があり、図示外に鐵鋸5この出土をみている。本址は平安時代末期の工房址ともみられる特殊な遺構とみられる。

28号住居址（図60）

同時期とみる29号住居址が南に、東に31号住居址が隣接してあり、南北 $3.75\text{m} \times$ 東西 3.2m の隅丸長方形をなし、ローム層に深さ $15\sim20\text{cm}$ の深さに掘りこむ竪穴住居址である。床面はあまり堅くなく、柱穴は東と西のテラスにあって西側に3ヶ所、東側2ヶ所が発見されているがその配置は整ってはいない。北壁中央部を竪穴外に突出して掘りこむカマドが設けられている。

遺物は素焼土器小片2点検出されたのみであり、住居址の形態からみて中世の住居址とみたい。

29号住居址（図61）

同時期の28号住居址の南に隣接し南北 $4.1\text{m} \times$ 東西 4.4m の隅丸方形をなし、ローム層に深さ $10\sim15\text{cm}$ 掘りこむ中世の竪穴住居址である。床面は堅く、柱穴は竪穴内に10ヶ所が発見されているが、主柱穴は配置からみて4ヶ所に限られる。焼土はみられず、遺物は素焼土器片1点のみであり、上層から混入とみられる図98の13の打石斧・14の横刃形石器がある。住居址の形態から中世の住居址とみたい。

30号住居址（図62）

27号住居址の東 2m にあり、南北 $4.3\text{m} \times$ 東西 3.7m の隅丸方形をなし、ローム層に $30\sim40\text{cm}$ と深く掘りこむ平安時代後半の竪穴住居址である。床面は堅く、柱穴は竪穴内にはカマドの斜前面に1ヶ所が発

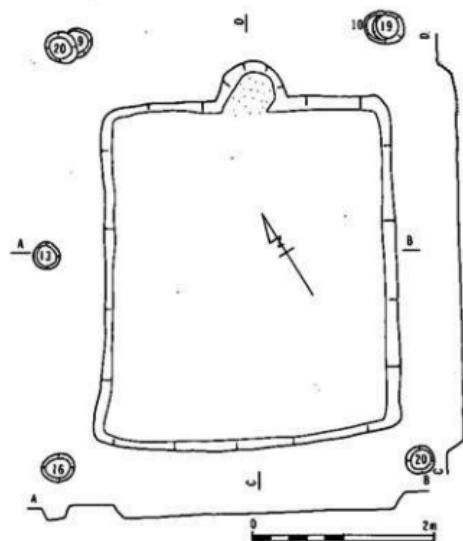


図60 28号住居址

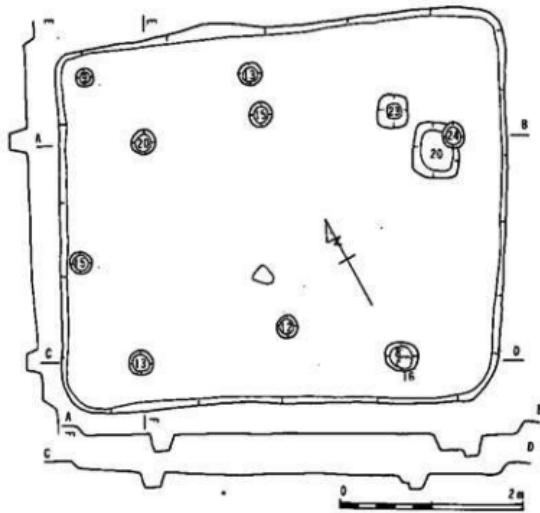


図61 29号住居址

見されているが、主柱穴は4ヶがテラス上にあって、その配置は整っていない。カマドは東壁の中央部に付き、石組粘土カマドである。その南に接して灰溜の掘りこみと北東隅に貯蔵穴ともみる掘りこみがある。

遺物(図92)には土器器・須恵器・灰釉陶器があり、土器器の1の壺は灰陶出土で口径25.4cm、高さ36.5cmの大形壺であり、底部は木葉底である。2・3の壺はカマド内出土で、いずれもカキ目をもち圓窓式であり、4は高台付のロクロ成形による壺とみられる底部で内面黒色である。

須恵器に6・7の杯があり地方産である。灰釉陶器には5の皿の口縁部片があり、美濃産のものである。図示外に覆土出土には良質な須恵器壺片・常滑壺片がみられる。

31号住居址(図63)

同時期とみる28号住居址の北東に隣りあっており、北東1.8mに32号住居址がある。南北3.9m×東西2.9mの長方形をなし、ローム層に15cm前後の浅い掘りこみをもつ中世の竪穴住居址である。床面はあまり堅くなく、竪穴内には何の施設もなく、柱穴が西と東側に3ヶずつ付くものであり、焼土はみられない。遺物は瓦より素燒土器片2点があったのみである。住居址の形態からみて中世の住居址と考えたい。

32号住居址(図64)

同時期とみる31号住居址が南西1.8mにあり、南北3.85m×東西3.65mの

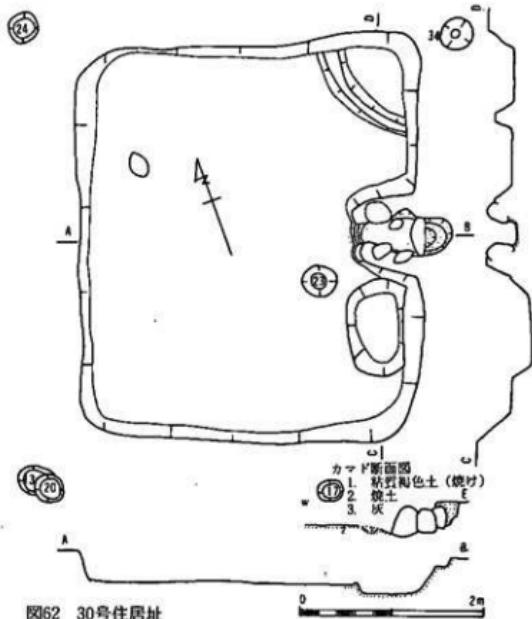


図62 30号住居址

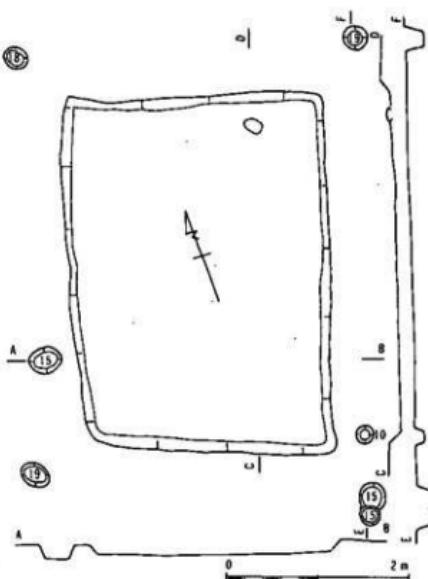


図63 31号住居址

不整形な方形をなし、さらに北と東の内側は1段下がって3.4m×3.35mの方形区画をなし、ローム層に上段面で10cm、下段はさらに10cm下がる掘りこみをもつ中世の竪穴住居址である。床面は堅く、主柱穴は4つで南北テラスに2つ、北の1段下がる内壁にかかって2つが掘りこまれている。北西隅の外側に2つ並ぶ柱穴があり、これが主柱穴の1つかもしれない。南壁の中央よりやや西によって壁を外部に突出し径80cmの焼土をもつ深い掘りこみがあり、ヘツツイを置いたものとみられる。

遺物（図99の5）は僅か図示できるものは背磁の碗1つのみである。釉の厚くかった良質なものである。他にカマド内より、須恵質の陶片2点出土をみたのみである。

32号住居址（図64）

同時期の32号住居址の北に隣接しており、南北4.3m×東西3.5mの隅丸長方形をなし、ローム層に深さ15cm掘りこむ中世の竪穴住居址である。床面はあまり堅くなく、柱穴は竪穴内に6つ発見されているが主柱穴は配置からして4つとみられる。カマドは北壁中央部に付き、マウンド状をなしヘツツイを置いたものとみられる。

遺物（図99の1・2）は少なく、1は山茶碗はコネ鉢とみるものである。2は上層出土の灰釉陶器で美濃産とみられる。図示外に小鉄片2点の出土をみているのにすぎない。

34号住居址（図66）

同時期の29号住居址の東に接し、北西

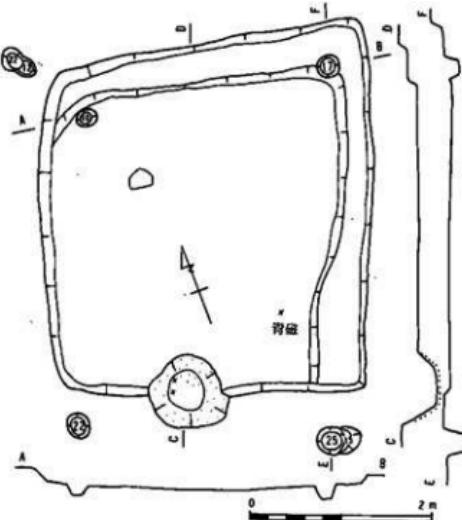


図64 32号住居址

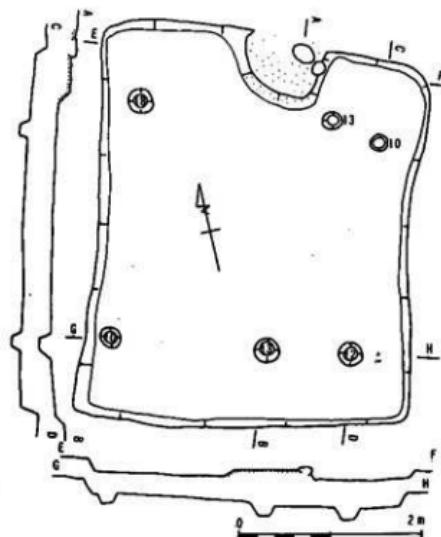


図65 33号住居址

に28号住居址、東に35号住居址が隣りあっている。南北4.6m × 東西4.55mの方形をなし、ローム層に10~15cmの深さに掘りこむ中世の住居址である。床面はあまり堅くなく、主柱穴4こが竪穴内にあり、カマドは南壁の中央より西に片寄ってあり、壁を外側に突出した円形の浅い掘り込みで焼土をもち、ヘツツイを置いたものとみられる。北壁の中央部を切って径1.1mの円形の土坑B 2号が掘りこまれている。

遺物（図69の4）は図示したものは1点のアメ釉碗片のみである。他は中世陶片を僅かにみているにすぎない。

35号住居址（図67）

西に同時期の34号住居址に隣接し、南北4~4.5m × 東西4mの隅丸方形をなすが西と東側の辺は50cm余の差をもち、ローム層に10~15cmの深さに掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅くなく、主柱穴4こが竪穴内に比較的整った配置にある。カマドは南壁の中央部を外に突出して掘りこむものでヘツツイを置いたものとみられる。北西隅にかかるて土坑B 1号がある。遺物はなく、住居址の形態からして中世の住居址とみたい。

36号住居址（図68）

35号住居址の南1mにあり南北5.5m × 東西5.9mの隅丸方形をなし、ローム層に20

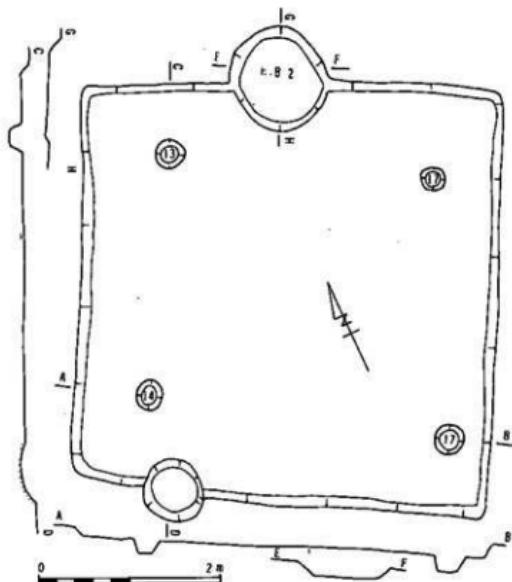


図66 34号住居址・土坑B 2号

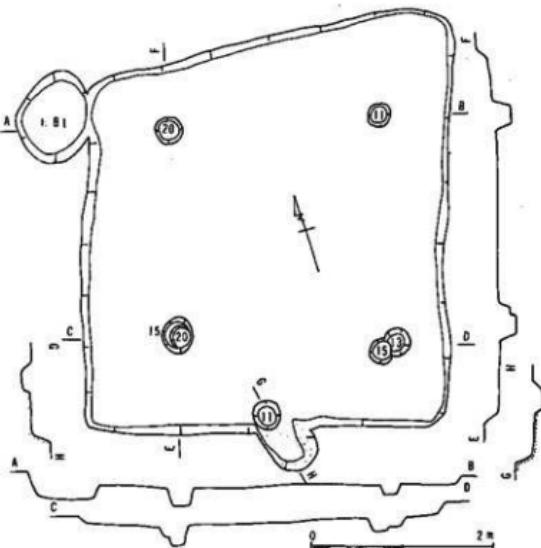


図67 35号住居址・土坑B 1号

~30cmの深さに掘りこむ竪穴住居址である。床面はあまり堅くなく、柱穴は8つ発見されているが、配置からみて主柱穴は4つであり、南側の間に1つ、北側の間に2つの支柱穴が配されたとみる。炉址は西側の柱穴間の中央部にありコの字形に石が組まれたものとみられ石のはずされた痕跡を残す。

遺物(図98の5)は図示した石鍬1との出土をみたのみである。硬砂岩製、重量645gで弥生時代の石鍬形石器であり、住居

址の形態と、11号・13号住居址との関連からして弥生後期の住居址とみたい。

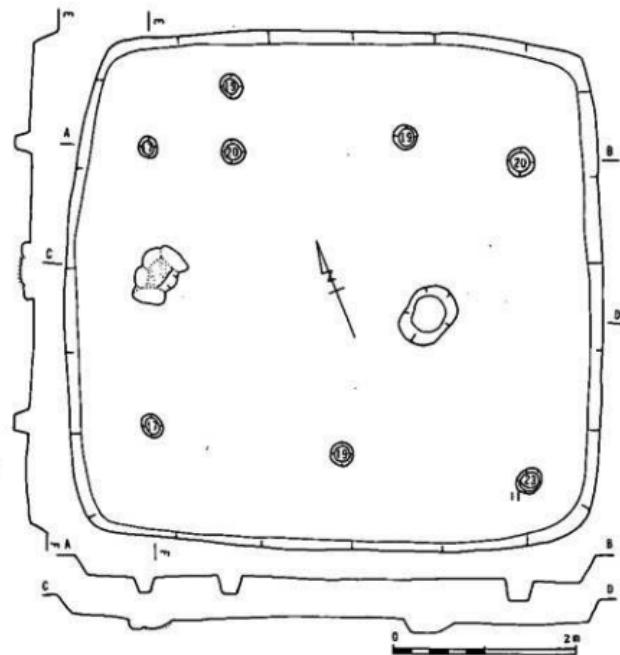


図68 36号住居址

37号住居址(図69)

中世の19号住居址の北に接しあって発見された。南北3.9m×東西4mの方形をなし、ローム層に西壁で30cm、東壁で20cm掘りこむ平安時代後半の竪穴住居址である。床面は堅くなく、竪穴内に主柱穴4つが配置されており、カマドは西壁中央より北に寄ってあり、テラスに2段となって掘りこみのカマドで、ヘッソイを置いたものとみられる。

遺物(図97の5・6)は僅少で5はロクロ成形の土師器杯であり、6は灰釉陶器碗底部で黄ばい胎土で作りは良くなく、東濃系のものである、11世紀のものであり。上層より図98の21・22の打石斧2点が出土しているが混入品である。

38号住居址(図70)

確認調査時に発見され、その時点では1号住居址(図3)としたものである。南北3.8~4.3m×東西3.55mの隅丸台形をなし、ローム層に20cm前後掘りこむ平安時代の竪穴住居址である。南壁より僅かに入って東西方向に中世の溝跡B1号によって40~50cm幅に切られている。床面は堅く主柱穴4つが整った配置にあり、カマドは北壁の中央部に付き、石組粘土カマドであり火床に石を立てた支脚がある。カマド東

袖の下に旧カマドがあり、竪穴外部にまで突出して築かれたものとみられ、カマド前面の数個の石からみて石組カマドであったと思われる。火床に石を立てた支脚があり、煙抜穴が残っている。カマド東側に灰溜の掘りこみと、それにより南に東壁につく高10cm程の細長い段が付き、出入口かともみるが、はっきりしない。

遺物(図90)はカマド内よりの出土で、土師器には1・2の大型の国分式の壺と4のロクロ成形の椀があり、内面に暗文がつく。須恵器に5の高台付の椀があり、付高台である。灰釉陶器には6の長頸瓶と7の皿の底部があり、図示外に耳皿の小片があり、いずれも美濃産であり、平安時代後半11世紀のものである。3の磁石は1面のみが使用され、硬い材質でその用途は不明である。

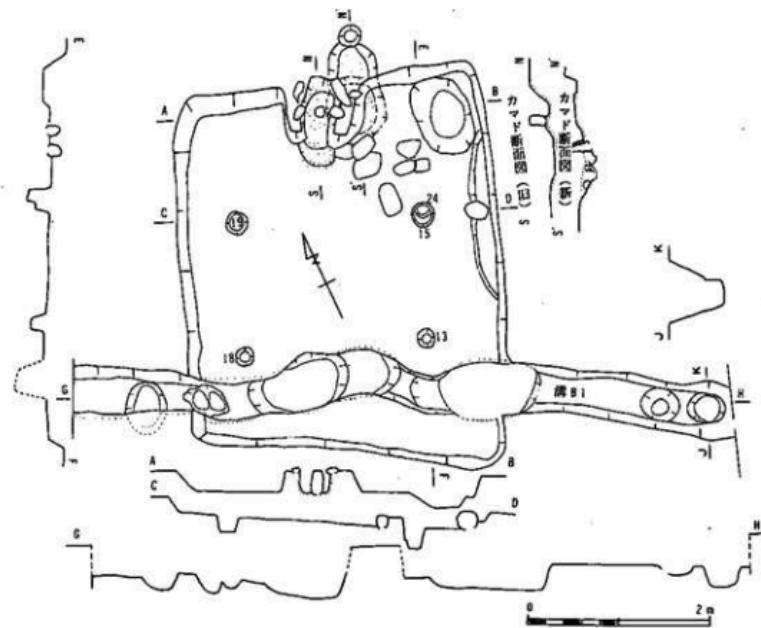


図70 38号住居址、溝B 1号

39号住居址(図71)

確認調査時に発見され、その時点で2号住居址(図3)としたものである。南北3.7m×東西3.5mの隅丸方形をなし、ローム層に深さ25~30cm掘りこむ平安時代の竪穴住居址である。床面は比較的堅く主柱穴は4つ整った配置であり、カマドは北壁の中央よりやや東に寄ってあり、粘土カマドであり、火床を、90cm×65cmの楕円形に広く掘り凹め僅かな段をもってテラス面に上っている。カマド東側に灰溜の掘りこみが付く。

遺物(図91)には土師器・須恵器・灰釉陶器がある。土師器の1の壺はカマド内出土、2の底部は南西

隅より出土し、国分式の大型甕であり、4・5の杯はロクロ成形、糸切底で内面黒色である。須恵器には6~8の杯と9の碗があり、いずれも胎土に多くの長石粒を含み、9を除いて焼成も不良であり地方産のものである。3の灰釉陶器の手付小瓶は美濃産の11世紀のものである。

40号住居址（図72）

第2次調査区域の南東端部にあり、38号住居址の東3mにあり、南に接して土坑B10号、これに続いて溝B1号がある。南北4.1m×東西3.9~4.3mの隅丸台形をなし、北壁で20cm、南壁で10cmローム層に掘りこむ平安時代後半の竪穴住居址である。床面は堅くなく、主柱穴は4ヶ、カマドは北壁のはば中央部を外部に突き出して掘りこむもので、ヘツイを置いたものとみられる。

遺物（図93の1~4・101の7~9）

は少なく、図示したものは灰釉陶器で1の段皿、2の皿、3の碗、4の長頸瓶とみられる底部があり、美濃産である。図示外に土師器・須恵器の壺の小片がある。鉄器には図101の7~9があり、7は釘・8は釘または鉄錆の茎部片ともみられるが不明、9は指輪状のリングであるが不明である。

41号住居址（図73）

北1.6mに42号住居址がありさらに北に43号住居址と並ぶ。南北4.2m×東西4mの隅丸方形をなし、25~30cmの深さにローム層に掘りこむ平安時代後半の竪穴住居址である。

床面はあまり堅くなく、柱穴は11ヶ発見されているが主柱穴

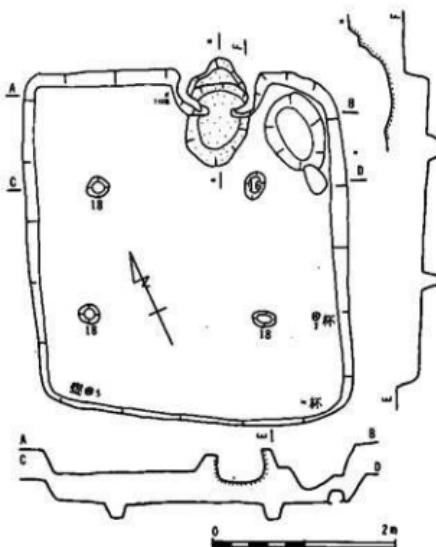


図71 39号住居址

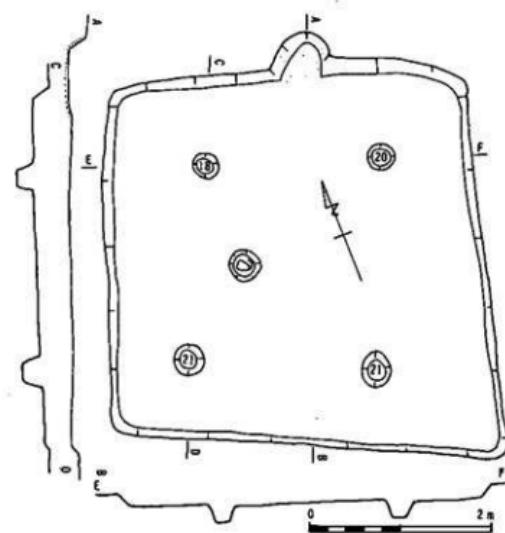


図72 40号住居址

は4ことみられ、その配置からみてP5～P8の4ことみられるが、東西壁に掘りこむP1～P4の配置とも思われる。カマドは北壁の中央よりやや東に寄ってあり石組粘土カマドである。カマドの東側に灰溜とみる掘りこみが付き、南壁に付いて楕円形の浅い大きな掘凹みが3ヶ所にある。カマド西にP4から壁に沿ってP1に至る周溝があらわれる。堅穴のほぼ中央部に10数個からの人頭大から一抱大の石による集石が床面に付いており、その性格は把握にいたらなかった。

遺物(図94)は多く、カマド内とその周辺が大半を占め、他は覆土下層の出土をみているが床面出土はなくなる。遺物には土師器・須恵器・灰釉陶器がある。土師器は1・2の大型壺があり、3の小型壺はロクロ成形、横位の刷毛目調整が施され糸切底である。4・5は1・2と同じカキ目をもつ国分式の小型壺である。杯及び碗には15～20があり、いずれもロクロ成形、内面黒色である。須恵器には器形を知ることのできるのは6の碗、7～11の杯があり、6と10は高台付、他は糸切底であり、いずれも胎土・焼成の良くない地方産のものである。壺形片に12～14があり、胎土・焼成の良い美濃須衛産とみるものである。灰釉陶器には碗形に21～24があり、皿に25～29があり、猿投・美濃・多治見産があり、11世紀のものである。

42号住居址(図74)

41号住居址の北1.6m、北に43号住居址が0.5mにあり3住居址が南地に並ぶ。南北3.9～4.35m×5.3mの隅丸長方形をなし、ローム層に30～35cmの深さに掘りこむ平安時代の堅穴住居址である。床面はあまり堅くなく、柱穴は10こ発見されているが配置からみて4または6ことみられる。カマドは西壁の中央部と東壁の北隅に付いての2こがあり、これらが1住居内に2こ付いていたか、新旧があったかは、その保存が良好でなかつたためはっきりしなかった。西側は粘土カマド、東側は石組粘土カマドとみられた。両カマドの南に灰溜の掘りこみが付き、周溝ともみられる幅30～50cm、深さ10～15cmの溝がカマドを除き壁に沿ってめぐっている。堅穴の中心よりやや東に寄って浅い掘凹みと南の周溝に沿って深さ20cm余の楕円形の掘りこみがあり、住居址の構造は複雑であり、建替え、建増しの行われたものと思われる。

遺物(図95)は多く、両カマド内及び周辺より出土をみている。土師器には1・3～5の壺があり、3は口縁部は僅かに開いて立ち、口唇部は内面に折りこまれて丸くなり、肩部が張り、頸部に刷毛による横

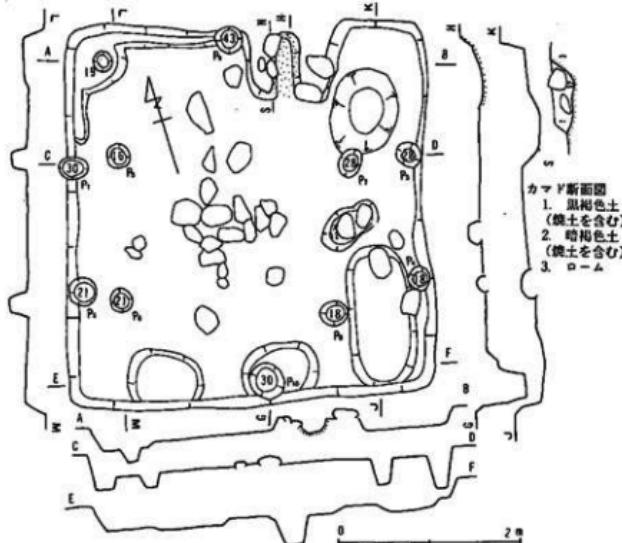
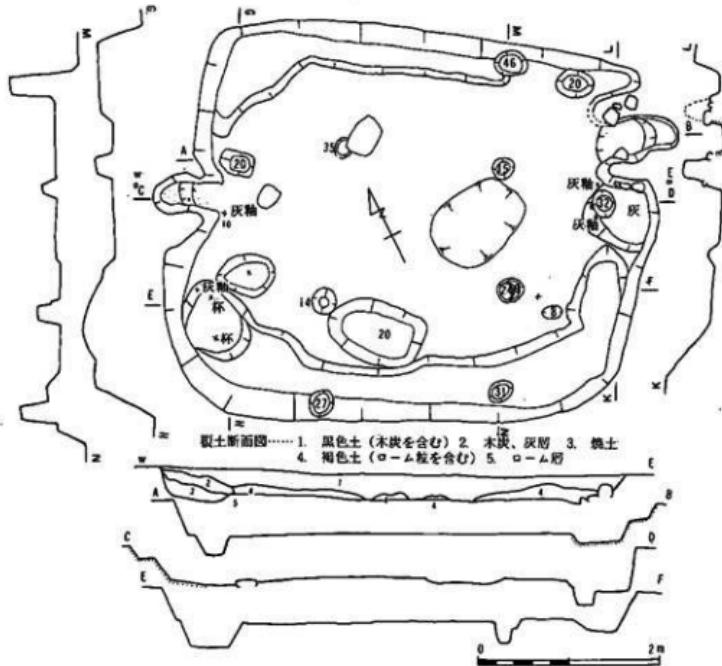


図73 41号住居址

帶かめぐらしている。3以外は固分式の荒いカキ目をもち、底部には木葉文が付く。4は乳白色を呈しており、当方の土師器が黄褐色呈すのに対し、注意をひくものである。6の鉢はロクロ成形で口径23cm、高さ9.8cm、外面は淡黄褐を呈し、内面黒色である。杯には7~10があり、いずれもロクロ成形、7・8は内面黒色である。須恵器には11~13の杯があり、いずれも地方産の胎土・焼成の良くないものである。

灰軸陶器には長頸瓶・碗・皿があり、14の長頸瓶は底部を欠くが、成形・焼成の良好なものである。15の碗は内面にたっぷり釉がかかり、外面に自然釉かかり成形・焼成良好なものである。16の碗は内面のみに釉がかかる。皿17は薄く釉がかかり、18は無釉で焼ひずみがある。いずれも猿投崖であり、10世紀前半に位置づくものである。図示以外に小破片が多い。



43号住居址(図75)

42号住居址の北40cmにあり、南北3.25m×東西3.55mの隅丸方形をなし、ローム層に北壁で25cm、南壁で20cmの深さに掘りこむ平安時代後半の竪穴住居址である。床面は張り床となり堅い。主柱穴は配置からみて4つであるが、西側には支柱穴または建替えとみる柱穴が3つ発見されている。カマドは東壁の南に片寄ってあり、石組粘土カマドである。竪穴の中心から南東に僅か寄って、炉址ともみられる楕円形の掘りこみがあり、北壁の中央部から西壁の3分の2にかけて周溝が付いている。

遺物(図93の5~18・101の14)は比較的少なく、土師器・須恵器・灰軸陶器と鉄片の出土をみている。土師器の5の杯は外面は暗褐色、内面黒色で竪状具による暗文がみられる。13~16の要破片はカキ目の上にX状に半截竹管によく斜線が引かれ、14はカキ目を切る横の沈線が施され、15は梯状具による縦の沈線が

施され比較的古いタイプを残すものとみられる。須恵器の6～8・18の杯と12の蓋がある。18には内面は欠損して全体を知ることはできないが墨書きがあり「大」は読むことができる。6は胎土は良いが茶褐色を呈し地方産のものであり、12以外はいずれも胎土の良くない地方産である。12の蓋は灰色を呈し一見灰釉陶器ともみられ美濃産のものである。灰釉陶器9・10の碗・11の段皿があり、美濃産であり、11世紀に位置づくものである。鉄器片（図101の14）は小札状をなすものであるが不明である。

44号住居址（図76）

確認調査時にXIIトレチに僅かに西側にかかるが未発見であったが、2次調査時ブルトーザによる排水溝を掘り下げた断面に発見された。覆土は暗褐色土層でローム層との区別はむずかしくこの中より打石斧の出土をみて住居址の存在を確めたものである。このため西側の1部は切られているが南北4.35m×東西推定4mのやや不正形となる梢円をなし、ローム層に20cm前後の深さに掘りこむ竪穴住居址である。床面はあまり堅くなく、柱穴は5つが発見されているが西側の切採になお1つもあつたとも予想され主柱穴6つともみられるが不明である。炉址はほぼ中央部にあり、僅かな焼土と木炭・灰をもつて床炉である。

遺物（図98の1～4）には土器の出土ではなく石器のみである。1～3は打石斧、4は横刃形石器で図示外にも石器の破片が散点みられる。いずれも硬砂岩製で、3は弥生期の石鍬ともみられる作りであり、重量450gの大型であり、他も大型のもので、土器の出土をみないが、周辺出土に縄文後期前半とみる土器があり、本址はこ

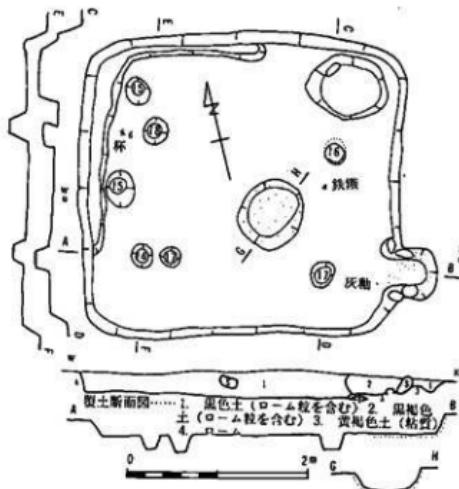


図75 43号住居址

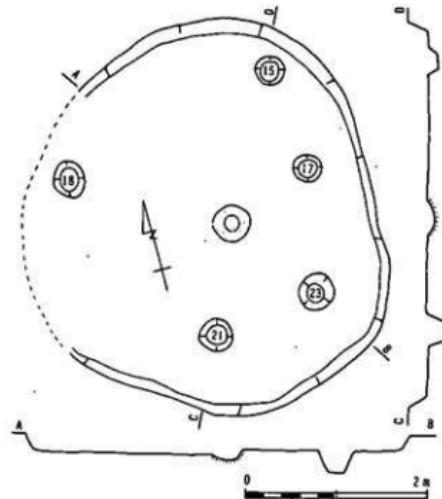


図76 44号住居址

の期のものと思われる。

45号住居址（図77）

第2次調査の南西端部に発見され、南北 $5.1\text{ m} \times$ 東西 5.4 m の隅丸方形をなしローム層に20cm前後の深さに掘りこむ竪穴住居址である。耕作による覆土の荒れがみられ、床面はあまり堅くなく、主柱穴は4つとみられるが、その配置からみて建替の行われたものか、または支柱穴とみるが4つと発見されている。炉址は北側の主柱穴間の中央より西に片寄ってあり、地床炉である。

遺物の出土は無く

住居址の形態からみ

て弥生後期のものと思われる。

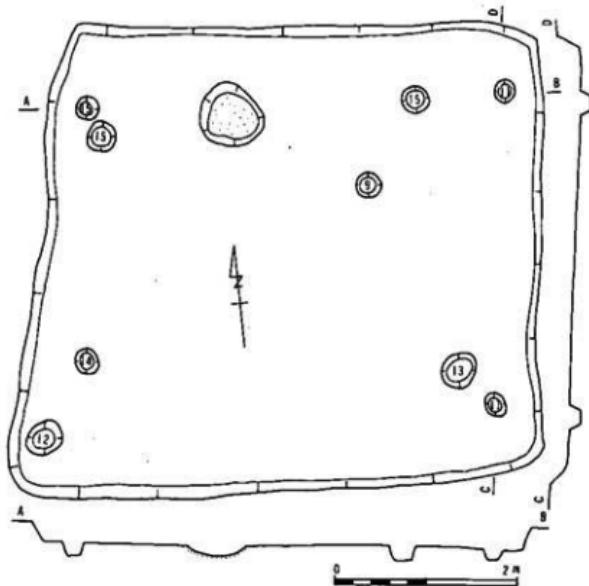


図77 45号住居址

46号住居址（図78）

第2次調査の北西端部に発見され、南北 $6.1\text{ m} \times$ 東西 5.4 m の方形をなし、ローム層に25~40cmと深く掘りこむ平安時代の竪穴住居址がある。床面は比較的堅く、竪穴内部は複雑な構造をなし、幅40~50cm、深さ5~10cmの溝に4区画されるベット状の段が東西方向に中央部に並ぶ。主柱穴は4つとみられるが、その配置は整っていない。カマドは東壁の中央部に付くが崩されており、顯著な焼土と、その形骸を僅かに残すものであった。石組粘土カマドとみられ、カマド前面に並ぶ石は、そのはずされたものと思われる。カマド周辺に土師器の壺4つ体分が散乱していた。

遺物（図96・101の2）は比較的多く、土師器には1~4の大型壺と7の杯がある。1~3は荒いカキ目をもつ圓分式の一般的にみるものであるが、4は櫛状具による細い縦の擦痕をもつものであり、1・3・4は木葉底である。7の杯はロクロ成形、焼成、胎土は良好である。須恵器8の碗は美濃須衛産で図示しないが、同系統の小片が数点みられる。9の杯蓋は胎土・仕上がりの良くない地方産のものである。灰釉陶器には5の長頸瓶の口縁部と6の杯があり、仕上がりの良好なもので猿投産の平安時代前半のものである。図101の2は銅製の帶金具で北壁に沿う溝底部出土で注目されるものである。これに隣接してやや上部より鉄鋒3つ出土をみている。（図版参照）

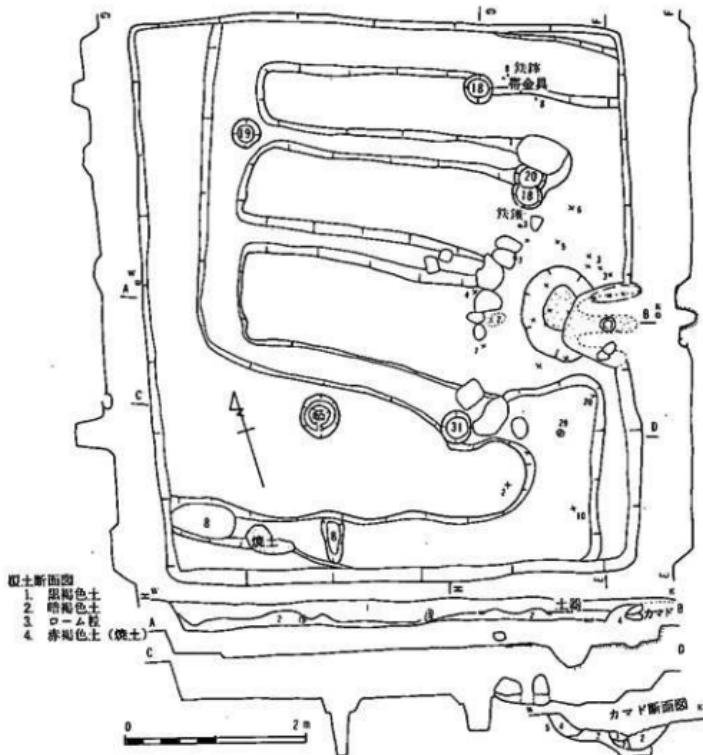


図78 46号住居址

2. 溝址・溝

溝址 B 1号 (図79・80)

上段面の段丘崖下の北約8mに東西方向に走る溝址で西側の約2分の1余は盛土のため未調査に終わっているが溝址1号に直角に近い状態で交わるものと予想されるが、1次調査では盛土があり、また土石流の堆積も甚しくその状況は把握されなかった。東側は集石B 1号の調査によって溝は南に向いていることが認められた。しかし盛土のため、それ以上の調査は断念した。東西方向の溝址の長さは推定115mとなる。調査は部分的に行ったものであるが、溝幅は80~104cmと不定であり、深さ20~30cmである。西側(図79)では溝内に人頭大余の石が集石状に入っているが、底部に水の流路を示す痕跡はないが、東側(図80)には

いくに従い構築後とみる大洪水による氾濫の流路となつたとみる大きな掘りこみが数多くみられる。その覆土にみると砂礫の堆積が溝址内を埋めており、また周辺に砂礫が広がっていることが各所にみられた。

溝址構築時期は平安時代後半の38号住居址、(図70)の南側を東西に切っており、それ以後に構築されたことは確かである。

遺物(図101)には平安時代の遺物と中世の遺物を溝址内より出土をみてある。平安時代の遺物には1の土師器の国分式の壺、2の灰釉陶器の碗、6~8の須恵器壺片があり、図示外に小片は10数点余の出土をみてある。須恵器・灰釉陶器には顕著にみられないが土師器は磨滅が顕著にみられる。明らかに流れ込みとみられる。中世の遺物には3の山茶碗、4の古瀬戸の底部がある。5は須恵器で表面は茶褐色を呈し、タタキ目をもつ。表面は黄色ぼい横位の筋が入るものであり、猿投産の平安時代前半のものである。図示外には瀬戸、常滑の破片数点がある。これら遺物からみて中世構築の溝址であり、方形にめぐる中世館址の周濠をなすものと思われ上部は削られ濠底部のみが残ったものと考えられる。

溝B 2 (図4参照)

確認調査時にⅢトレンチとXトレンチに発見され溝3としたものである。ⅢトレンチからXトレンチにつながるものと予想されたが前者の溝は発見時においては幅60cm位あり、黒土の堆積で人工的なものとみられたが調査結果、深さ10cm足らずの溝で東に行くに従い細く、浅くなり、砂層となって僅か10m程で消滅してしまっている。後者の溝は砂礫層の堆積であり、共に氾濫時の流路となつたものとみられた。

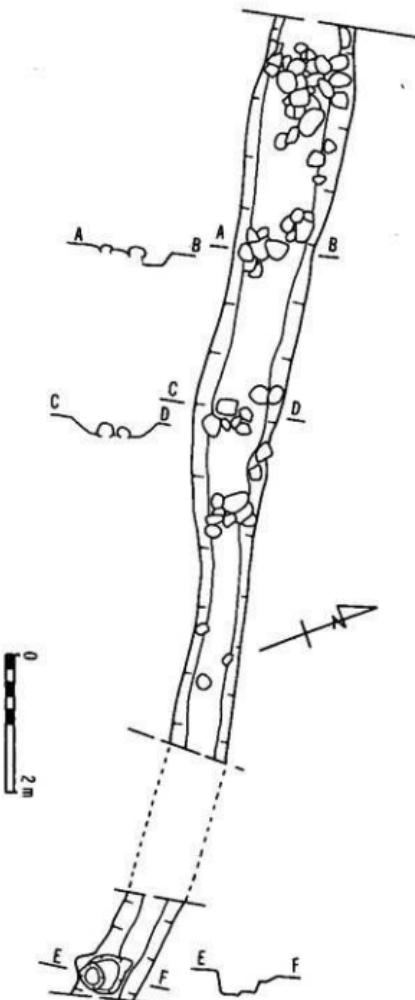


図79 溝B 1号 A

3. 土坑

2次調査で検出された土坑は10であり、土坑番号にはBを付し、1次調査との区別をすることにした。

B1・B2号土坑は平安時代の34号住居址に付いて検出されているが、3号～9号は2次調査区の北東端に土坑群とみる状態で発見され、10号土坑は南東端部に検出されている。これらを表にまとめ、特別なもの、遺物については後に記すことにした。

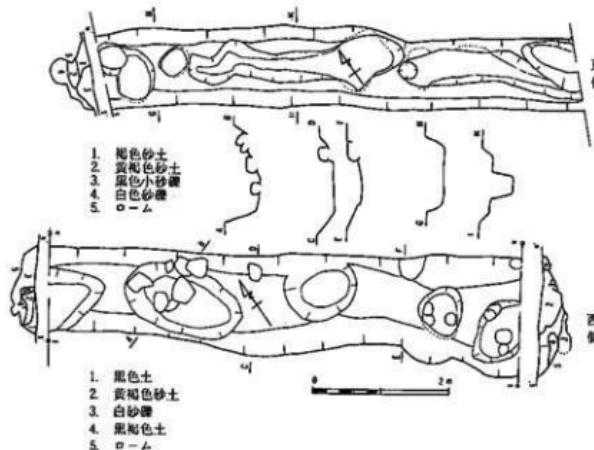


図80 溝B1号B

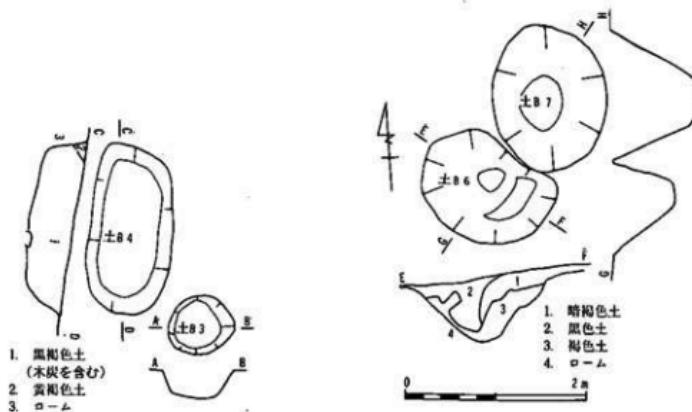


図81 土坑B3・4・6・7号

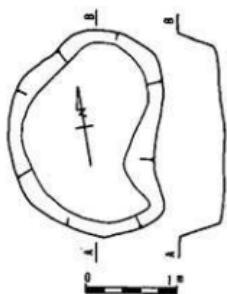


図82 土坑B 5号

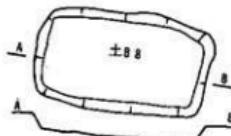


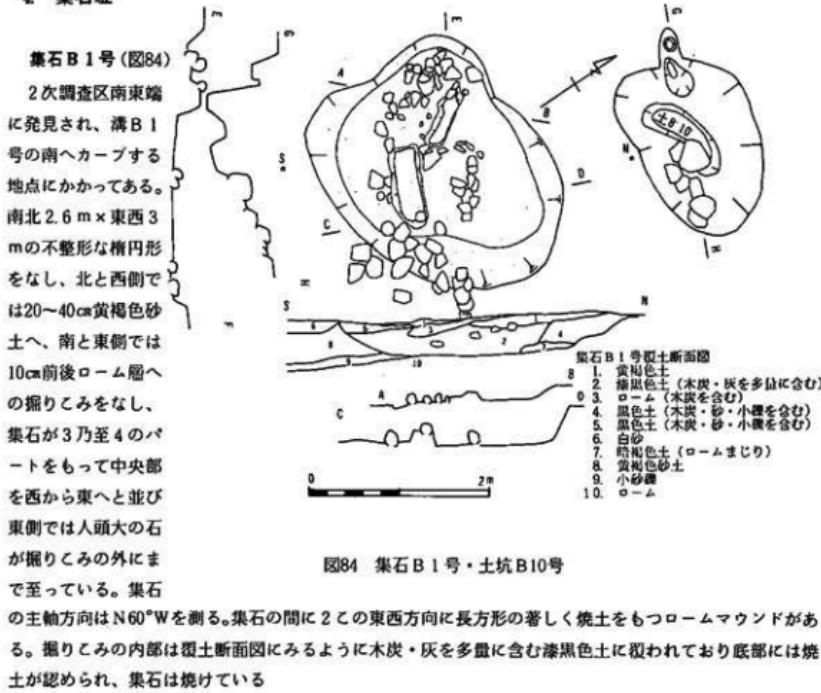
図83 土坑B 8・9号

第2次調査一覧表

番号	図 番号	大きさ(cm)	深さ (cm)	形 状	主軸方向	建 物	建物図 番号	備 考	時 期
B 1	67	100 × 75	30	楕円形	N 25° E	打石斧 1	98の 6		繩・後?
B 2	66	114 × 98	17	"	N 10° W	なし			
B 3	81	64 × 84	32	"	N 88° W	なし			
B 4	"	165 × 90	50	長楕円形	N 9° E	土師器・須恵器 ・灰釉陶器小片	なし		平安後半
B 5	82	223 × 163	52	楕円形	N 10° E	なし			
B 6	81	145 × 110	70	"	N 50° W	なし		土B 7号に接す	
B 7	"	160 × 125	95	"	N 1° E	繩文後期深鉢(無 文)片 打石斧 1	98の 7・8	土B 6号に接す	繩・後
B 8	83	110 × 190	18	隅丸長方形	N 66° W	打石斧(楔形)	98の 9		繩・後?
B 9	"	107 × 195	17	"	N 77° W	なし			
B 10	84	133 × 196	75	楕円形 西側にピット をもつ突出部 がつく。	N 70° W	打石斧 2	98の 10・11	集石B 1に隣接。 内部に2つの掘り こみと集石あり。	繩?

土坑B 3号・B 4号は確認調査時に3号住居址としたところに発見されている。その時石製模造品の2孔の有孔円板（図101の13）と鬼高期の壺の口縁部（図101の12）の出土をみ、期待されたが2次調査では耕作によって全面が荒らされ、住居址の存在は認められない状態となっていた。この荒れの下に土坑B 3号・B 4号は発見された。B 3号には遺物ではなく、B 4号よりは平安期後半の土師器・須恵器・灰釉陶器の小片数点の出土をみ、その期の土坑とみられた。しかし、石製模造器に関する遺構は検出にいたらなかった。

4. 集石址



第2次調査遺物図

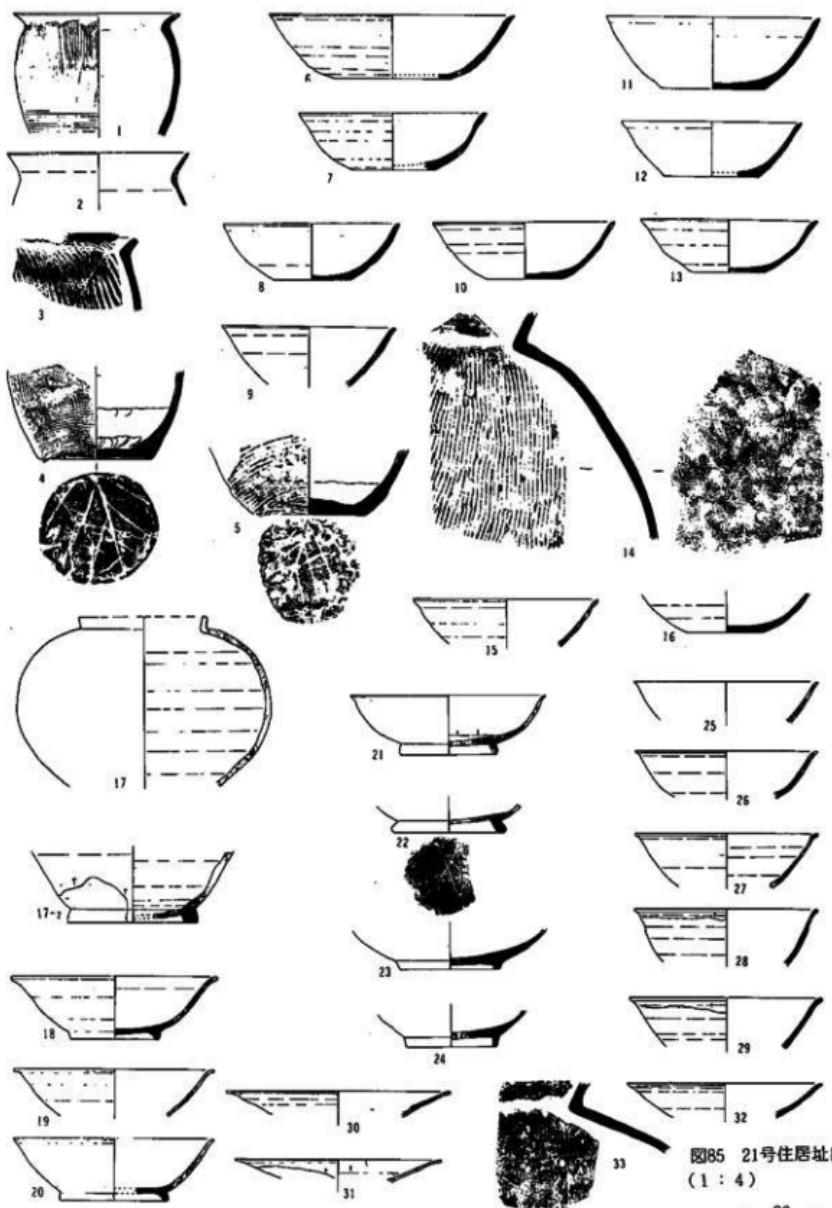


図85 21号住居址出土遺物
(1 : 4)

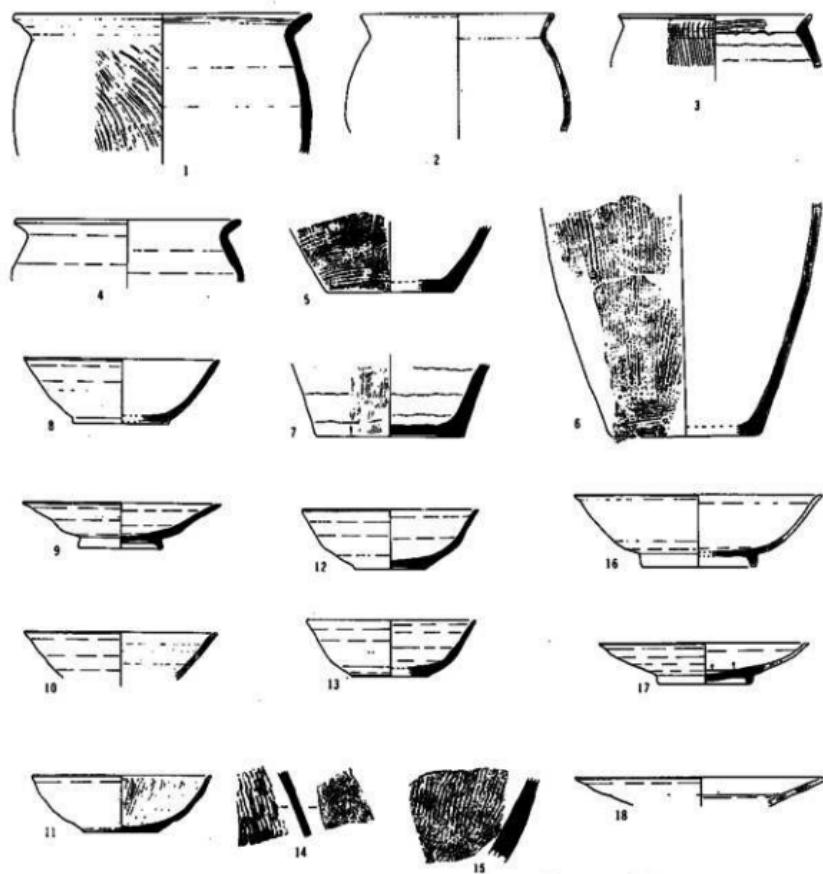


图86 18号住居址出土遗物 (1:4)

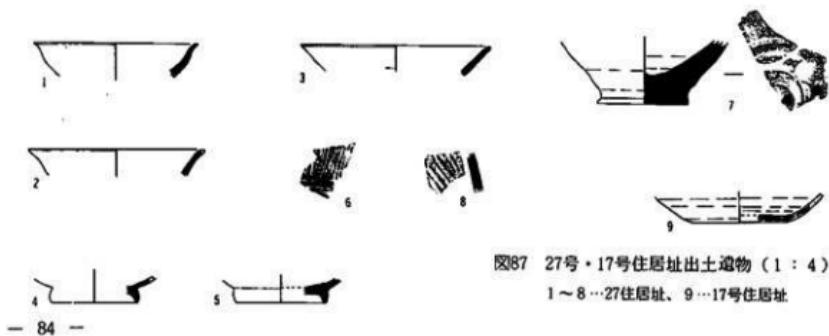


图87 27号·17号住居址出土遗物 (1:4)

1~8…27住居址、9…17号住居址

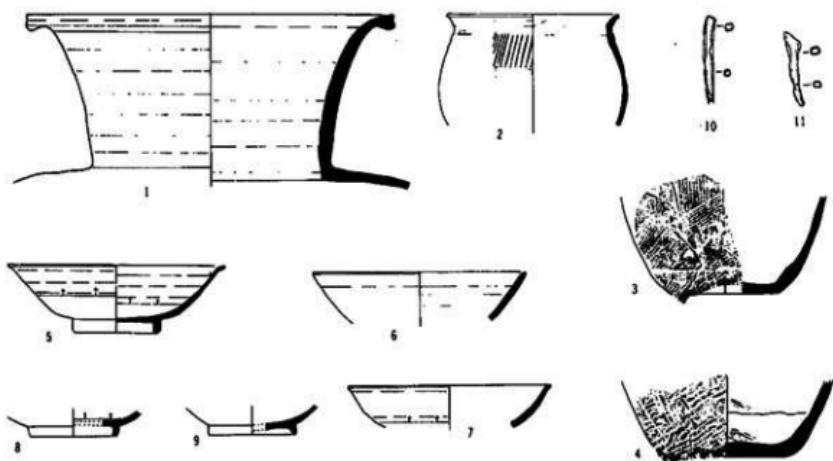


图88 24号住居址出土遗物 (1 : 4)

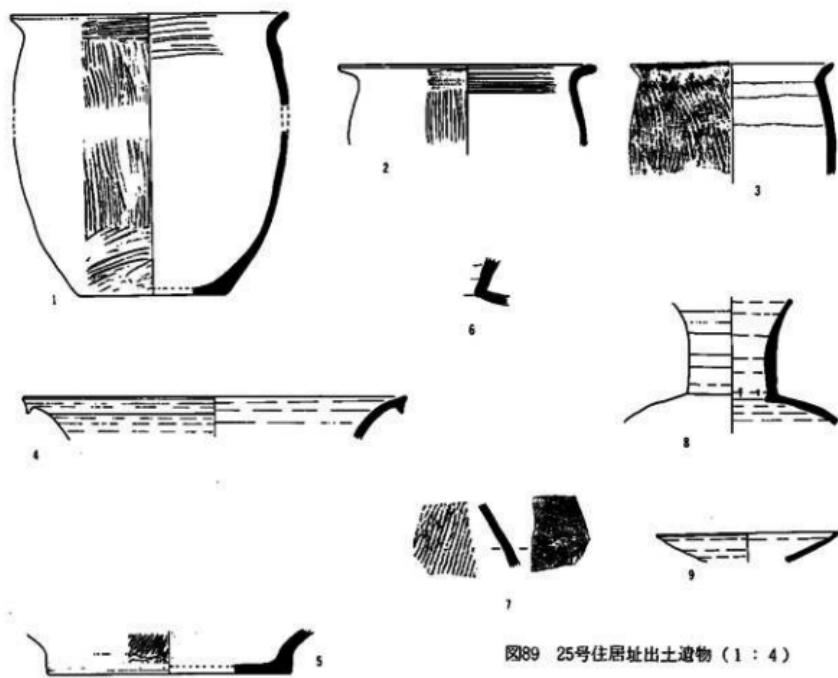


图89 25号住居址出土遗物 (1 : 4)

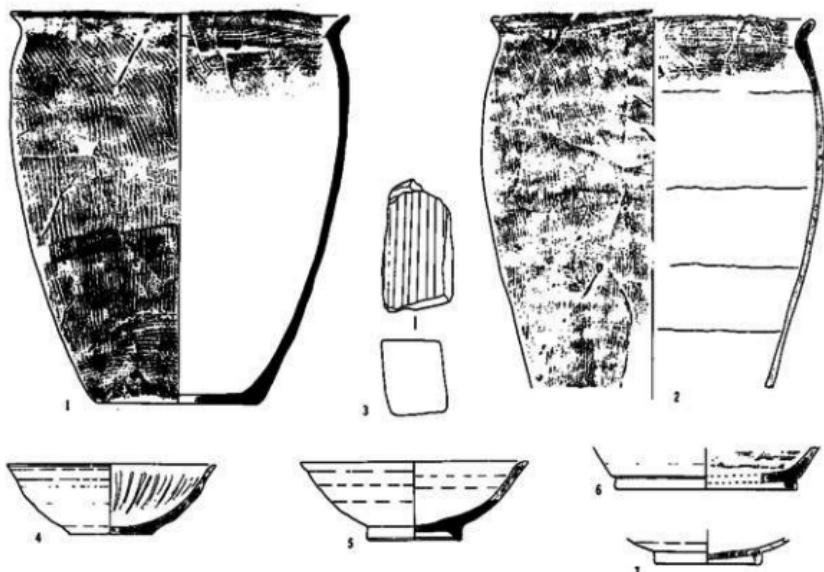


图90 38号住居址出土遗物 (1 : 4)

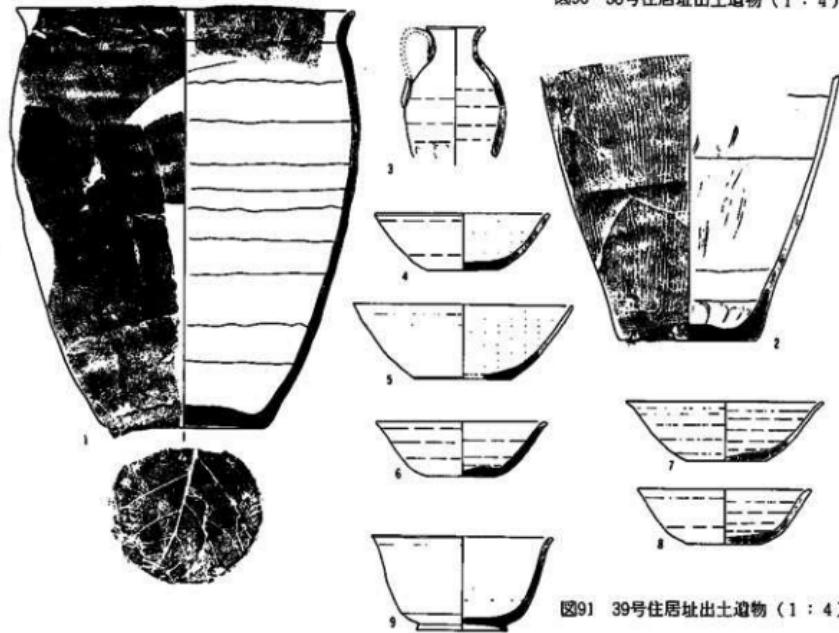


图91 39号住居址出土遗物 (1 : 4)

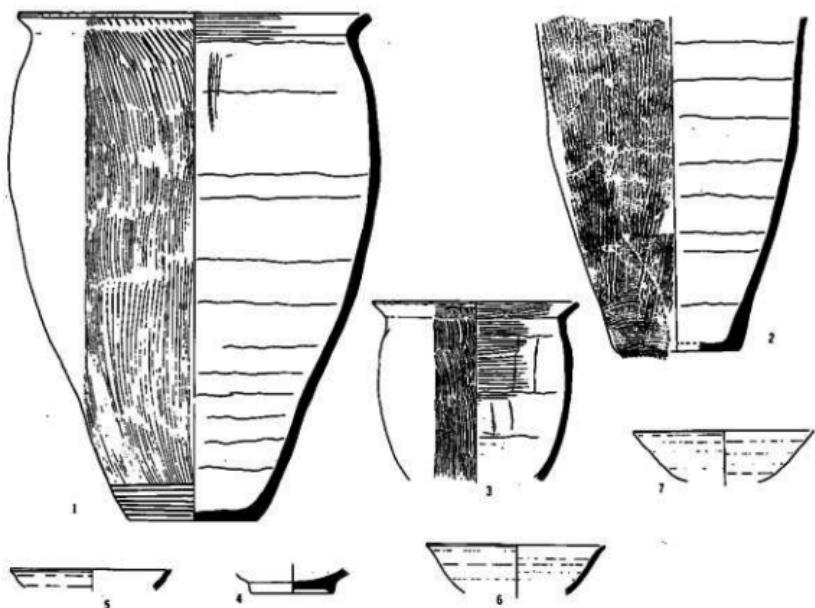


図92 30号住居址出土遺物 (1 : 4)

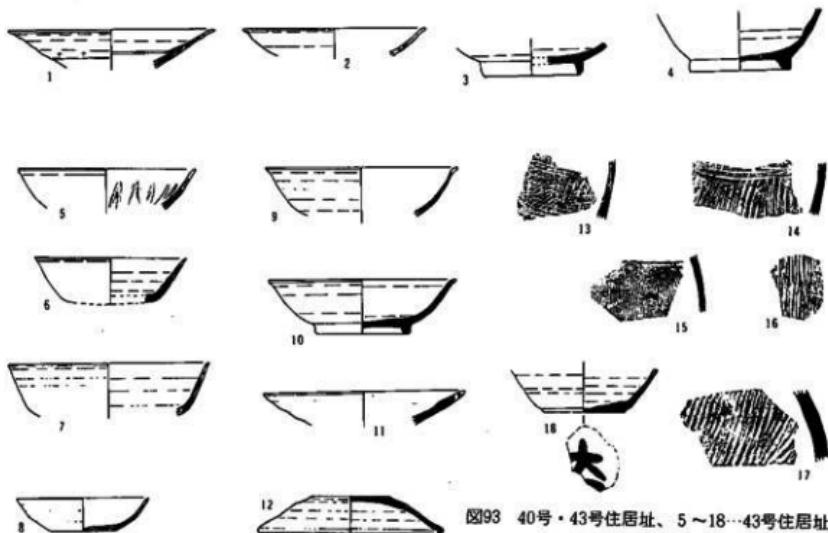


図93 40号・43号住居址、5～18…43号住居址

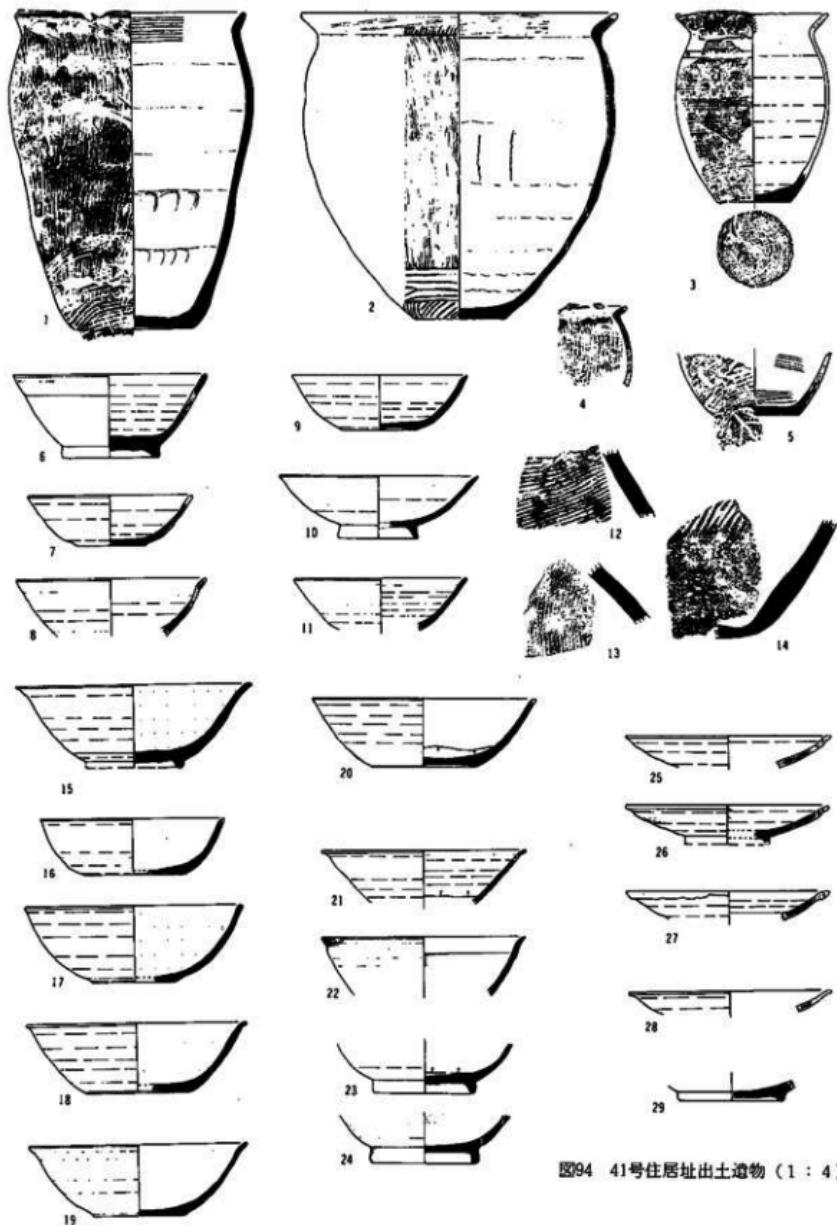


图94 41号住居址出土遗物 (1 : 4)

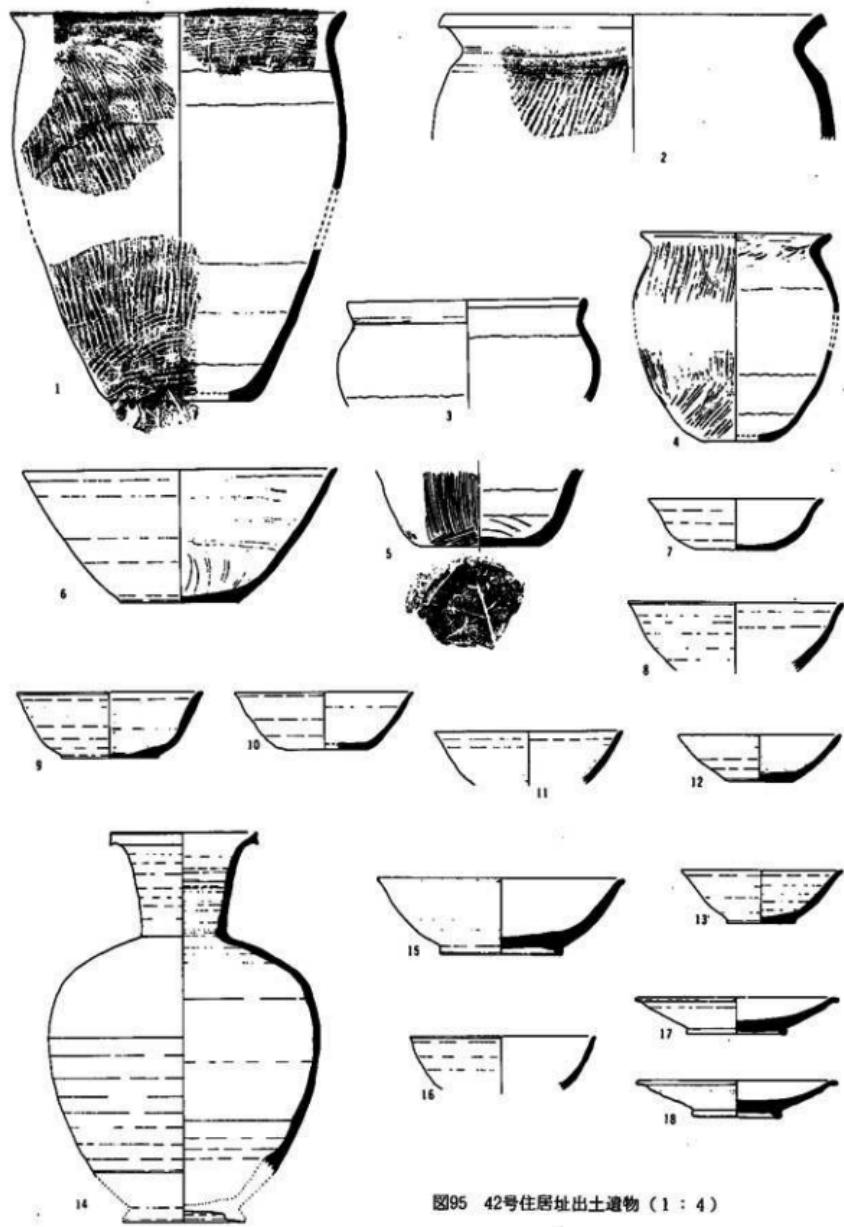


图95 42号住居址出土遗物 (1 : 4)

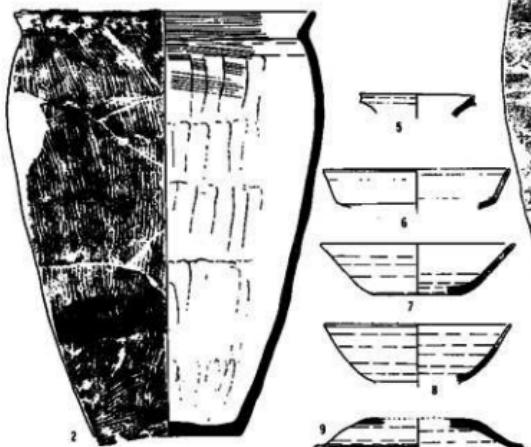
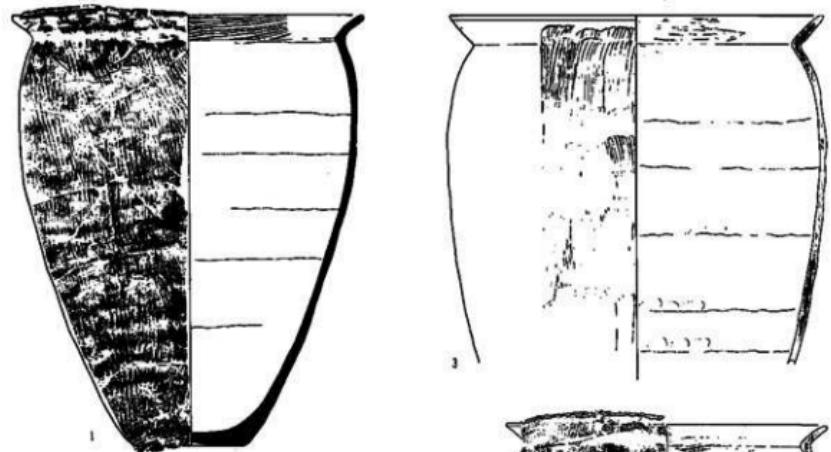


图96 46号住居址出土遗物 (1 : 4)

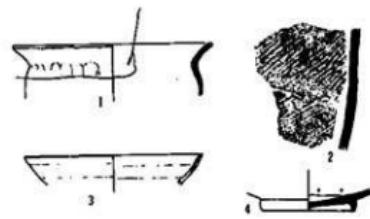


图97 20号・22号・23号・37号住居址出土遗物 (1 : 4)
1～4…23号住居址、5・6…37号住居址、7…20号住居址、8・9…22号住居址



图98 44号·36号住居址、土坑B 1号·7号·8号·10号、
集石1号出土遗物、16号·20号·29号·37号住居址
上别出土石器 (1 : 4)

1~4···44号住居址、5···36号住居址、6···土B 1、7·
8···土B 7、9···土B 8、10·11···B10、12···集石1号、
13·14···29住上層、15~18···16住上層、19·20···20住上層、
21·22···37住上層



图99 中世住居址出土遗物

(19号・32号・33号・34号住居址)(1 : 4)

1・2…33号住居址、3…19号住居址、4…34号住居址、
5…32号住居址

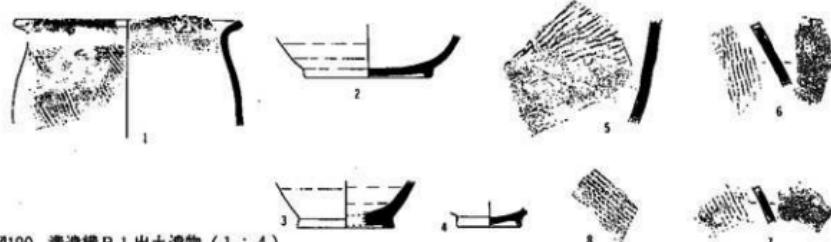


图100 满遣桥B1出土遗物(1 : 4)

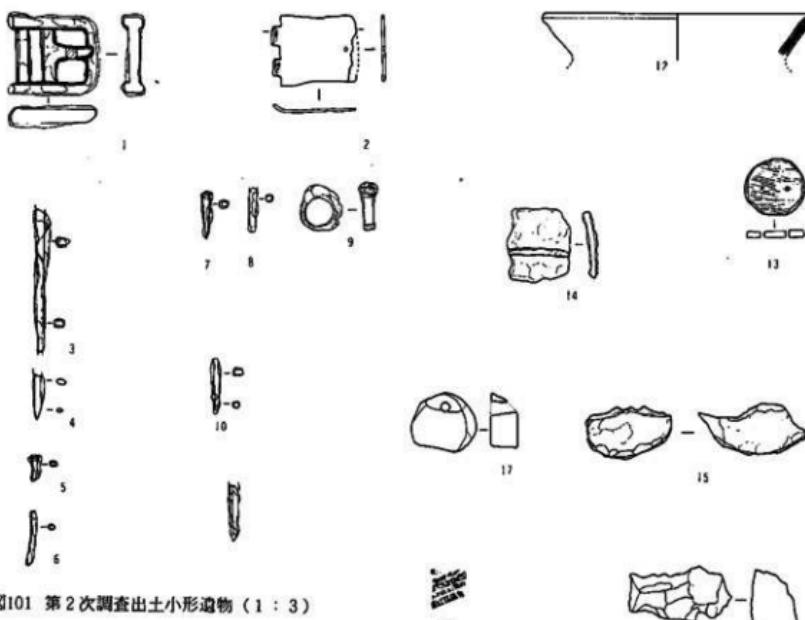


图101 第2次調査出土小形遺物(1 : 3)

1・11…21号住居址、2…46号住居址、3～6…27号住居址、7～9…40号住居址、10…18号住居址、12・13…14…43号住居址、15～18…16号住居址

IV ま　と　め

1. 猿小場遺跡は飯田市松尾1番地に所在する遺跡であるが、飯田市と鼎町に道路を境にし行政区画を異にし、鼎町では矢高原、飯田市松尾では北ノ原と呼ばれる段丘面に立地している。鼎町遺跡分布図によると長姫高校建設用地北境の道路北側が猿小場遺跡、西側が矢高遺跡となつており、飯田市遺跡分布図には遺跡名はのっていない。長姫高校用地内埋蔵文化財所在確認調査では遺物の散布は全面にみられていて、西と南側から東にかけては少なくなり、中央部から北側に遺物の出土は多く、遺構もそこに集中見され、鼎町地籍では遺構は発見されなかった。このため遺跡名を総称して猿小場遺跡とした。
2. 発掘調査により発見された遺構には縄文後期・弥生後期・平安時代・中世があり、これら時期以外には先土器時代とみるナイフ型石器と思われるもの、古墳時代の石製模造品の有孔円板の出土がある。しかし遺跡の中心をなす時期は弥生後期・平安時代・中世である。
3. 縄文後期には確認調査時にIVトレント南側に発見された柱穴群周辺より出土した加曾利B式に比定されるところの数点の土器片があり、後期遺構とみて調査を進めたが、出土遺物は少なく、識別困難な深い黒土層にあって調査を断念したものである。44号住居址は土器の出土ではなく、石器のみであり、打石斧の大形化と住居址の形態、本遺跡よりの縄文期の土器が後期のみであることからこの期のものと考えた。土坑7号よりは無文の土器の出土とみ、トレントよりも確認調査時に後期土器片の出土をみ、平安期住居址上層よりの打石斧10数点が検出され、縄文後期の遺構の段丘面に分散してあったものと思われる。
4. 弥生時代後期住居址4が調査されているが、36号住居址は石鍬1つの出土であり、45号住居址は覆土は耕作によって荒れ、遺物の出土ではなく、これら住居址の形態から弥生後期の住居址とみたものである。14号住居址は被火災の住居址であり、土器はセットで出土をみ、壺・甕・台付甕・高杯・浅鉢がある。後期初頭に位置づくもので、中期的な様相を残す図29の6の壺は口縁部から頭部に縄文を施すものである。7の浅鉢・8の高杯は当地方で初見のものであり、4・9・10とともに東海地方の土器である。石器には石鍬・有肩扁形石器・始刃磨石斧があり、なお磨製石器とその未製品がみられることは飯田地方の中長期的な様相を残すものとみられる。中期から後期への移行を示す資料として貴重である。11号住居址は後期後半中島式の洗練された櫛描の波状文と壺の口縁部の折れるように外反する典型的なタイプをもつものであり、石器にはやや小形化する石鍬と打製石包丁の出土をみている。第1次調査の1区・2区・4区よりの遺構外出土の石器に弥生後期とみる石鍬・打製石包丁の出土をみている。これからして、1次、2次調査区内にも未発見に終ったが、弥生後期の遺構があったともみられ、また遺構分布からみて用地外北側の段丘面にこの期の集落が展開しているものと推定される。
5. 平安時代の住居址25が発掘調査されており、その時期については10世紀前半の42号・46号住居址があり、他は11世紀後半のものである。前者の住居址の規模は大きく、竪穴の堀りこみは深く、後者の規模は一般的に小さく、竪穴の堀りこみは浅くなる傾向をもつ。出土遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器が主体をなしているが、13号住居址より綠釉陶片1点の出土をみている。金具では21号・46号住居址より帶金具が出土し、27号住居址では鉄塊・鉄錐數点が検出され、住居址の構造からみて工房址的なものとみられたが、その決め手はなかった。

須恵器の大半は地方産であり、この中に鉄分の多い胎土の茶褐色を呈す焼成の良い1群がみられるが、美濃・尾張地方に無い胎土であり、その生産窯については今後の課題である。

灰釉陶器は10世紀前半住居址出土のものは猿投産のみであり、長頸瓶・皿が多く、碗類が比較的少なく、胎土・焼成・ロクロ仕上げの良いものである。11世紀後半では美濃産が主体となり、猿投産との比率は6:1と猿投産が激減をきたし、製品の胎土・焼成ともに悪くなり、ロクロ仕上げも劣っており、猿投窯の衰退期に向ったことを示している。これに反し美濃産の胎土は良く碗類が多くなり、その口径に比し背の高い深目のものとなる。量産化された重ね焼の痕跡を残すものが数多くみられ、美濃産が猿投窯に変わって隆盛期の時期を知ることができるものと受けとめたい。しかし、11世紀末の21号住居址出土の美濃須衛窯産の無軸のものもみられ、灰釉陶器から無軸の山茶碗への転換を迎える時期の到来を示す資料もみられてきている。また、21号住居址出土の短頸壺は藏骨器であるべきものが住居址内出土は注目べきものといえよう。

10世紀前半の住居址調査は2であるが、用地外の北に道路を越えて、11世紀後半の住居址群とともに集落が展開されているものと推定される。

6. 中世の遺構は、住居址16、溝址2・土坑4、集石列群1がある。住居址はいずれも方形をなす竪穴住居址であるが柱穴は竪穴の外周に配されるが大部分であり、カマドはヘツツイを置いたとみる壁への掘りこみか、焼土のマウンドをもつかであるが、住居址の約3分の1にはカマドとみる施設も焼土も認められない。出土遺物は僅少で、遺物の出土をみない住居址もあり、その形態から中世住居址と考えたものもある。遺物には山茶碗・内耳土器・青磁碗・素燒土器片・鉄器片・鉄鋸・鉄塊等がある。

溝址は南北方向の1号と東西方向のB1号がある。B1号は西2分の1は盛土のため調査未了になっている。溝址の状態からして、1号・B1号は直角に近い角度で交わるものと予想されるが、その状態は1次・2次調査とも盛土や甚しい土石流の堆積のため把握にいたらなかった。B1号溝址は1号溝址から115m地点で南にカーブすることが確かめられたが盛土のためそれ以上の調査は断念したものである。溝底部の観察によれば1号溝址の2調査区一土石流堆積地帯の南側とB1号溝址調査西側では水の流れた痕跡は認められず、1号では土石流地帯を掘りこんだため疊層となり、疊の方向性は南北方向を示している。B1号東側は溝築後の洪水氾濫の流路となったとみる大きな抉りこみの穴が数多くみられ砂疊の堆積が溝内を埋め、また周辺に砂疊の広がりが各所にみられている。

溝址構築の時代は平安時代後半の38号住居址を東西に切っており、遺物には常滑・古瀬戸・山茶碗等中世の陶器があり、それらの中に混入する平安期の土師器・須恵器・灰釉陶器片があるが流入を示す證をもつものあり、明らかに中世構築とみられる。

調査は不十分に終ったが、溝底部の状態から、また地形、現在に至る水路をもたぬ点等から用水路として構築されたとみる点には疑問がもたれる。おそらく方形にめぐる中世の周濠的なものではなかったとも思われ、上部は削りとられ濠底部だけが残ったものとも考えられる。遺跡の南の上位段丘の南端部には信濃守護職小笠原氏の居城松尾城跡があり、その段丘面より僅か一段下がるが松川に面す段丘北端部に本遺跡はある。この地域は松尾城跡に関連する支城、または館址が構えられるにふさわしい位置にある。また、集石列群の配置は中世建物址ともみられるものである。それらについての調査・追究が不十分であった責任を痛感する。

摯な調査態度があり、さらに各分担についての遺物の整理・製図・原稿執筆を引受けられ、国道153号座光寺バイパス追跡調査の多忙な中にあって作業を進められたことはまことに有難いことであった。

遺物について名古屋大学樋崎彰一先生の、地形・地理については矢巻勝俊先生の御指導を得られ、確認調査から1次、2次調査にわたって作業に協力された方々の御骨折りがあり、飯田長姫高等学校・鼎町教育委員会をはじめ地域の方々の御理解・御協力を得たことを深謝したい。

(佐藤 雄信)

図版 I 遺 跡



猿小場遺跡全景 — 南西よりみる



猿小場遺跡全景 — 南東よりみる (前方が飯田市街と風越山)

図版II 確認調査



遺構確認調査中



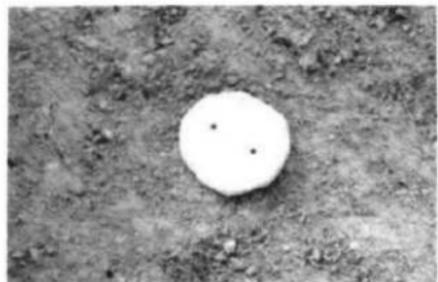
土層調査

5号・6号住居址の確認検出（後に2号・3号住居址とする）



石製模造品の出土

IVトレンチC区柱穴群周辺出土の縄文後期土器片



図版III 第1次調査



2号・3号住居址(右が2号)

4号住居址



6号住居址





13号(上)・14号住居址
(上部に石と炭化木あり)

13号住居址



14号住居址 — (掘り上げ)





集石列



溝Ⅱ・Ⅲ号（右Ⅱ号・左Ⅲ号）

溝址Ⅰ号 — 南より

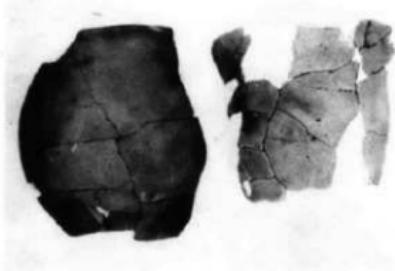


土坑12・13・14号（右より12号）



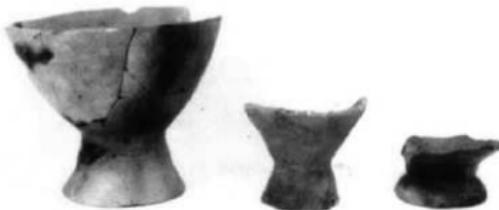
土坑17号 — たち割調査





14号住居址出土
弥生後期 親

14号住居址出土
弥生後期
高杯(左), 台付甕の台



14号住居址出土
弥生後期
浅鉢(左), 台付甕

14号住居址出土
弥生後期 石器



11号住居址出土 弥生後期 中島式壺口縁部



11号住居址出土 弥生後期 石器

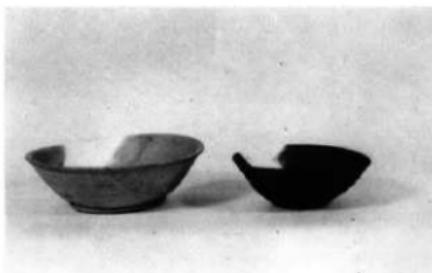
13号住居址出土 平安時代
土師器壺・灰釉陶器片・鐵器・須恵器壺

3号住居址出土 平安時代 土師器壺(左), 須恵器杯



13号住居址出土 平安時代
須恵器杯(左), 土師器杯(右)

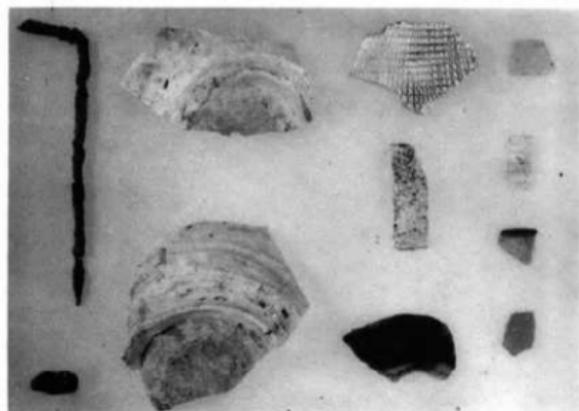
13号住居址出土 平安時代 土師器杯





土坑11号出土 仏飯器（中世）

中世住居址出土遺物
左…8住，中2列…9住，右…10住



土坑12号出土飾金具（上），8号住居址出土金器片（下）— 中世



図版IV 第2次調査

2次調査遺構群I — 西より



2次調査遺構群II — 下より41住・42住・43住





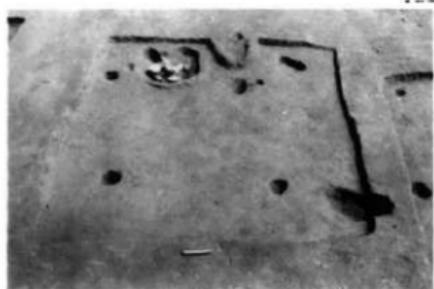
18号住居址 — 平安時代



18号住居址内部集石



27号住居址 — 平安時代 特殊建物址



24号住居址 — 平安時代



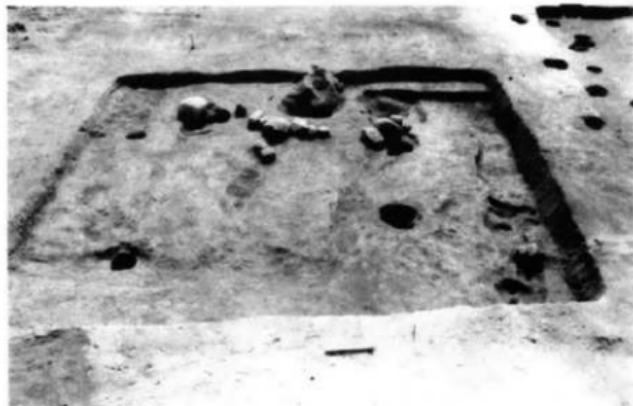
42号住居址 — 平安時代、東・西両壁にカマドをもつ



38号住居址 — 平安時代
(南側を溝址B1号が切っている)



38号住居址カマド



46号住居址 — 平安時代

46号住居址帶金具の出土

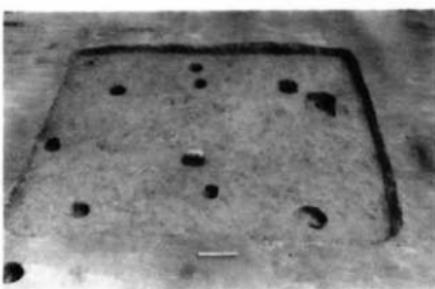


21号住居址帶金具の出土





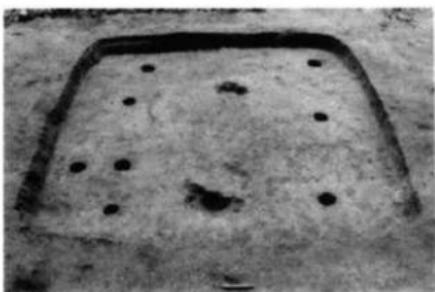
16号住居址 — 中世



29号住居址 — 中世



36号住居址 — 弥生後期



集石B 1号

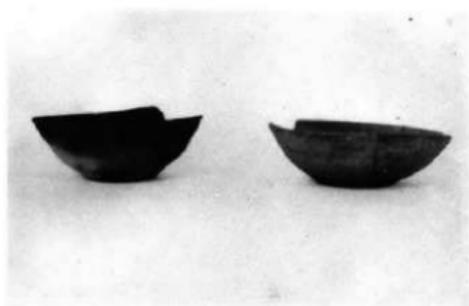


溝址B 1号 — 中世

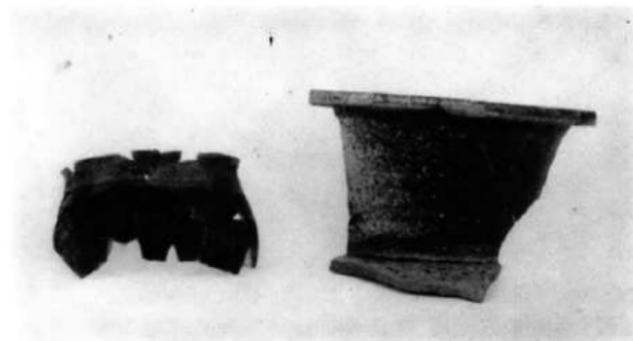
平安時代の遺物



18号住居址出土 土師器壺



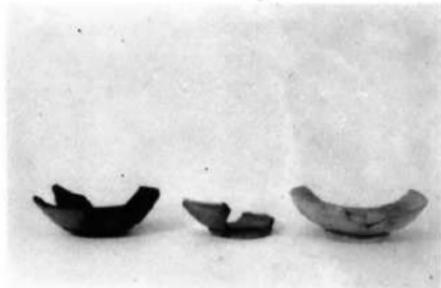
18号住居址出土 杯（左 土師器、右 須恵器）



24号住居址出土 土師器壺（左）、須恵器広口壺

21号住居址出土 灰釉陶器片

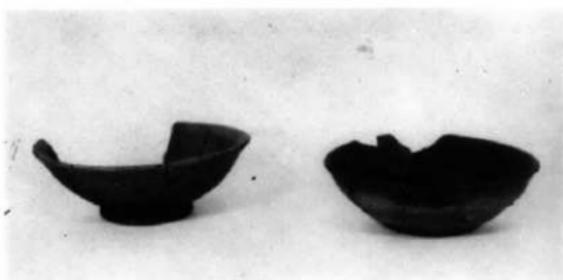
21号住居址出土 杯と椀





38号住居址出土 土師器甕

38号住居址出土 土師器（右），須恵器（左）甕



39号住居址出土
灰釉手付小瓶

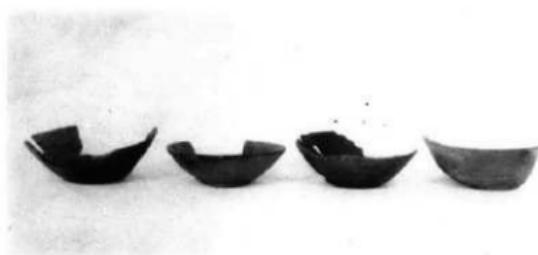
39号住居址出土
須恵器甕（左），杯（右）
土師器杯（中）



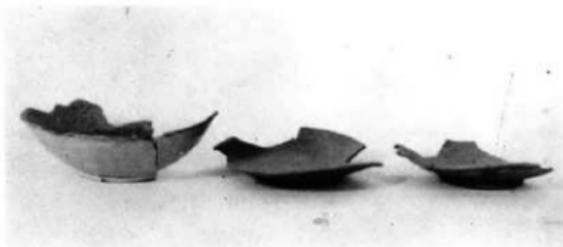
41号住居址出土
須惠器杯(左)、土師器甌



42号住居址出土
土師器杯(左・右)
須惠器杯(中)

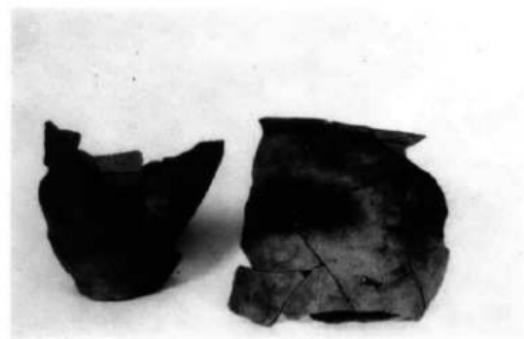


42号住居址出土
灰釉陶器盤と皿

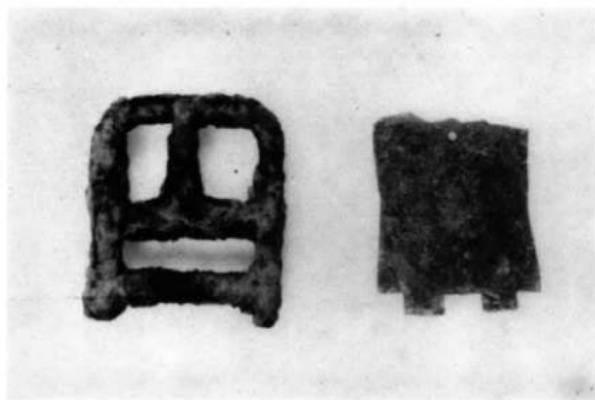


43号住居址出土
灰釉陶器皿





46号住居址出土 土師器甕



21号・46号住居址出土 带金具（左 21住，右 46住）

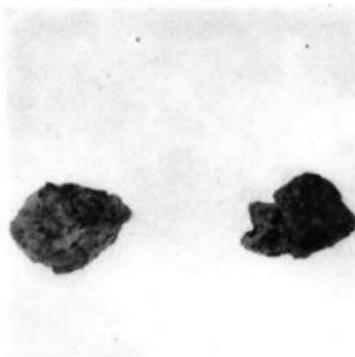
27号住居址出土 鉄塊と鉄器片



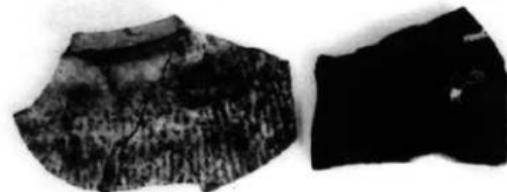
46号・3号（1次調査）住居址出土 鉄塊（下 2 こが3



各時期の遺物



16号住居址出土 鉄塊（中世）



21号住居址（左）溝址B 1号出土遺物

36号（右…弥生後期）、44号（左4C）住居址出土石器



石製模造品 — 有孔円板
(確認調査時土B 3・4号周辺出土)

ナイフ型石器 — 左42住覆土。
右々 2—9グリッド黒土より出土



図版V
発掘調査スナップ



1次調査



1次調査



2次調査 調査にかかる



2次調査 遺構検出作業

調査組織

1. 猿小場遺跡埋蔵文化財発掘調査委員会

勝野好一	飯田市教育委員会委員長
沢柳俊夫	飯田市教育委員
大田中一郎	"
松島勝郎	"
林研二	飯田市教育長
多田井陸人	飯田市教育次長
相津実	飯田市教育委員会社会教育課長(53年度)
山下舜平	" (54年度)

2. 調査団

團長	佐藤勉信
指導者	関好一 (県教委文化課指導主事)
調査員	郷道哲章 (下伊那農業高校教諭)
"	塙沢仁治
"	小林正春
"	佐々木嘉和
"	山下誠一
"	佐合英治
"	宮下秀広

3. 指導者

橋崎彰一	名古屋大学教授
大沢和夫	飯田女子短大教授
今村善興	県教委文化課指導主事
丸山敬一郎	"
矢龜勝俊	元市教育長(地質学)

4. 事務局

飯田市教育委員会社会教育課	
相津実	社会教育課長(53年度)
山下舜平	" (54年度)
竹村宗丘	課長補佐係長
代田一行	主任
熊谷里恵子	"

5. 作業員

福島明夫	北村重美	中平兼茂	和田彦九郎	木下昌明	久保田倫正
伊原広隆	山本和生	山下博之	和原稔	今村久	今村春一
木下正尚	木下雅夫	篠田親治	矢沢公人	佐藤いな	佐藤いな
平沢博	今村式部	木下正治	竹中壽夫	北村よし	北村よし
田口さなえ	牧内住子	渡辺いさ子	黒河内美恵子	崎嶋ことみ	崎嶋ことみ
石田いちゑ	関口ふき子	松下しおぶ	福沢妙子	初小林	とくみ
今村勝子	細井光代	佐々木青子	宮川くに子	松田悦子	とくみ
関島美恵	正木睦子	小池一美	岡田順子		
平沢玲子					

おわりに

昭和53年度当初飯田長姫高等学校が飯田市松尾1番地を中心とする地籍に移転建設されることが本決りになり、県教育委員会高校教育課及び飯田長姫高等学校から用地内の所在追跡の有無とその発掘調査についての依頼があった。

用地内の所在追跡については既に県教育委員会文化課の担当指導主事により事前調査が行なわれて追跡は確認されていた。しかし用地内面積が45,000m²もあり用廃も飯田市と郡町に分れているので、どちらの教育委員会が受託し発掘調査をするか、事業主体が県であるので当然県が直接調査すべきであるとの意見もあり、その間調査体制の問題もふくめて委託に関し曲折はあったが、用地内の埋蔵文化財の所在確認調査を飯田市教育委員会が受託することにし、昭和53年8月21日委託契約を締結した。

確認調査は佐藤魁信先生を団長にお願いして、9月1日から9月30日の間23日間に亘って実施され、調査面積はグリットによる調査280m²、トレンチによる調査5,167.5m²で確認された追跡は住居址12、柱穴址1、土塙5、溝3であった。

つづいて10月2日付文書で県教育委員会より発掘調査の依頼があった。計画によると調査面積2,200m²で、昭和54年3月31までに完了することになっている。この点について当委員会として種々検討し何とか受託したいと考えたが、当委員会として国道153号線座光寺バイパスの調査と、畠地帯総合土地改良事業小浜地区大原工区の大原追跡調査と2ヶ所実施中で調査員及び発掘作業員の確保が困難であることと、2,200m²の現場発掘を12月31日までに終了し54年3月31日までに報告書発行完了することは到底不可能との観点から全面的に引受け出来ない旨10月24日付文書で回答した。

しかし県教育委員会及び飯田長姫高等学校としても建設計画による着手時期もあり、今後の全体計画にも影響あるとの点から再度受託の要請があったので、数回の県及び高校との協議の結果校舎建築の主体となる地区を第一次調査として53年度中に現場発掘のみ終る、主として校庭等として計画されている地区については第二次調査として昭和54年度実施する。したがって整理及び報告書発行も第一次調査をふくめて54年度事業とする。尚調査員については特別の配慮で、県文化課指導主事の関好一先生を指導者として長期派遣願える了解も得たので、全面的に受託することとし、12月1日第一次調査の契約を締結した。長野県の南端といえ12月になって現場発掘は無理とも考えたが、12月8日から12月28日まで1日も休まず途中降雪で半日中止したのみで、一部、ブルトーザー等の機動力をも入れ実施した。調査団長は確認調査に引き続き佐藤魁信先生、指導者として関好一先生、調査員として郷道哲章先生、座光寺バイパスより塩沢仁治先生はじめ小林正春、佐々木嘉和、山下誠一、佐合英治、宮下秀広の各調査員が交代で各追跡を担当し作業員については郡町及び教育委員会の配慮により募集などの協力を頼って実施した。

調査期間中長姫高校の生徒による発掘作業及び測量、下伊那農業高校の郷土クラブの高校生が集団で調査に参加されたことも意義深いものがある。

第二次調査は昭和54年7月11日より9月6日まで団長の佐藤先生を中心にして進められた。この調査は夏期だったので調査地が乾燥し固くなるなどの点で多少不便ではあったが、順調に進捗し無事完了することが出来た。

また県教育委員会文化課、高校教育課、飯田長姫高等学校の関係者が常に理解と協力をしてくれたり、

県教委文化課指導主事丸山敬一郎先生、今村善興先生、地元の飯田女子短大教授大沢和夫先生、地質学の矢龜勝俊先生には適切なご指導をいただき、報告書の執筆は佐藤寛信先生が核となり、各担当調査員がそれぞれ記述し、その総括を再び佐藤先生にお願いし、各位の献身的な努力によりここに完了出来たことに對し深く感謝申しあげます。

昭和55年3月

飯田市教育委員会

猿小場遺跡

長野県飯田長姫高等学校建設用地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

- 1980.3 -

長野県飯田長姫高等学校
長野県飯田市教育委員会

印刷 株式会社秀文社

